

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第9集

国東六郷山本山本寺

智 恩 寺

発掘調査報告

1992

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館

智 恩 寺

はじめに

くにさき六郷満山寺院の一つ良薬山智恩寺の三年間に及ぶ発掘調査が完了した。智恩寺は高田の町にもっとも近い大字鼎の標高六〇メートル足らずの小高い丘陵の先端部にあって、山岳六郷満山寺院の中では、いわば平野に近接して建立された寺院である。現在無住の寺となっているが、近世の講堂、六所権現などがあり、中でも近世峰入りの墨書銘のある講堂は広く知られている。しかし、その往時の姿については、伝説の域を出ないことが余りにも多い点は、他の六郷山寺院と同然である。

このたび、「うさ・くにさきの歴史と文化」を研究主題とする本館は、智恩寺を選び、はじめに六郷満山寺院の考古学的調査を実施した。しかし、寺院とはいえ、奈良・京都の大伽藍の寺々とは違って、一抹の不安もあったが、三年間の調査によって可成のことが解明できたことは、これからの六郷満山寺院の調査に一つのレールを敷きえたものと自負しているところである。

詳細は本文をご覧いただきたいが、九世紀には瓦葺きの建物があつたこと、十三世紀には広い範囲で諸施設が築造されたこと、戦国時代には院主は大友氏の被官となって防衛施設を整えるが、大友氏と命運を共にしていることなどが明らかになった。その上、何より寺院跡・院主坊跡・坊跡・城跡などには、中世の景観を留めていることが判明した。これらの保護保存は地域の課題であり、この冊子が少しでもお役に立てば幸いである。

終わりに、この三年間、大変お世話になった智恩寺地域の方々、豊後高田市教育委員会の関係者、発掘調査指導委員の皆さんに、厚くお礼申し上げますと共に、これからも変わらぬご指導ご協力を切にお願いするものである。

平成四年三月

例言

1 本書は大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館が平成元年度から同三年度まで、国の補助を受けて実施した豊後高田市大字 柳字堂山ほかに所在する智恩寺遺跡発掘調査事業の報告書である。

2 調査中、調査委員の先生方のほか、現地で石井進氏（東京大学教授）、八賀晋氏（三重大学教授）に、また報告書作成にあたり坪井清足氏（大阪文化財センター理事長）、五十川伸矢氏（京都大学埋蔵文化財研究センター）、中山光夫氏（新日本製鐵㈱）、山本信夫氏（太宰府市教育委員会）、玉水光洋氏（大分市歴史資料館）、大分県文化課の諸氏にご教示を得た。

3 調査にあたり、知恩寺地区区長安部崇氏、智恩寺堂役門岡正和氏、長安寺住職（智恩寺兼務住職）松本文尋氏、高田郷土研究会脇谷末雄氏、豊後高田市教育委員会の協力を得た。

4 梵鐘鑄造土坑出土の金属については、中山光夫氏に分析を依頼し、玉稿をいただいた。

5 遺構・遺物の実測等は調査員の小柳、川副のほか岡崇氏（別府大学学生）、坂本かおり（資料館）、久保美子（同上）の協力を得た。なお、講堂と鬼面の作図は段上達雄による。

6 遺構および遺物の写真は小柳が撮影したが、鬼会の写真は門岡正和氏、代忠藏氏、東政則氏に提供していただいた。

7 本書の執筆は次の通りである。

第一章 小柳和宏

第二章 小柳和宏

第三章 飯沼賢司

第四章

第五章

第六章

第七章

附章

小柳和宏

真野和夫（瓦の部分）・小柳和宏（瓦以外
の部分）

小柳和宏

小柳和宏

段上達雄（当館主任研究員）

渡辺文雄（当館主任研究員）

段上達雄

真野和夫

中山光夫（新日本製鐵㈱）

8 本書の編集は小柳が行った。

(一)

(二)

(三)

(四)

(五)

目次

はじめに

例言

第一章 序説

(一) 調査の経緯と経過 1

(二) 調査団の構成 1

第二章 智恩寺の位置と環境 3

第三章 文書からみた智恩寺の歴史 5

(一) 六郷山の中の智恩寺 5

(二) 来籠郷と智恩寺 6

(三) 智恩寺の成立 8

(四) 中世の智恩寺院主の系譜 9

(五) むすびにかえて——智恩寺の終焉—— 10

第四章 事前調査と調査地点の選定 13

(一) 地籍図の調査 13

(二) 地名の調査 14

(三) 発掘地点の選定 16

第五章 遺構・遺物の調査 17

(一) 智恩寺以前 17

1 弥生土器 17

2 須臾器 17

3 小結 18

(二) 堂山地区 18

1 遺構 20

2 出土遺物 22

3 小結 31

(三) 寺屋敷地区 33

1 遺構 38

2 出土遺物 41

3 小結 43

(四) イヤの谷地区 44

1 遺構 44

2 出土遺物 46

3 小結 46

(五) 西域地区 48

1 遺構 48

2 出土遺物 50

3 小結 50

第六章 景観の復元とその変遷 51

第七章 まとめ 58

附章 智恩寺関連資料調査 59

(一) 智恩寺の法会 59

1 修正鬼会 60

2 六郷満山峯入り 68

(二) 智恩寺の仏像と石造物 71

(三) 智恩寺の講堂 75

1 建築構造 75

2 講堂の役割と意味 78

(四) 関東半島の古瓦 79

(五) 智恩寺鑄造土坑出土銅塊の金属学的調査 86

智恩寺関連文書集成 91

智恩寺関連年表

写真図版

挿図目次

第1図	智恩寺周辺の遺跡(古墳・中世)……………	4
第2図	南北朝期における六郷山寺院の分布……………	6
第3図	智恩寺調査地区名……………	15
第4図	智恩寺出土弥生土器・須惠器……………	17
第5図	堂山地区調査区位置図……………	18
第6図	堂山地区拡張区遺物出土状態……………	19
第7図	堂山地区拡張区鑄造土坑……………	20
第8図	堂山地区墓地……………	21
第9図	堂山地区墓地第1ピット(納骨穴)……………	22
第10図	堂山地区拡張区瓦包含層出土土器……………	23
第11図	堂山地区拡張区出土軒瓦……………	24
第12図	堂山地区拡張区出土丸瓦……………	25
第13図	堂山地区拡張区出土平瓦……………	26
第14図	堂山地区拡張区出土瓦叩き文……………	27
第15図	堂山地区拡張区鑄造土坑出土遺物……………	29
第16図	堂山地区拡張区表土出土遺物……………	29
第17図	堂山地区拡張区鑄造土坑出土鑄型……………	30
第18図	堂山地区墓地第1ピット出土寛永通寶……………	31
第19図	寺屋敷地区調査区位置図……………	33
第20図	寺屋敷地区方形溝(溝B)……………	34
第21図	寺屋敷地区拡張区……………	35
第22図	寺屋敷地区トレンチ……………	37
第23図	寺屋敷地区拡張区第1号建物……………	38
第24図	寺屋敷地区拡張区第2号建物……………	38
第25図	寺屋敷地区拡張区土坑……………	39
第26図	寺屋敷地区拡張区遺構出土遺物……………	40

第27図	寺屋敷地区拡張区表土出土遺物……………	40
第28図	寺屋敷地区拡張区出土瓦・土鏝……………	41
第29図	寺屋敷地区各トレンチ出土遺物……………	42
第30図	イヤの谷地区調査区位置図……………	45
第31図	イヤの谷地区第2グリット……………	46
第32図	イヤの谷地区グリット出土遺物……………	47
第33図	イヤの谷地区溝出土遺物……………	47
第34図	西城地区調査区位置図……………	48
第35図	西城地区第1トレンチ南壁土層図……………	49
第36図	西城地区出土遺物……………	49
第37図	西城地区東調査区位置図……………	49
第38図	西城地区東第1・2トレンチ……………	49
第39図	中世の石遺物分布図……………	53
第40図	長安寺と若戸寺の構造……………	55
第41図	智恩寺の荒鬼①面……………	66
第42図	智恩寺の鈴鬼②面……………	67
第43図	智恩寺の中世・近世初頭の石遺物……………	73
第44図	智恩寺の講堂(1)……………	76
第45図	智恩寺の講堂(2)……………	77
第46図	国東の古瓦(1)……………	81
第47図	国東の古瓦(2)……………	82
第48図	国東の古瓦(3)……………	83
第49図	国東の古瓦(4)……………	84
第50図	国東の古瓦(5)……………	85
附図1	智恩寺小字境界図……………	2
	智恩寺地区土地利用復元図……………	

図版目次

- 図版 1 智恵寺空中写真
- 図版 2 智恵寺遺景・寺屋敷地区・西城地区
- 図版 3 講堂と回東塔・山祇社・講堂の柱に残る峯入り時の墨書
- 図版 4 堂山地区拡張区・同上遺物出土状況・同上瓦出土状況
- 図版 5 堂山地区拡張区鑄造土坑鑄型出土状況・同上定盤近景・同上土坑全景
- 図版 6 堂山地区墓地・同上・同上第1ピット寛永通寶出土状態
- 図版 7 堂山地区講堂前調査区・寺屋敷地区空中写真・同上近景
- 図版 8 寺屋敷地区入口部分・同上堀の残存状況・同上拡張区完備状況
- 図版 9 寺屋敷地区拡張区溝・同上溝Bの石列・同上土坑
- 図版 10 寺屋敷地区拡張区南西トレンチ石組・同上第2トレンチ・同上第4トレンチ
- 図版 11 寺屋敷地区第8トレンチ・同上第8トレンチ・同上第7トレンチ
- 図版 12 イヤの谷地区・同上・同上調査風景
- 図版 13 イヤの谷地区第1グリット・同上第2グリット・同上第2グリット發出土状況
- 図版 14 西城地区第1郭北側・同上第1郭張り出し・同上
- 図版 15 西城地区第1トレンチ・同上第7トレンチ・西城地区東第1トレンチ
- 図版 16 回東塔・宝塔塔身
- 図版 17 院主墓地・宝篋印塔・板碑
- 図版 18 觀世音菩薩立像・薬師如来坐像
- 図版 19 智恵寺出土の弥生土器・須恵器
- 図版 20 堂山地区拡張区出土土器・同上出土瓦(1)
- 図版 21 堂山地区拡張区出土瓦(2)
- 図版 22 堂山地区拡張区鑄造土坑出土遺物
- 図版 23 堂山地区拡張区鑄造土坑出土梵鐘鑄型・同上出土溶解炉壁
- 図版 24 堂山地区墓地第1ピット出土寛永通寶
- 図版 25 寺屋敷地区出土遺物(1)
- 図版 26 寺屋敷地区出土遺物(2)
- 図版 27 寺屋敷地区出土遺物(3)
- 図版 28 各地区出土遺物

第一章 序説

(一) 調査の経緯と経過

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館では、開館以来八幡文化の解明と共に国東半島に展開する六郷山文化の解明が一つのテーマとなっている。これまで、宇佐宮弥勒寺の発掘調査や国東半島の山染荘および都甲荘調査における補足的な発掘調査は行ってきたが、六郷山寺院そのものに対する発掘調査は行っていない。今回は、国東半島におけるリゾート開発や先端技術関連の工場建設の活発化という状況の中で、詳細な地形図の作成と遺構の確認という基礎的な資料を得るために六郷山寺院に対する調査を行うことになった。

その第一番目に着手したのが智恩寺である。智恩寺は本山本寺の一つで、無住とはいえず本山系の寺院の中では唯一命脈を保っている寺院である。また、立地が台地上であることから大規模な改変が行われた形跡がなく、調査対象としては好条件を備えていた。

しかし、智恩寺は市街地に近いこともあり開発行為が予想され、早急な地形図の作成と遺構の広がりなどを把握する必要がある。そのため平成元年度から同三年度まで、国庫補助事業智恩寺遺跡発掘調査として国の補助を受け発掘調査を行った。各年度の主な調査は次の通りである。

【平成元年度】・航空測量による講堂周辺の五〇〇分の一地形図の作成

・平成二年二月一日調査委員会

・平成二年三月十九日から同二十一日まで寺屋敷地区の

伐採と遺構確認調査

【平成二年度】・航空測量による智恩寺台地の千分の一地形図の作成

・平成二年十一月十六日から平成三年三月十三日まで寺

屋敷地区および西城地区の遺構確認調査

・平成三年二月十八日調査委員会
 ・平成三年六月四日から十月十八日まで登山地区、イヤの谷地区、寺屋敷地区の発掘調査
 ・平成三年九月十三日調査委員会

(二) 調査団の構成

各年度の調査委員、調査員は次の通りである。

【平成元年度】

調査委員

渡辺澄大 別府大学教授

賀川光大 別府大学教授

中野幡能 別府大学教授

小田富士雄 福岡大学教授

沢村 仁 九州芸術工科大学教授

関 秀夫 東京国立博物館有史室長

藤澤典彦 (財)元興寺文化財研究所研究員

調査員

後藤正二 大分県教育委員会文化課長

後藤宗俊 課長補佐

清水宗昭 埋蔵文化財第一係長

安藤光男 豊後高田市教育委員会社会教育課長

是永好道 文化財係長

後藤昭六 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館長

岡田正彦 副館長

甲斐忠彦 学芸課長

真野和夫 調査課長

飯沼賢司 調査課研究員

小柳和宏
久恒章子

調査課研究員
嘱託

調査事務

野村幸雄 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館総務課長

橋本安義 庶務係長

【平成二年度】

調査委員

賀川光夫 別府大学教授

中野輔能 別府大学教授

後藤宗俊 別府大学教授

小田富士雄 福岡大学教授

沢村 仁 九州芸術工科大学教授

関 秀夫 東京国立博物館有史室長

藤澤典彦 (財)元興寺文化財研究所研究員

調査員

後藤正二 大分県教育委員会文化課長

清水宗昭 埋蔵文化財第一係長

安藤光男 豊後高田市教育委員会社会教育課長

是永好道 文化財係長

後藤昭六 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館長

岡田正彦 副館長

甲斐忠彦 学芸課長

真野和夫 調査課長

飯沼賢司 調査課主任研究員

小柳和宏 調査課研究員

川副麻理子 嘱託

調査事務

野村幸雄 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館総務課長

橋本安義 庶務係長

【平成三年度】

調査委員

賀川光夫 別府大学教授

中野輔能 前別府大学教授

後藤宗俊 別府大学教授

小田富士雄 福岡大学教授

沢村 仁 九州芸術工科大学教授

関 秀夫 東海大学教授

藤澤典彦 (財)元興寺文化財研究所研究員

調査員

清水宗昭 大分県教育委員会文化課埋蔵文化財第一係長

波谷忠章 埋蔵文化財第二係長

安東信之 豊後高田市教育委員会社会教育課長

後藤正二 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館長

田中巳世毅 副館長

甲斐忠彦 学芸課長

真野和夫 調査課長

飯沼賢司 調査課主任研究員

小柳和宏 調査課研究員

川副麻理子 嘱託

調査事務

伊藤正行 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館総務課長

井上美英 庶務係長

第二章 智恩寺の位置と環境

智恩寺は豊後高田市大字馬字堂山ほかに所在する。「智恩寺」は江戸時代以降明治初年までの村名であったが、明治八年に周辺の高宇田村、鴨尾村と合併し馬村となったことから、大字編成では大字馬に入る事になったのである。

智恩寺は桂川とその支流である都甲川の合流点付近を望む標高約六十坪の丘陵上にある。この丘陵は都甲川に沿って東西に伸びるのであるが、丘陵上は平坦地が少なく大小の谷が複雑に入り込んでいる。智恩寺はその丘陵の最も西端にあたり、桂川の屈曲によって大きく開かれた沖積地を一望にすることができる。

この沖積地周辺の一帯は、弥生時代には来縄遺跡、大原遺跡、雷遺跡など銅矛や銅戈を埋納した遺跡が点在する。それらがどのような遺跡であったのかはすべて不意の出土であったため判らないが、国東半島西部のこの地が弥生時代にあつては宇佐平野、大分平野、安心院盆地などと並んで重要な位置付けにあつたと考えることができる。智恩寺の丘陵の北側にある弘田の丘陵では銅戈が出土しており（大原遺跡）、発掘調査によつても弥生時代以前の生活の跡が窺える。

古墳時代になつてもこの地は古墳や横穴が多く見られるところで、台地上には円墳、丘陵崖面には横穴が穿たれている。弘田から雷の丘陵上には中世「弘田の三塚」と呼ばれた古墳群や鬼塚古墳、大原鬼塚古墳、雷古墳など横穴式石室を主体部とする円墳がある。都甲川が本流に合流するあたりから下流が六世紀以降の生活の舞台となつていたと考えることができる。都甲川の上流部では墳墓の発見はないが、松行において古墳時代初期の集落跡が調査されている（スキヤキ遺跡）ので、都甲川に

よつて形成された沖積地の微高地には集落が点在していたものと考えられる。

古代になると、この地は「国府都来魂郷」に属していたことが「豊後国風土記」から推測できる。現在「来魂」の遺跡地はこの桂川下流域にあり、このあたりがその中心部であつたことが推定できるのである。これが弥生時代から古墳時代にかけても西国東地域の中で中心的位置にあつたことがその後の展開を導きだしたものであろうか。あるいは新たに出現した宇佐宮・弥勒寺という勢力との関係の中で重要な位置を占めるようになってきたのであろうか。いずれにしても、弥生時代以来、西国東にあつては拠点的な地域として重要視されていたものと考えられる。

ところで「六郷山」と総称される天台宗寺院は国東半島各地に点在している。これらは「本山」、「中山」、「末山」という三つのグループに分けられており、そのうち智恩寺は本山に属している。本山は宇佐宮に近い米魂郷・向野郷を中心とした地にあり、宇佐宮との強い関連が考えられている。

(註)

中世寺院の名称としては「智恩寺」と「知恩寺」が使用されているが、最も古い目録の「智恩寺」を採り、この報告書では「智」を使用する。ただし、近世村は「知恩寺」であるので、現在の通称も含めて近世村の場合は「知恩寺」と記す事にする。



第1図 智恵寺周辺の遺跡（古墳～中世） 1 : 50,000

- | | | | |
|-----------|------------|--------------|--------------|
| 1 地蔵堂古墳 | 10 田苗社古墳 | 19 大原鬼塚古墳 | 28 鼻津岩屋(六朝山) |
| 2 草刈金比羅古墳 | 11 鉢塚1号墳 | 20 弘田鬼塚1,2号墳 | 29 智恵寺 |
| 3 笹塚古墳 | 12 鉢塚2号墳 | 21 弘田横穴 | 30 「萬恩寺」 |
| 4 二ヶ塚古墳 | 13 米塚金比羅古墳 | 22 佐野古墳 | 31 「五瀬」 |
| 5 鑑堂古墳 | 14 船塚横穴 | 23 光門古墳 | 32 志利山(六朝山) |
| 6 入津原丸山古墳 | 15 青宇田横穴 | 24 桔園電跡 | 33 高山(六朝山) |
| 7 大原古墳 | 16 穴瀬横穴 | 25 上の堂 | 34 古妙寛寺跡 |
| 8 志手金比羅古墳 | 17 雷鬼岩屋古墳 | 26 寺ノ上殿基 | 35 上弘田遺跡 |
| 9 鬼塚古墳 | 18 弘田二ヶ塚古墳 | 27 東見庵 | 36 鞍馬城跡 |

第二章 文書からみた智恩寺の歴史

(一) 六郷山の中の智恩寺

国東の山々は、奇岩がそびえ、その山懐には靈窟がある。古米、修行の行場として独特な仏教文化を生み出し、その伝統は、行事や景観として今日も確かに生きている。六郷山は、このような国東半島に点在する百数十箇所の岩屋・寺の集合体であり、その名は国東郡六郷（国東郡・伊美郷・米魂郷・田染郷・武蔵郷・安岐郷）に由来する。六郷山は仁聞菩薩によって養老二年（七一八）に開かれたと伝えられているが、仁聞は八幡神自身であり、六郷山は僧としての八幡の行場としてという性格をもっていた。各寺々の奥の院に六所権現と呼ばれる神社をもち、そこに祀られるのは、八幡を除く字佐の神々であり、またそれは六観音ともいわれる。そこには、神と仏が融合した世界がある。八幡は、日本でもっとも早くに神仏習合を遂げた神であり、国東は、そのような字佐八幡宮に奉仕する僧侶たちの行場としての性格が早くから与えられたことは確実であろう。しかし、古代国東の実態を知る史料はほとんどない。

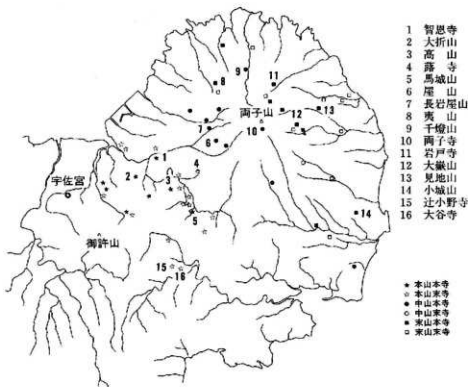
六郷山が歴史の上に明確に登場してくるのは、平安時代の終わり、十二世紀に入ってからである。長安寺（現豊後高田市）に所蔵される「六郷山年代記」によれば、六郷山は、永久元年（一一一三）に天台無動寺を号し、保安元年（一一二〇）に延暦寺に寄進されたとある。年代記は慶長年間作成の記録であるが、この十二世紀初頭の寄進は、長安寺の太郎天童（大治五年銘）や銅板法華経（保延七年）、辻小野寺の毘沙門天像（水久五年銘）など六郷山初期の天台の仏教遺物が集中する時期に当たっており、信頼性の高い記事と考えられる。

六郷山は、本寺二十八箇寺を山香・田染・米魂地区というもつとも宇

佐に近い本山と西国東を中心とする中山・東国東の末山の三グループに分ける、すなわち三山形式を構成しているが、このような組織が出来上がるのも、天台への寄進を契機によるものと考えられる。

初期の段階は漢山大衆の評議によって決定するシステムが存在したが、それは次第に形骸化して、比叡山から縦に繋がる組織が出来上がっていくようである。六郷山は、鎌倉時代に入ると、別当（天台無動寺）が比叡山におり、現地では六郷山全体を統括する執行職とそれを補佐する権別当職が置かれ、その下に三山の各寺院の院主がおり、さらに各寺は、いくつかの坊によって構成されるという整然とした組織が完成する。安貞二年（一一二五）の六郷山諸知行并諸堂役祭目録写（長安寺文書・91ページ参照）によれば、一人の執行と三人の権別当（一人は執行の兼帯）が見られ、その外に正・権の上座・寺主・都維那などの職が置かれていた。執行の権別当職兼帯は、権別当は單純に執行の下位の補佐役といえないことを示している。このような兼帯の例は、「六郷山執行兼権別当四位」再興執行兼権別当兼経など他にあり、六郷山では一般的に見られた。それでは、権別当とはどのような役割をもっていたのであろうか。

文永一〇年（一二七三）二月十八日の青蓮院宮令旨によれば、六郷山の両子・小城・大嶽・見地村の支配権をめぐって祐快と熊然が相論し、祐快にその権利が認められている（余源文書）。祐快は「六郷山年代記」によれば、六郷山執行であり、熊然は、紀氏系図（後藤武夫氏所蔵）にある「大夫阿闍梨 熊然 号六郷山権別当」と同一人と思われる。系図に見える熊然の孫延然は、見地中村にある正平二年（一二三九）十一月下旬の年紀をもつ板碑に「孝子大法師延然 大法師然秀」とある人物で、見地寺の僧侶であり、その延然の子の祐然は小城山の院主である。熊然の子孫は相論の対象となった寺にかかわる人物であり、熊然―熊然を裏



第2図 南北朝期における六郷山寺院の分布（「建武の注文」による）

- 1 寺山
- 2 折山
- 3 高山
- 4 藤原
- 5 馬場
- 6 屋敷
- 7 長
- 8 岩
- 9 両子山
- 10 子山
- 11 山
- 12 寺
- 13 山
- 14 山
- 15 山
- 16 山

- 本山
- 本山
- 本山
- 本山
- 本山
- 本山

付ける。この相論は、六郷山執行と権別当を号している能然の争いである。鎌倉中期には、両子・小城・大嶽・見地の村は末山のグループを構成しており、推測になるが、権別当職と末山の支配権は深くかかわっていたのではなからうか。

もう一度安貞二年の六郷山目録を見ると、権別当は三人である。ちょうど本山・中山・末山の三山に対応する。時代が降るが、西国東を支配した田原氏の庶流吉弘氏は、当主が法体となり、六郷山権別当を称するが、吉弘氏の支配した地域には、長岩屋・屋山・加礼川・夷山・千灯寺・両子寺（両子は鎌倉時代は末山、建武以降は中山）があり、これらは六郷山中山のグループにあたる。吉弘氏が権別当職に固執したのは、この職がこれらの寺院の支配する村の支配権にかかわる職掌であったからと考えられる。

このように考えると、権別当は三山各山の長であり、執行は権別当から選任される職と考えるべきである。

さて、大友系図としては最も古い野津本大友系図（12ページ参照）によれば、大友能重の弟重能の子息小田原重景の系統から鎌倉時代の智恩寺院主が出る。初代の良範は、「智恩寺権別当法眼」とあり、智恩寺の属する本山の支配権を握る重要な職に着いており、智恩寺は、鎌倉時代に本山の中心寺院であったことが窺える。小田原氏は、来繩郷・田染荘に本拠をもち、大友惣領家の代官を務める一族であり、良範の権別当就任は、六郷山本山に強い影響力をもった結果といえるだろう。

(二) 来繩郷と智恩寺

六郷山の寺は、「長岩屋」「大岩屋」「小岩屋」など一山屋の称をもつもの、「高山」「屋山」「小城山」「両子山」など一山の称をもつもの、「智恩

寺」など一寺の称をもつものに分けられる。岩屋は、講堂・六所権現という寺の中核施設が岩屋構造となった岩屋寺であり、山は、山の中腹の平地に造られた山上寺院である。それに対して、寺号をもつ「智恩寺」などは、山岳寺院系の岩屋・山寺院とは異なり、六郷山が組織化される以前の古い六郷山の寺と考えられる。事実、智恩寺は、今回の堂山地区の発掘において、九世紀に遡るものと推定される古瓦が出土している。これは、六郷山にかかわる寺院のうちで最も古いものであり、山香の津波戸岩屋にかかわると考えられる向野庵寺（一〇世紀か）よりさらに古い。智恩寺のある本山グループは、宇佐宮に近いこともあり、六郷山の中でも古い寺が多いとこれまでから推定されているが、智恩寺は、先述のごとくその中でも寺号をもつ特異な寺である。

弘安の大田文（平林本）によれば、次のような記載がある。

来繩郷三百町 宇佐宮領

領主

本郷并餘名二百七十七町 郷司来繩妙性房智恩寺院主栄範・神官名主等、

地頭

吉久名拾八町 大炊三郎藏人能泰法師法名道善

久末名五町

小田原弥三郎頼景

ここに見える「智恩寺院主栄範」は、野津本大友系図にある「良範」の子息「永範・丹性房」と同一人物とみられる。これまで、「郷司来繩妙性房智恩寺院主栄範」の記載は、「郷司来繩妙性房」「智恩寺院主栄範」の二つに分けて考えられてきたが、丹性房は妙性房の読み違いと考えられ、最近安藤信郎氏によって、これは一人の人物ではないかという考えが出された（安藤信郎「弘安岡田帳一考」、『大分県地方史』一三一号）。

筆者も基本的にこの考えに賛成である。「郷司来繩妙性房智恩寺院主栄範」とすれば、大友氏の一族小田原氏が来繩郷の郷司を保持していたことになる。

来繩郷はもと宇佐の神郷の一つであり、郷司は宇佐宮の神官であったが、鎌倉時代の前期までには、大友一族が領主や地頭として君臨することになった。その経緯は来繩郷司福成・吉久名相伝次第からおおよそ推測できる（松成文書、来繩郷五七）。それによれば、宇佐宮の神官「たねとし」なる人物が大友親秀に郷司職を寄進し、親秀は郷司職に付された福成・吉久名を子息大炊三郎藏人能泰に譲ったが、能泰の子息胤宗が宝治合戦に関係したため、没官となり、北条氏領となり、さらに幕府滅亡で、戸次一族に与えられたという。この名は宇佐神官大神宇貞などの訴訟もあるが、最終的には、暦応四年（一三四一）に田原貞広の支配が認められ、田原領に組み込まれる。

さて、大友親秀は貞応二年（一二三三）に大友初代能直の跡を継いだ人物であり、没年は未詳であるが、仁治三年（一二四七）には、子息頼泰が豊後国守護となっていたので、それ以前に死去したとみられる。とすれば、神官「たねとし」の寄進は、承久の乱による土地没官の回避または、乱関係者への大友氏の圧力の結果の可能性が高い。承久の乱以前の来繩郷司は、建保六年（一一八八）二月二十二日の来繩郷司御炊殿雑仕差符にある「来繩郷司并官日下部宿願」某と考えられ（永弘文書、来繩郷一〇）、「たねとし」は「日下部宿願」と同一人物をいしその子息であろう。大友氏は、三代頼泰の代、モンゴル合戦を契機に西国に downward が、親秀の代は鎌倉にあり、豊後には、守護代として一族の小田原氏が派遣されていたという。親秀に寄進された来繩郷も実質的には、同郷内小田原に本拠をもつ守護代小田原氏が支配したと考えざるべきであろう。この

際、六郷山の寺院である智恩寺も小田原氏の出である良範が院主となつたのである。このことは、この寺も米繩郷司と密接に結びついた寺院であつたため、郷司職の交替にもなつてその院主の交替が起つたと思われる。弘安の大田文では良範の子息である智恩寺院主永範が米繩郷司を兼帯したのも、大友氏からその権限を委譲されたと考えられるが、寺が同じく米繩郷と大友氏寄進以前から密接な関係にあつたことを示しているのではなからうか。

すなわち、智恩寺は、宇佐宮神官である郷司の創建になる氏寺の性格をもつ寺として存在したと考えられる。先に述べたように大友以前の郷司は日下部氏であり、智恩寺は宇佐宮弁官職をもつ日下部氏の関係の寺であつたことが考えられる。それでは、宇佐宮神官によつて支えられた初期の智恩寺はどのような寺であつたのであろうか。

(三) 智恩寺の成立

『八幡宇佐宮御託直集』では、法蓮が山本で虚空藏菩薩を、花蔵が如意輪觀音を祀つたという記事がある。前者は山本の虚空藏寺であり、後者は法鏡寺であり、両者は白鳳期の寺院である。また、同じ記事に米繩郷に、覚満が薬王菩薩を祀り、林能が六郷山で薬師を祀つたとある。この薬王菩薩の場所は不明であるが、智恩寺のすぐ南には、「ヤクオンジ」という場所があり、智恩寺とは異なる系統の古い瓦(一〇世紀から十一世紀)が出土する。しかし、「ヤクオンジ」を林能の寺とするには、瓦の時期が智恩寺より新しく、また大きな寺のあつた場所とは思われない。中野権能氏は、薬王院のあつた後山を覚満が薬王菩薩を祀つた場所と考え、林能が薬師如来を崇めたのが、智恩寺としている。氏は明治四年の宇佐宮惣堂遺書上帖(宇佐宮所藏)によつて、宝龜三年に林能から三

世の孫良範が智恩寺に移り、伽藍を整備したとしている。その子孫は代々、宇佐宮の惣堂遠職に就いたといふのである(『八幡信仰史の研究』)。しかし、この宇佐宮惣堂遺書上帖は信頼できる史料であらうか。

林能和尚—惣堂遠祖宇佐姓—重景—惣堂遠一世—天平勝家—良範—

重治—早達—

〔三三〕 豊後国米繩郡智恩寺村智恩寺住持祖師林能和尚供出縁 宝龜三年五月權任ス

時重 四世・延壽—榮範 五世・大同弘仁—範秀 六世・天長

主秀 七世・承和・壽祥 金秀 八世・仁壽・吉衡・天安

(以下略)

この系図の「重景—良範 時重—範秀」は、時代はまったく異なるが、野津本大友系図にある智恩寺系譜とほとんど一致する。惣堂遠系図のはじめに小田原系統の智恩寺系図が入り込んだとみてまちがいないだろう。とすれば、書上帖を基礎に智恩寺の成立を述べている中野説は成り立たなくなるわけである。

しかし、今回の調査の遺物から見て、智恩寺には、すでに九世紀代には瓦の葺かれた寺があつたことはまちがいない。また、智恩寺の南三〇〇ほどの所に、平安後期の瓦を出す、「ヤクオンジ」があり、さらにそこから、南へ直線距離一・五・のところに「カワラガマ」という更に平瓦としては智恩寺のものより古い瓦を出す場所がある。智恩寺の北一・三・ほどの弘田には、弥勒寺領の妙覚寺という古い寺跡(平安期か)があり、中世以来、宇佐宮弥勒寺の所司僧である東別当・西別当や惣堂達が住んでいた(調査概報「都甲荘2」)。南北朝時代には智恩寺の北隣の高宇田集落の名前をもつ「高宇田伊與阿闍梨良理」という僧侶が宇佐宮

神官小山田氏の一族におり（小山田文書、米繩郷七二）、近世まで、宇佐宮杜人が居住していた（小倉藩人番改帳）、南隣の森集落には、六郷山を開墾したといわれる能行和尚に始まるという系譜をもつ宇佐宮森坊がある。戦国時代の史料であるが、その智恩寺北四〇〇ほどとのところの鴨尾は、宇佐宮の奥の院的な性格をもつ御許山領であった（松或文書、米繩郷二五二）。

確かに惣堂遠系図をもとにした中野説には問題があるが、以上の事実から米繩郷のこの智恩寺周辺地域が六郷山という地域と宇佐宮を繋ぐ接点にあったことは否定できないのである。宇佐の御許山を出発とする山岳的な信仰は、その麓近くで国東への入口である米繩郷や遠見郡山香郷にまず展開したと考えられる。御許山正覚寺の成立が九世紀と考えられているが、智恩寺や向野庵寺の発掘の結果からみて、それに続くように九世紀から一〇世紀にかけてこの国東半島の入口地域に寺院が造られていったと考えられる。この初期の寺院を六郷山と呼んだとは考えられないが、国東の行場への基地として、後の六郷山の前身となったと推定される。

六郷山の本山には後山・高山・間戸石屋・智恩寺など薬師如来を本尊とする寺が多い。既に述べたごとく、「八幡字佐宮御託宣集」でも、米繩郷や六郷山は薬師信仰の拠点となっていたことが推測される。初期の六郷山は、米繩郷より奥に本格的寺院を展開しておらず、薬師信仰を核として、智恩寺一帯は初期六郷山寺院の中核寺院であり、智恩寺はそのような初期六郷山寺院の系譜を引く寺院であったと考えられる。

平安時代の智恩寺については、以上のごとく推測によるところが多く、明確にすることはなかなか困難であるが、初期六郷山成立時期からの寺であることは間違いなく、小田原一族はそのような伝統的な寺院を掌握

したのである。それでは、次に小田原重景の子息良範に始まる中世の智恩寺院主の流れを追ってみることにしよう。

（四）中世の智恩寺院主の系譜

大友氏が鎌倉時代の初期に米繩郷を獲得して以来、米繩郷は大友一族で守護代である小田原氏が管理し、智恩寺には、小田原氏の良範が院主として入寺し、ここに、中世の智恩寺が成立する。院主は子息の水範・孫の範秀と伝えられることは、野津本大友系図で確認できる。

ところで、小田原系智恩寺院主は、同じ六郷山夷山（現香々地町夷）院主職をも兼ねていた。「余瀨文書」には、夷山院主として「藤原春徳九」という人物が見えるが（香々地莊四〇）、これは野津本大友系図にある「範秀」の童名である。この範秀は、正和四年（一一三二）ころ、夷長小野の支配権をめぐる、幸益丸なる人物と争っている（法印玄信奉書案、正和四年七月付青蓮院宮令旨、余瀨文書、香々地莊五〇・五一）。また、正中二年（一一三二）三月の仲原氏女代枯舜請文には、「千象房口乗房は、智恩寺方より相伝の条」とあり、長小野の利乗房が智恩寺方から枯舜に伝えられたことがわかる。この二つの事実から智恩寺院主範秀が夷院主を兼帯したことは明らかである。それでは智恩寺院主の夷院主の兼帯はいつからはじまったのであろうか。

貞和三年（一一三三）十一月一日の別当権律師某下文案では、夷山院主職と横岳河内について弘安三年（一一二一）十月十一日先師榮範状と永仁六年（一一九八）十一月十日の母堂平氏女譲に任せて、良禪に領掌が認められているが（志賀文書、香々地莊七五・七七）、この先師榮範は小田原系智恩寺院主二代の栄範（水範）であり、少なくともこの水範の段階には、夷山院主を兼ねていたみられる。さらに、水範の父である

良範が夷院主を兼ねたかは不明であるが、嘉禎二年（一二三六）正月二十八日に夷山長小野の財方弘の田畠を橘太子に充て行った「惣領主良口」が良範という可能性もある（余瀨文書、香々地莊一三三）。

さて、津津本大友系図は、範秀で終わっており、その後の智恩寺院主の系譜はわからない。そこから後はどうなったのであろうか。夷山院主についてみると、貞和三年（一二四七）に良禪が夷山院主職の相伝を無動寺別当より認められるが、暦応年間より郷秀が山領を知行するという状態が続く。結局、正平十三年（一二五八）三月十一日には、この郷秀が夷山院主が認められる（雲山寺文書、香々地莊八四）。良禪は、大友能直の子息能郷より出る志賀氏であり、志賀能郷は父より夷山小野を譲られ、その子孫は少なくとも鎌倉時代まで夷山小野を支配した。一方、良禪を押しつけ夷山の院主職を確保した郷秀は範秀の系譜を引く小田原氏出自と思われる。彼が智恩寺の院主を兼ねていたかは明らかでないが、智恩寺は、戦国時代まで夷山に深い関係を持ち続け、天文十年（一五四一）十月十五日に六郷山夷地見注文案には、智恩寺分の田地一町三段小の記載が見られる（余瀨文書、香々地莊一四三）。

一方、智恩寺院主の系譜としては、「宇佐宮宮迫山学頭坊代々名帳」に南北朝末期に「妙秀 明德三年補任 智恩寺住侶」という人物が見えるが（宇佐神宮所蔵）、智恩寺墓所の天文二十四年の宝篋印塔にある「法印 彦秀」という人物まで、一五〇年ほど智恩寺院主の名は確認できない。彦秀の後は、天正四年の屋山法華三昧興所再興表白文に「智恩寺ノ盛秀 大徳」という僧が見える（「太宰管内志」所収長安寺文書、都甲莊一五二）。史料の上で、智恩寺の院主の名前がたどれるのはここまでであるが、智恩寺の名前は、文祿元年（一五九二）まで見える。文祿元年に朝鮮出兵した大友軍都合一一人の軍将（總勢六〇〇〇人）の注文の中に、「田染

甚左衛門 戸次弥平 智恩寺」とある。大友軍の軍将の中で、「天徳寺小六」などを姓とするものはあるが、寺名だけの記載は、極めて特異な記述となっている。これは、明らかに僧侶であることを示している。智恩寺は、寺であると同時に大友の軍団の一翼を担う領主であった。

今回の調査で、智恩寺には、堀と土塁を巡らした寺屋敷と呼ばれる地区と西城と呼ばれる城郭構造をもった地区があることが明らかになった。六郷山の寺は軍事勢力としての性格を古くからもっているが、寺と城が一体的に存在している形態は珍しく、これはまさに先の注文に表れた智恩寺の在り方とよく符合する。

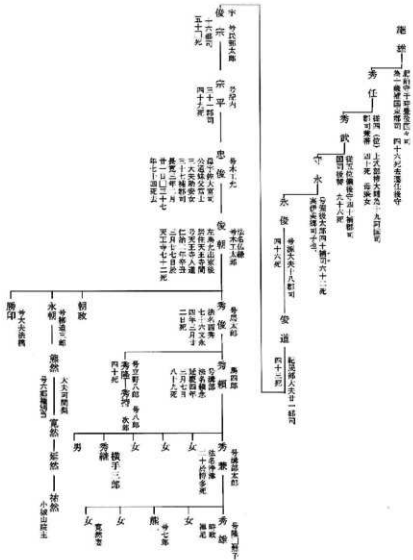
（五）むすびにかえて—智恩寺の終焉—

大友氏が朝鮮出兵の失敗で豊後一帯を没収されると、大友氏に仕えた家臣団もその知行を失った。朝鮮に参陣した智恩寺もその知行地を没収されたとみてまちがいない。

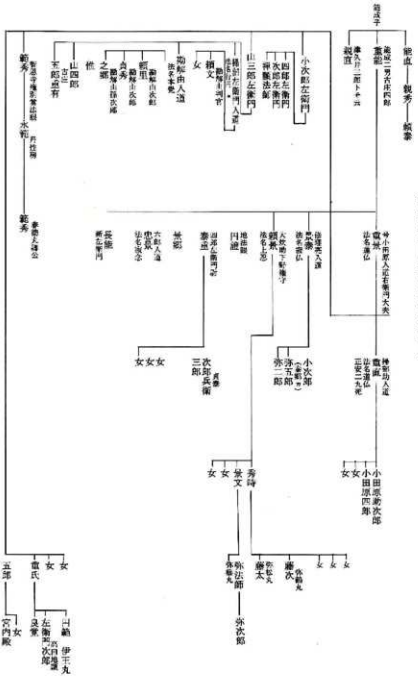
十八世紀の半ばに作成されたとみられる「豊州御領村々様子大概書」によれば、知恩寺村には、薬師を安置した堂があるだけで、寺の記載はなかった（後藤重巳「解題 豊州御領村々様子大概書について」／別府大学「史学論叢」十九）。また、安永五年の天台宗豊後国六郷山寺院名簿にも智恩寺の名は見えない（安岐町・両子寺所蔵）。これらの事実は、智恩寺が近世の宗教体系の中で正式な寺として認められなかったことを示している。近世の智恩寺の様子を知り得る古文書はなくその活動は不明であるが、檀家をもつような寺ではなく、正式な僧侶もいなかったことは間違いない。しかし、講堂の柱に記された安永八年以来の筆入りの墨書銘は、正式な僧侶はいなくとも、村の人々や六郷山大衆の力で寺としての体裁を今日まで保って来た証となっている。

○国東紀氏系圖（抄出）

後藤式大夫所藏



○野津本大友系図（抄出）
 「史料紹介 野津本『北条京國・大友系図』」
 （国立歴史民俗博物館研究報告5）



○智恩寺院主系譜（筆者作成）



第四章 事前調査と調査地点の選定

六郷山寺院の発掘調査は、講堂再興に伴う調子寺と六所権現再興に伴う文殊仙寺の事前発掘調査があるにすぎない。これらは特定の建築物の施設場所における限定された調査であり、それ自身では確かに成果があげられてはいるが、ひとつの六郷山寺院の構造や景観の復元には威力を発揮するものではなかった。(もちろん、それが目的ではなかったのだが) 今回宇佐風土記の丘歴史民俗資料館が実施した「智恵寺遺跡発掘調査」は三千年という期間と限られた予算の中で、どのようにしていかにも多くの情報を得ることができ、そしてそれがどのように智恵寺の歴史の解明に寄与することができるのか、といった基本的な問題から論議を深めスタートすることになった。

的確にトレンチを設定するためには十分な現状の把握が必要となる。このためには詳細な情報が表現できる千分の一の地形図の作成と、それをもとにした現地での詳細な踏査(地形の把握や遺構の有無、さらに石造物などの分布)はもちろんのこと、地籍図の調査や地名の調査も重要となる。次に各々の調査の内容を記して、最終的にどのように発掘区を設定したのかを述べておきたい。

(一) 地籍図の調査

小字堂山の頂上付近に「六郷満山第六番札所」の木札が下がる茅葺き(現在はその屋根の上をトタン板で覆っているが)の講堂がありわずかに智恵寺の古の姿を伝えているが、これ以外には講堂下に観世音菩薩を安置する観音堂があるのみで、中世にはこの台地上一帯に様々な寺院施設が展開し、人々が暮らした事を知る縁は現状ではない。現在、台地上

の平坦部が広がる地域、すなわち中世寺院が展開したと考えられる地域は大半が植林による杉林が荒れ地であり、畑地となつていところは少ない。もちろん人家はなく、蜜柑栽培や僅かな野菜畑の耕作のために台地下の家から毎日人々が登ってくるというのが常態である。

このような智恵寺の台地も、人家がまだ台地上にあった明治時代の中期にはまだ現状からは想像もできないほどの活気があり、それ以前の状況、おそらくは近世的な景観と生活を伝えていたものと考えられる。そのころの状況を明治二十一年から同二十二年にかけて作成された地籍図によつて復元しようというのが第一段階の目的である。地籍図は六〇〇分の一縮尺であるが、傾斜のある地点では歪みがあるなど必ずしも地形に正確ではない。しかし、すでに指摘されているようにその図に記された境界は「境界が設けられた段階における土地表面の形状をある程度反映していると考えられ」ており、地目の記載と相まって当時の地形や土地利用状況を立体的に把握できるすぐれた史料である。そしてそれが作成された明治中期は大規模な土地の改変が行われる以前であり、そのことから「現在失われてしまつていゝ明治中期以前、ひいては近世、場合によつてはそれ以前の景観を抽出することが可能」であると考えられている。これが地籍図調査の最終的な目的で、このことは田染荘や都甲荘の荘園調査によつても具体的に成果をあげている。

附図2はその地籍図をもとにして地目別に色分けを行ったものである。それによると台地上には住宅が点在している。小字図(附図1)と比較すると、それらの住宅は西城、内屋敷、上の木にあることになる。しかし、基本的にはこれらの住宅は堂山と西城の間を台地に登ってくる道沿いに展開しているのがわかる。一方、台地下の水田に面する場所(台地北側)にも道に沿つて住宅が点在している。それらは「三宅」、「古沢」、

「門岡」、「安部」姓の家であるが、「三宅」と「古沢」は台地上にも同じ姓の住宅があり、また「門岡」は台地上の小字門の土居から住居を移したとの伝えがあることから、本来はこれらの家も「安部」家を除いて台地上にあったものと考えられる。

また、「安部」家のあるのは大屋敷という小字で、「安部」家は江戸時代は庄屋であった。台地上から下りたという伝えはなく元来台地下に住していたものと考えられる。

一方、台地上の土地利用状況から何か読み取れないであろうか、附図2から判るように明治二十一年当時は台地の平坦部分（若干の起伏はあるが）は堂山の講堂周辺を除いて畑地が広がっていた。しかし、その中でも不自然に「山林」とされる場所が三カ所がある。一つは西城の中央部を「コ」の字状に囲むような「山林」である。さらに西城の北東角のやはり小さな「コ」字状に「山林」が巡るところである。もう一つは門の土居にも同様に「山林」によって囲まれる方形の区画がある。これらが明治中期以前の何らかの施設の痕跡を示している可能性があることから、これらを中心として現地において詳細な分布調査と地名調査をおこなった。

(二) 地名の調査

地名は法務局所蔵の地籍図から起こした(附図1)。それによると現在講堂のある台地は堂山、さらにその周辺には西城、門ノ土居、内屋敷など何らかの施設の存在を想定させる小字がある。これは明治二十一年段階の小字を示したものであるが、それより数年前に調整された「大分縣各町村小名取調書」(以下「取調書」と略す)によると、「舊村字智恩寺」には西城、射矢ノ谷、為父山堂山、奥ノ土居、坂口の五つの字が記

されている。これを明治二十一年のものと比較すると西城以外は現行小字にはない。現行小字はいくつかの筆をまとめて明治二十一年に確定されたもので、それ以前の小名の多くはその時点で正式な地名としては姿を消すものである。そうすれば、射矢ノ谷などの地名は聞き取りによって復元するしか方法がない。

為父山堂山は現行の堂山を指す事は間違いないが、江戸時代の「六郷山定額院主目録」に都甲非為父山智恩寺という記載があり、「為父山」という呼称が江戸時代「善王山」と並んで智恩寺の山号として用いられていた事が判る。江戸時代の「太宰管内志」によると講堂前の国東塔は「父塔」と地元の人々が呼んでおり、「父」に係わる何らかの信仰が智恩寺に存在していたのかもしれない。

聞き取り調査では、イヤの谷、城の内、寺屋敷、三宅の上居、古沢の土居、庄屋の土居、うちだんの坂、くびきりば、清水という地名が拾えた(付図2)。これによって「取調書」の射矢ノ谷は堂山と西城の間の谷を指すことがわかった。「イヤ」は「湯屋」の転訛と考えられる事から、そこに坊的な施設の存在が想定された。城の内は小字西城の中でもさらに限定された区画、すなわち西城の中央部のほぼ長方形に区画された内部を呼ぶ。ここは、地目の調査でも「山林」に囲まれたところで、「城」の遺構があることが推測できた。寺屋敷は小字門ノ土居の内の更に限定された区画を呼ぶ。そこも地目で「山林」に囲まれた方形区画をなしているところであり、さらに伝承でも「寺」が存在したとされ、智恩寺を考える上で重要な施設が存在した可能性が高い事が判る。

また、土居地名は小字の門ノ土居を含め「三宅」、「古沢」、「門岡」といった各家に対応したものである。本来は「三宅」、「古沢」、「門岡」の三つの同姓集団がそれぞれ土居を形成していたことが推測できる。



第3図 智恩寺調査地区名

なお、中世寺院の跡でしばしば残る。坊。地名は全くなかった。基本的に坊の集まりが集落を形成し、近世村として行政単位となったにも関わらずそれが残っていないのは何故であろうか。

(三) 発掘地点の選定

地籍図や地名の調査を経て現地の踏査を行う。現状は先述したように台地上の多くは藪や雑木で覆われており、地表面の観察を行う事が不可能に近い状態であった。そのため、地籍図や地名調査で重要と考えられた城内、寺屋敷、イヤの谷を中心とした地区の地形を把握するための伐採作業にかなりの時間を要した。

それぞれの詳細な現況は第五章の各項目で述べるが、各地区で地表面に残る遺構が確認された。さらに聞き取り調査により既に消滅した堀や土塁のあった事が判明した。これらの事を勘案して第3図のように調査区を設定した。また、それぞれをイヤの谷地区、西城地区、寺屋敷地区、堂山地区とすることにした。

註

- (1) 「岡子寺講堂跡」 安城町教育委員会 一九八八
- (2) 国東町教育委員会が一九九一年に調査を行った。
- (3) 縮尺は概ね六〇分の一に統一されているが、傾斜地などではゆがみもあり必ずしも軌測で図化された図面とは異なる。そのため今回作成した二千分の一縮尺の地形図と重ねると、道や地目境などを参考にして行う事になる。しかし、特に山林の中の道は現状では図面に表現されていないことがしばしばあり、そのため必ずしも正確に地図上に表示できない可能性があることを断っておきたい。

(4) 出田和久「地籍図から上弘田遺跡を探る―「土塁」と「堀」を中心に―」『豊後国都甲莊3』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 一九九〇

第五章 遺構・遺物の調査

(一) 智恩寺以前

智恩寺の台地は平坦面は少ないものの緩斜面が連なり、寺院建立以前にも人々の生活の跡を確認する事ができる。弥生時代の遺物は堂山・寺尾敷・イヤの谷・西城の各地区で出土した。いずれも遺構に伴うものではないが、イヤの谷のかんりの傾斜地も含めて広範に集落が展開していた様相が窺える。また、遺構は検出されなかったが、堂山とイヤの谷地区で須恵器が出土した。

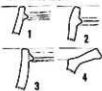
1 弥生土器

1から13が弥生土器である。1から8まではイヤの谷地区、9から13までは堂山地区第9トレンチ出土である。1から3と9、10はいわゆる下城式土器であるが、1から3には明確なキザミは見られない。9、10に比して形態的にも古い要素を持っている。1から8が中期前半、9から13を中期中頃に比定できる。

2 須恵器

14は堂山の後述する瓦包含層から出土した。天井部と口縁部の間の隙が鋭く、口縁端部の段が明瞭である。陶器編年I型式4段階に相当するものであろう。15は山紙社東側の竹林の中で表採したもので、高台が強く外方向に張り「ハ」字状をなす。八世紀中頃から後半のものであろう。16は内面青海波、外面平行タタキの須恵器片である。他に同一個体と考えられる破片が数点出土している。

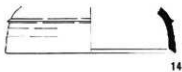
イヤの谷地区



堂山地区



0 10cm



14



15



16

0 10cm

第4図 智恩寺出土弥生土器・須恵器

弥生土器は、グリットを拡張した堂山、寺屋敷、イヤの谷、西城の各地区で出土した。丘陵の平坦地ばかりかイヤの谷のような谷沿いの傾斜地からも土器が出土するのは注目される。調査範囲が限定されているというものの、土器は中期前半から中頃の時期に集中しており、集落の形成時期は短かったものと考えられる。須恵器は単発的に出土しており、特に八世紀中頃から後半と考えられる15は、後の寺院との関係で注意される遺物である。

(二) 堂山地区

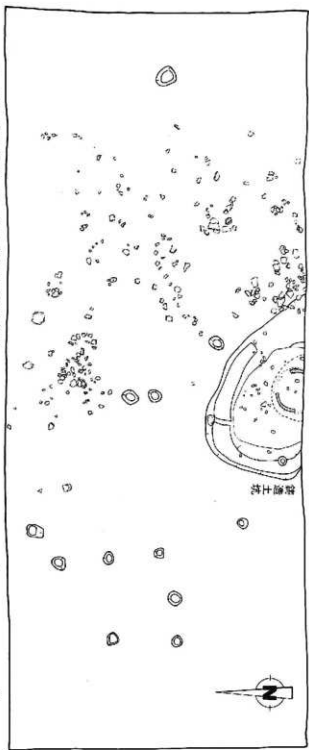
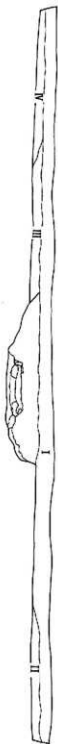
小字堂山は標高八十三・五㍎を最高所として南西方向に伸びる丘陵の先端部を占め、講堂と山紙社が現存している。現状ではその建造物が占める空間が狭義の「智恩寺」として認識されている部分にあたる。その空間は約八〇㍎×三〇㍎の平坦地となっており、おそらく緩斜面をカットして平坦面を造りだしたものと考えられる。しかし、山紙社の北側には最高所から丘陵尾根が伸びており、特に山紙社北側隣接地（小字内屋敷の内）は約五〇㍎×三〇㍎の平坦地が存在している。ここは明治の中期には山林および畑であり、構造物は存在していなかった。

講堂および山紙社の現存している部分は発掘調査が出来ないので、講堂の正面に四×六㍎のグリットを設定した。また山紙社北側は一〇㍎×五㍎に二×五㍎のトレンチを設定し発掘調査を行った。その結果講堂前は深さ約五㍎で岩盤に達し、遺構は認められず遺物も出土しなかった。このことは講堂の建設にともなって地山がカットされたことを意味するであろう。

山紙社北側は瓦を主体とする包含層と、その包含層を切る円形の土坑



第5図 堂山地区調査区位置図



- I 灰赤褐色土(黄土)
- II 黄褐色土(埴山)
- III 暗灰赤褐色土(遺物包含層)
- IV 暗黄褐色土(埴山)

第8図 堂山地区拡張区遺物出土状況

が確認された。また、鬼金の時垢^{ときご}離取りを行った場所とされる「清水」から講堂に到る道（通称「鬼金の道」）沿いに自然石を並列した墓地と思われる遺構があり、その性格・時期を確認するために一部発掘を行った。以下、遺構と出土遺物について述べる。

1 遺構

a 包含層（第6図）

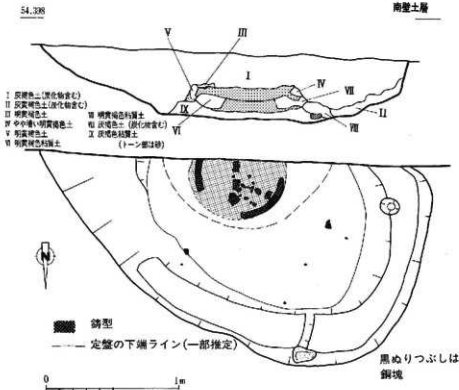
トレンチ1、2、3、5、6の表土から瓦が出上したので、トレンチ2、5の間（拡張区）を拡張して掘り下げた。その結果瓦を中心とした包含層が第6図のように広がっているのが確認できた。瓦は図の土層図から判るように浅い落ち込みに堆積したものである。明確な遺構であるとの確認は得られなかった。この落ち込みはトレンチ2、5を中心とする狭い範囲に認められるもので、近接地に建物があった可能性が高い。

2、5トレンチの南側に拡張して土層を調べたが、基壇などは確認されなかった。後世削平された可能性が高いであろう。

b 土坑（第7図）

拡張区の南端中央で土坑を検出した。調査区外に広がるため明確な形状は不明であるが、掘り形の東側はやや方形に巡るが西側は円形に近い楕円形状を呈するものであろう。そうすれば調査した部分は約2分の1ということになる。内部からは銅片や鉄釘、梵鐘鑄型が出土し、さらに鑄型片が円形に巡る状況が見られたことから梵鐘の鑄造土坑であると確認された。

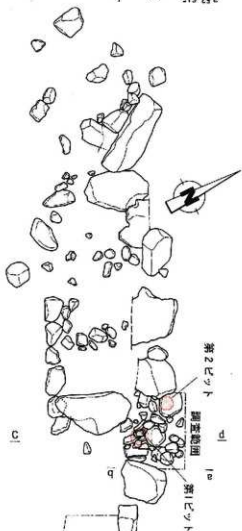
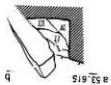
土坑は長径二・八び、掘り込み面からの深さ〇・六び（表土からは約一び）で、中央に径〇・八びで高さ〇・三びの黄褐色土や砂層などによって築かれた円形の高まり（定盤）がある。定盤は第7図に見るように、



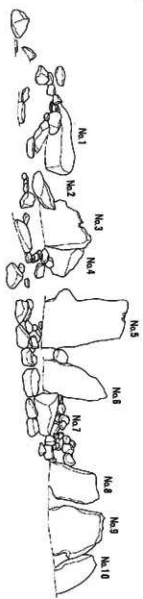
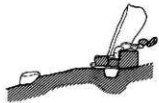
第7図 堂山地区拡張区鑄造土坑

- I 腐食土 (黒色土)
- II 暗黄褐色土
- III 黄褐色土 (炭化植物含む)
- IV 明黄褐色 (地山)

54.115



C54.115



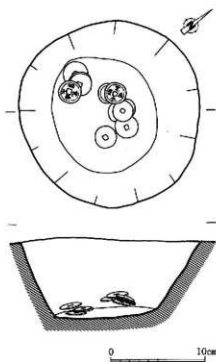
第8図 雲山地区遺跡

土坑底面に径一・二寸厚さ一〇〜二〇に灰褐色土を敷き、その上部に砂を薄く敷いた上に明黄褐色土を巡らせ、その内部に砂を充填し、更その上に径〇・八寸の円形に砂を厚さ約一〇に置き、砂層が触れる黄褐色土(第7図第VI、VII層)の内側面は火熱を受け僅かに赤変していた。上部の砂層の上には一部銕型(外型)の最下部が原位置のまま円形に巡っており、その内部に銕型片が散乱している。土坑底面にはビットなどとは確認されなかった。土坑は銕造後、I層によって一括して埋められている。

土坑覆土からは銅滓や鉄釘、土師質土器、瓦器が出土しているが、銕型は砂層上部に集中しており、土坑の底面や覆土からは出土しなかった。

c 墓地(第8図)

現在全く墓地として認識されていないが、自然石一〇基(そのうち五基は倒れている)が横一列に並び、その前面に一部に円礫で区画が認め



第9図 堂山地区墓地第1ビット(納骨穴)

られたので墓地であろうと考え、区画の内側、及び一基の倒れた自然石の下部を調査した。

石は最大で高さ一〇九寸、最少で四十八寸あり、偏平に節理した自然石で加工はされていない。また、表面には刻字や墨書も認められない。中央に位置するNo.5が最も大きく、円礫による区画もNo.5を意識しているようにみえる。自然石は緩斜面をテラス状に整形した後立てられ、炭化物が混入するIII層によって前面が整えられている。このIII層の広がりNo.10の前にも認められる。

今回調査したものはNo.7で、本来立っていたと考えられる位置〇・八四方を掘り下げた。その結果、III層の上面に拳大から人頭大の礫が堆積しており、III層中にビットが二カ所認められた。

第1ビットは径約二〇寸、深さ八寸で、底面近くで寛永通寶十二枚が出土した(第9図)。出土状況は九枚と三枚のグループに分けられるが紐に通したような痕跡はなく、布や紙などで包んだものであろうか。

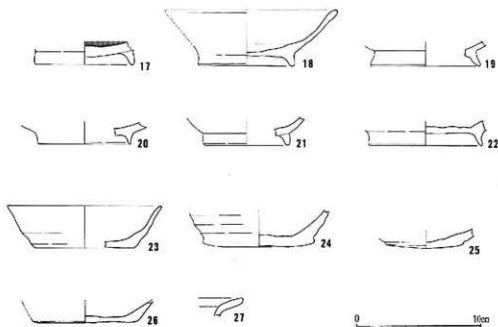
また埋土にはごく僅かな人骨片が混じっていたことから納骨のためのビットであると考えられた。人骨は小片であったため焼骨であるかどうかは判らなかつた。しかし、ビットの大きさから見て大葬骨であったと考えてもよいだろう。

第2ビットは径十五寸で深さ十寸であるが、内部からは何も出土せず、納骨のビットであるかどうかは確かめられなかつた。

2 出土遺物

a 包含層出土遺物

包含層からは瓦と土師質土器、内黒土器が出土している。最も多量なのが瓦で、土器類は少ない。まず、土器類について述べる。



第10図 堂山地区孤張区瓦包含層出土土器

土器 (第10図)

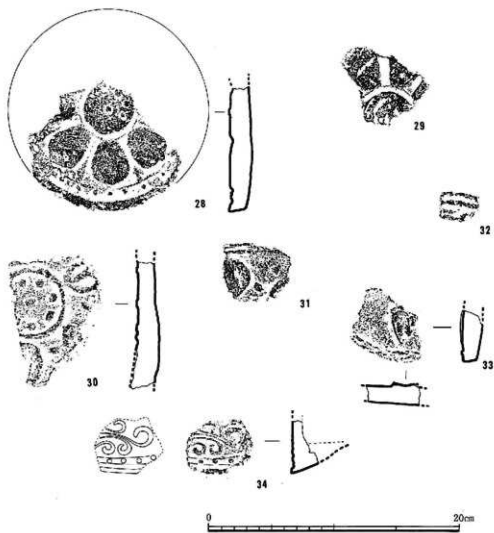
17は黒色土器A類、18から27までは土師質土器で、すべて摩耗が激しいがいずれも底部はへら切りであると思われる。高台付きの碗は18以外は高台部のみであり、体部の形態を窺い知る事ができないが、18は直線的に開くのに対して21はやや内湾気味に開く。高台部の形状は外傾気味に開くものと、やや内湾気味のものがある。杯は23が直線的な体部であるのに対して24はやや内湾しており、底部はやや張り出し気味の底部になっている。これは25も同様である。26は杯底部、27は鍋か鉢の口縁部。

これらの土器群と比較できる至近の資料は宇佐宮宏勲寺出土土器である。九世紀後半とされるSK-2と比較すると18の碗は器高がやや低いものの体部は直線的に伸び、ほぼ同じ形態である。このタイプの碗は十世紀になると体部が丸みを持つようになり、十世紀前半には糸切り底となることを考えても、九世紀代に納まると考えられる。杯は24、25のようにへら切りの跡がやや突出ぎみに残るものがあるが、SK-2にもこの特徴を持つものがある。小皿や糸切り手法が出現していない事からもこれらの土器群は九世紀後半代に納まると考えられる。

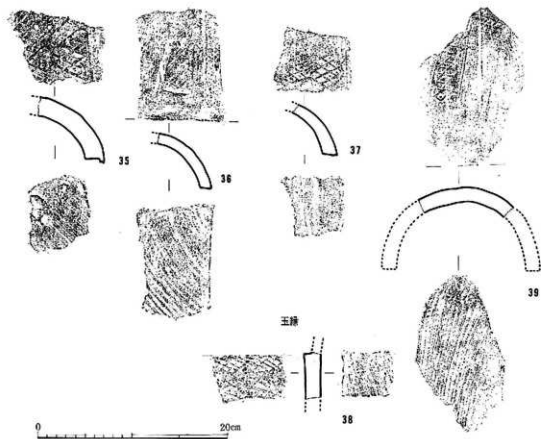
これらの土器と共伴する瓦は、軒先瓦が七点、丸瓦・平瓦破片が総数一〇二点あるが、小破片が多く計測あるいは十分を観測に耐える資料に乏しいことが惜しまれる。

軒先瓦 (第11図)

軒丸瓦は三種六点がある。28、29は素弁八弁蓮華文軒丸瓦で、先端をわずかに尖らせたふくらみのある蓮華文の間には間弁の表現がある。圏線で囲まれた中房には一十八の連子が配される。小形の珠文を巡らせた珠文帯の外側には狭い縁がつく。整った文様の割り付けが窺えるが、断面の造りは薄い。径約十六に復原される。30、31は弁間に珠文を配し



第11图 堂山地区擴張区出土軒瓦



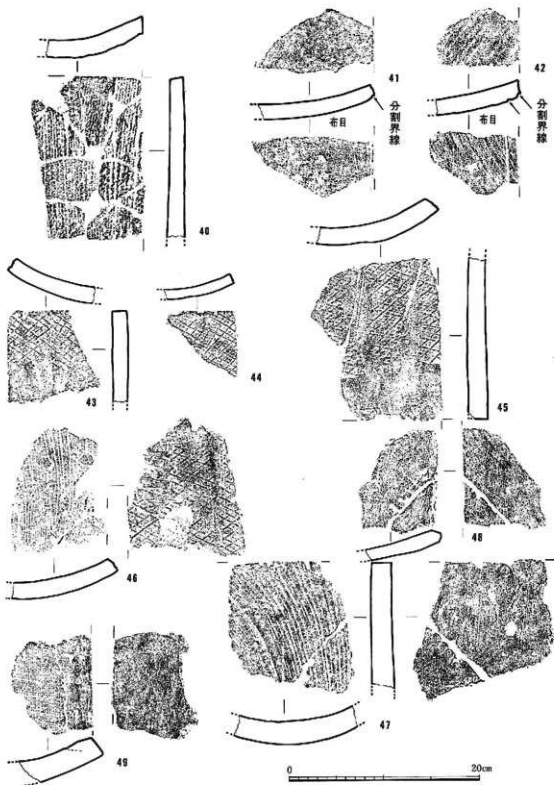
第12図 堂山地区拡張区出土丸瓦

た単弁六弁蓮華文軒丸瓦である。蓮弁には左右に浅い匙面状の窪みをつくって、この種の単弁の系譜をかううして守っている。中房は太い圏線で表わされ、一十七の蓮子を配する。珠文帯はなく、圏線が巡るのみである。内区の各蓮弁間には三個の珠文が三角形の頂点にそれぞれ位置するように置かれる。径は十四・五程度に復原されるが、資料が小さいため明確ではない。この種の瓦当文は極めて異例というべきものであるが、宇佐宮弥勒寺跡に一点酷似する資料があり、豊後園分寺跡にも類似したものがある。33は中心部を欠損しているため極先瓦の可能性もあるが、一応ここでは軒先瓦としておきたい。単弁四弁蓮華文の特異な文様である。蓮弁は中央部をやや深ませた木葉形を呈し、輪郭線をわずかに立てている。珠文帯はなく、圏線を巡らすのは30同様である。径約十四。32は30あるいは33の圏線部分である。

軒平瓦は34の小破片一点のみである。文様が磨滅のため明瞭ではないが、右行する蕨手状の蔓草が上下に重なり合いながら連続していく様子が分かる。下位の珠文帯は界線に珠文が接触している。断面は曲線型になるとみられる。

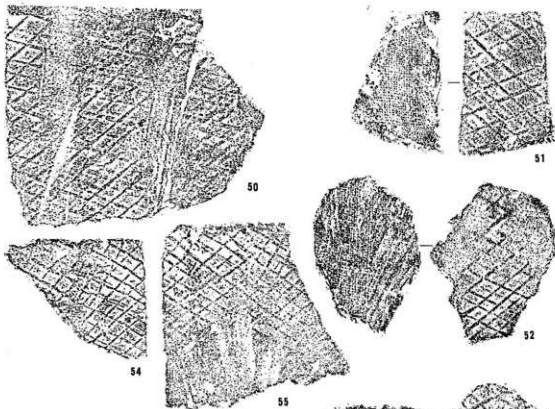
丸瓦・平瓦（第12、13図）

丸瓦は行基瓦きと玉縁付きの二種類があるが、玉縁付きを確認したのは丸瓦と認められる破片総数二二点のうちわずかに一点である。小破片のみで計測可能な資料はない。第12図35、37は径の縮減が認められるところから行基瓦きで、側縁は切り削りのままである。叩きは35、36が最も大きな斜格子（I類）、37が中形斜格子（II類）である。39は須恵質の大

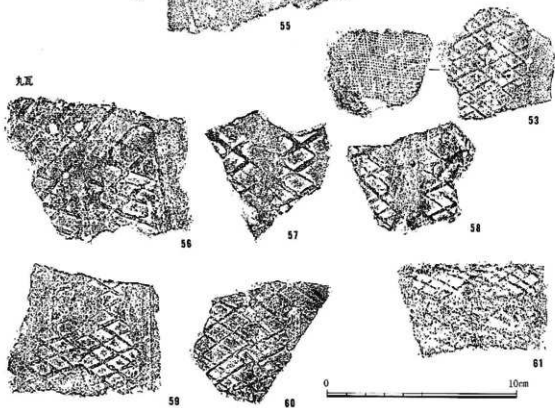


第13图 嵩山地区栾川县出土平瓦

平瓦



丸瓦



第14图 堂山地区拡張区出土瓦印き文

形丸瓦でⅡ類叩きが施されている。38は玉縁部分であるが、丸瓦部分の先端に段をつけただけで玉縁としており、通常の分厚い重ね目を造る手法と異なっている。叩きは細線の小形斜格子(Ⅲ類)。

丸瓦凸面の仕上げは、格子目叩きを施したものと撫で消しのものに分けられる。格子目叩きは全面に施さないものもあるので必ずしも意味のある数値ではないかも知れないが、格子目叩きと撫で消しの数量的割合は四〇に対し一八二である。(下段の表参照)

平瓦も同様に計測に耐える両側縁ないしは両側端を有するものはない。

第13図40は側縁に平行する繩目叩きの平瓦である。側縁・側端ともヘラ切り仕上げ、側縁はほぼ垂直になる。これに対し、43・46の格子目叩きをもつ平瓦は、凹面側からごく僅かな切り目を入れて割る手法をとっている。叩きは破片が小さいので厳密性を欠くが、43・44がⅣ類斜格子、45・46がⅠ類斜格子である。

凸面撫で仕上げ平瓦の側縁の仕上げは、48が三面取りを行うほか、49が円弧の中心へ向かうヘラ切り仕上げで凹面を僅かに面取りしている。49には粘土継ぎ目があり四枚造りとみられる。47は凸面撫で仕上げであるが、凹面は粘土塊から切り放した際の条痕のみで布痕がみられない。

平瓦のうち41、42は凸面に布痕をもつ特異な平瓦である。量的には平瓦全体の八九〇点に対し九点と僅かで、布目側に一・二の凹形台に設けられた分割界線の痕跡をもつ。この位置で凸面側から浅い切り目を入れて削っている。凹面の仕上げは撫で、この種の技法を示す平瓦の類例を知らないが、凹形台上での二枚造りを想定しておきたい。

丸瓦・平瓦の叩き文(第14図)は、前述したように平瓦の繩目叩き(全体で六六)を除けばすべて斜格子叩きである。小破片であること、必ずしも整然とした格子でないため厳密な判別は難しいが、一応の分類を

試みると次のようである。

まず丸瓦では、Ⅰ類が一・二、幅および一・二幅の平行線によって構成される斜格子で、56、57、58がこれに属し、平瓦ではⅡ類(51)に相当する。Ⅱ類は各〇・八幅の平行線によって構成される斜格子。59、60がこれに属す。平瓦ではⅢ類の52、53に近い。Ⅲ類は〇・六幅と〇・五幅の平行線から成る斜格子。玉縁を有する61がこれに属し、平瓦ではⅣ類の54、55と同一とみられる。

平瓦は、Ⅰ類とした50は一・七幅と〇・七〇・九幅の平行線から成る斜格子である。Ⅱ類もほぼ同じ大きさの斜格子であるが、斜行する平行線の角度がⅠ類とやや異なる。51がこれに属す。52、53はⅡ類と区別し難い部分もあるが一応Ⅲ類とした。Ⅳ類は丸瓦61と同じ叩きをもつ54、55である。

平瓦凹面の布目は観測されるものでは、51・53にみられるように一・二当たり八本程度の整然としたものが多い。

以上、智恩寺遺跡出土瓦の様相は従来知られていた宇佐地方古代寺院跡出土瓦と比較して、瓦当文様・造瓦技法ともに著し

種別	叩きの種類	数量	(B)小計	$B \div A \times 100$
丸瓦	格子目Ⅰ類	5	40	3.6%
	格子目Ⅱ類	16		
	格子目Ⅲ類	19		
	撫で (丸瓦合計)	182 222	182 222	16.5
平瓦	繩目	6	6	0.5
	格子目Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類	13	52	4.7
	格子目Ⅳ類	39		
	凸面布目	9	9	0.8
	撫で (平瓦合計)	823 890	823 890	74.7
	(平瓦+丸瓦)	(A)1102		

智恩寺遺跡出土丸瓦・平瓦の叩き文による組成表

い相違があることが判明した。伴出した数点の土器の示す年代から、これらの瓦が九世紀末を下限とする時期のものであることが確認された。

なお、互当の文様復原図は附章(四)に掲載している。

b 鑄造土坑出土遺物(第15図、第17図)

土坑からの出土遺物は、本来的に伴うと考えられる梵鐘鑄型と鉄釘、さらに埋土中に混入した瓦器、土師質土器である。62は瓦器柄。断面三角形の小さな高台が付くが外面は摩耗しており、調整は不明である。復原直径は七・八寸と大きく、十三世紀中ごろから後半のものと考えられる。63は糸切りの土師器小皿の底部である。64と65は鉄釘で、共に断面は四角形である。この釘は、鑄型を固定させるための掛木に用いたものと考えられるが、掛木の痕跡は確認されなかった。

なお、表土からは第16図に示すように、竊遼舟の青磁(66)や、瓦器

柄(67)が出土している。

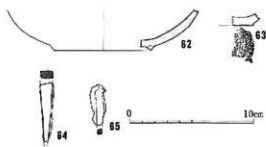
鑄型片は文様や形態が判るものは少ない。68から77は梵鐘鑄型の外型である。68は上部に鑄型の継ぎ目があり、そこから2本の縦帯が伸びる。縦方向の屈曲がきつい事から池の間の上部の部分と考えられる。69は同じく下部に鑄型の継ぎ目があり、縦帯と横帯がそれぞれ一条ずつ見られる。鑄型継ぎ目を水平にとるとかなりの傾きとなり、乳の間の下部の部分と考えられる。70から72はいずれも横帯の部分である。73から76は「く」字形に屈曲する部分で、73は定盤の上に凹形に巡っていた鑄型片であることから駒の爪の部分であると考えられる。いずれも一・八寸ほどは垂直に立ち上がったところで内側に僅かに屈曲をみせる。75により復元できる径は約七〇であるが、76はわずかに約二十一寸しかなく駒の爪の部分とするにはやや難があるかもしれない。77は乳の部分で、独立した作りになっている事から外型に埋め込まれたものであることが判る。

鑄型は一番外側まで残るものは無いが、いずれも外側には砂粒やスサの入ったいわゆる荒マネを置き、内側にはより精選されたマネを重ねる。更に68や71の鑄型片には表面に厚さ四、ほどの仕上げマネと考えられるものを重ねているが、他には明確に仕上げマネと思われるものは観察できない。そして、いずれも表面には型離れを良くするためにクロミを塗っている。

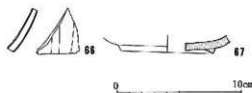
なお、拡張区表土から焙解炉壁が出土している(図版23)。溶解帯の部分ではないかと考えられる。壁面には鉄錐の様な茶褐色の物質が付着しているが分析では成分がわからなかった。

c 墓地出土遺物(第18図)

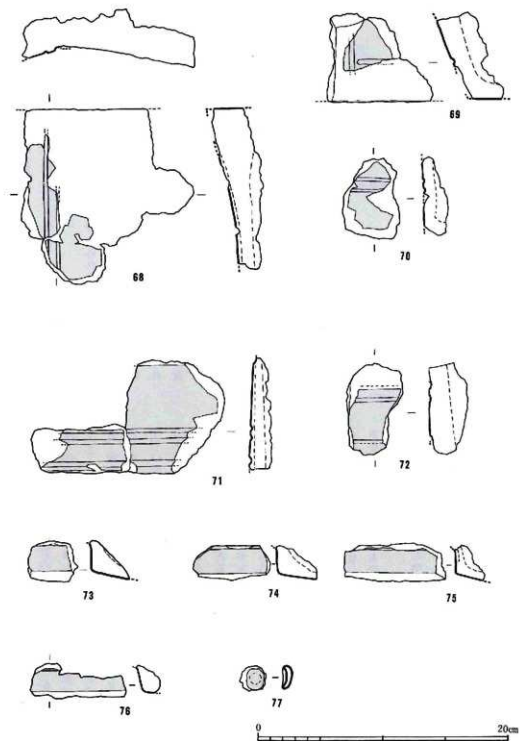
寛永通寶が第一ピットの底からから十二枚出土した。いわゆる六道銭である。「薬師寺発掘調査報告」の分類に照らせば、78から87は背文なし



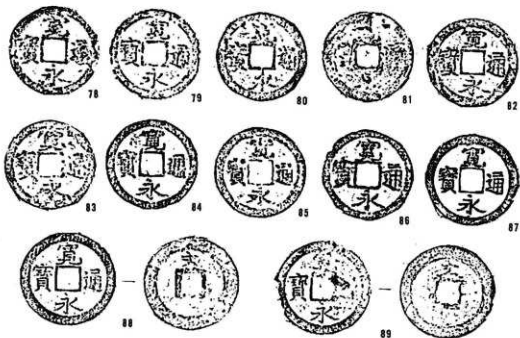
第15図 堂山地区拡張区鑄造土坑出土遺物



第16図 堂山地区拡張区表土出土遺物



第17图 堂山地区孤張区铸造土坑出土铜型



第19図 堂山地区墓地第1ピット出土寛永通寶 (原寸)

でいわゆる「コ頭通」「ス寶」のB I b類、88と89はは背文に「文」が入り、いわゆる「コ頭通」「ハ寶」で「四角目の筆頭にかぎをもつ水」のA II c類ということになる。前者は寛永ないし明暦年間(一六三五—一六五七年頃)に鋳造されたものとされ、後者は寛文八年(一六六八)初鋳のいわゆる「文銭」である。

3 小結

堂山地区は、本来智恩寺の諸行事の中心的役割を果たしたと考えられる講堂と六所権現(現在の山砥社)があり、智恩寺成立の鍵を握る地区であると考えられていた。調査の結果、智恩寺創建時のものと考えられる瓦包含層が検出され、その創建が平安時代前期にまで遡る事が推測された。共伴する土師器などの年代観は、点数が少ないものの九世紀後半代に納まると考えられる。出土状態から同一時期に廃棄されたと考えられる瓦は九世紀前半まで遡り得ると考えられる。

しかし、それがどのような構造の寺院であったのかについては、遺構が確認されなかった事から、今後の課題として残る。

また、その瓦包含層を切って梵鐘の鋳造土坑が検出された。九州では大宰府の錦ノ浦遺跡、福岡市の鴻巣館遺跡に次いで三例目の出土例である。時期の比定がむずかしいが、埴土から出土した瓦器が時期を示すすれば十三世紀中ごろから後半のものである。平安時代以前のこの種鋳造遺構は平面形が一边二・五寸前後の隅丸方形で深さ一寸近くあるのが通例であるのに対して、室町時代のものには平面形が不整形で浅く、定盤に空気穴を持つ構造のものも出現すると考えられている事からすると、智恩寺例はより新しい要素を持った土坑であるとする事が出来る。鎌倉時代の例が少ないが、長野県寺平遺跡例の先駆けをなすものとして考える事が出来るであろう。

国東半島西側のこの地方には、中世から近世にかけて鋳物師集団がいたことが梵鐘名からわかる。現在国東町の文殊仙寺にある応永四年（一三九七）に鑄造された梵鐘には「高田大工 藤原貞正」とあり、これと同巧の鐘が宇佐市大楽寺（永徳二年（一三八二））と北九州市法円寺（永徳元年（一三八二））にある。前者には「大工 藤原禪柱」、後者には「鋳師 大工善柱」とあり、「禪柱」と「善柱」は年代からも同一人物と考えられている。すなわち、十四世紀後葉には高田地方を拠点とした藤原姓の鋳物師がおり、現在の北九州市から国東半島にかけての地域で活動していた事が窺える。

ところで今回発見された梵鐘鑄型は駒の爪や池の間、乳の間の一部があるのみで全形は窺い知る事はできない。しかし、小倉から高田にかけての北部九州鋳物師の作品の特徴とされる二段の駒の爪は確認できなかった。むしろ、駒の爪はあまり張り出さない古式を残すものと言えよう。十三世紀末から十四世紀前半とされる福岡県太宰府市の鈍ノ浦遺跡出土の梵鐘鑄型は、二段の駒の爪、乳の頂部に小さな突起を持つ点などいわゆる「肥前鐘」の特徴を供えており、現存梵鐘からもこの種の梵鐘が十三世紀末から十四世紀になって盛行したものであると考えてよいことを示している。国東半島でも前記の文殊仙寺の梵鐘が下段の発達した二段の駒の爪を持ち、十四世紀後葉には高田鋳物師も北部九州の系統に属することがわかる。今回のものが、いわゆる「肥前鐘」成立以前の特徴を持っていると考えるならば、この梵鐘が鑄造された時期が瓦器によって示される十三世紀中ごろから後半とすることにも妥当性がでてくる。

一方、「鬼会の道」沿いの墓地はいわゆる自然石塔婆の並立する墓地で、年代を示すものがないことから一般にはほとんど顧みられなかった墓地である。最近の考古学では中世から近世の墓地を調査する機会が増え、

その構造が徐々に明らかにされてきたが、なお中世墓（十六世紀中ごろには一般に造墓を終える）と近世墓（十七世紀後半から末に出現する）との間には埋められない百年近い年月があるのである。今回調査した自然石塔婆の墓から出土した寛永通寶十二枚はいわゆる「古寛永」と「文銭」であり、元禄十年（一六九七）以降鑄造された「新寛永」が一枚も含まれていないことから、墓に埋納された時期が十七世紀代には納まる可能性が高いことを示している。この墓が中心よりはずれた墓である事からすれば、中心の大きな墓はさらに古く遡る可能性があり、そうすると空白の時代がこの自然石塔婆で一部埋まる可能性がある。葬法が火葬であるのは中世的であるが、塔婆ひとつが一人の死者の墓標として認識されていた可能性が高い事など、元禄期頃から出現する板碑タイプの墓標につながるものとして捉える事ができる。

(二) 寺屋敷地区

小字門の土居の一部は現在ほぼ方形に区画され、「寺屋敷」と呼ばれている。聞き取り調査によると以前寺があったと言えられており、智恩寺の重要な施設があった事が推測された。江戸時代の「太宰管内志」によると講堂より一町下ったところに「入三間に横四間」の「本寺」があったと記されており、「寺屋敷」にあった建物のことを指すものと考えられる。「本寺」の本尊は観世音菩薩であるとするが、現在観世音菩薩は「寺屋敷」からイヤの谷方面にやや下ったところにある観音堂に安置されている。おそらく「寺屋敷」が廃絶した後移されたものであろう。

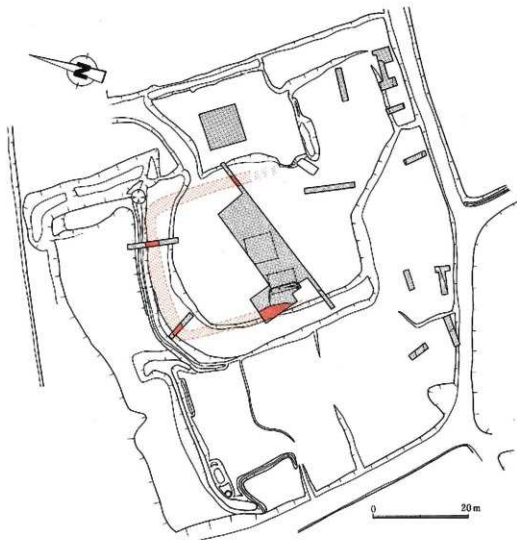
六郷山の寺院では、中世僧侶の居住する坊と共に院主の居住する院主坊(本坊)があり、坊の中心的位置を占めていた。それが江戸時代になり本堂・庫裏と呼ばれる本尊を安置し、住職が居住する場として引き継がれた例が多く、智恩寺の「寺屋敷」も本来は院主坊ではなかったかと考えられるのである。一般の坊が展開するイヤの谷の線上にあり、講堂・六所権現のすぐ下という立地で、周囲に比べて約一歩ほど高く立地条件に恵まれたこともその想定を裏付けるものである。



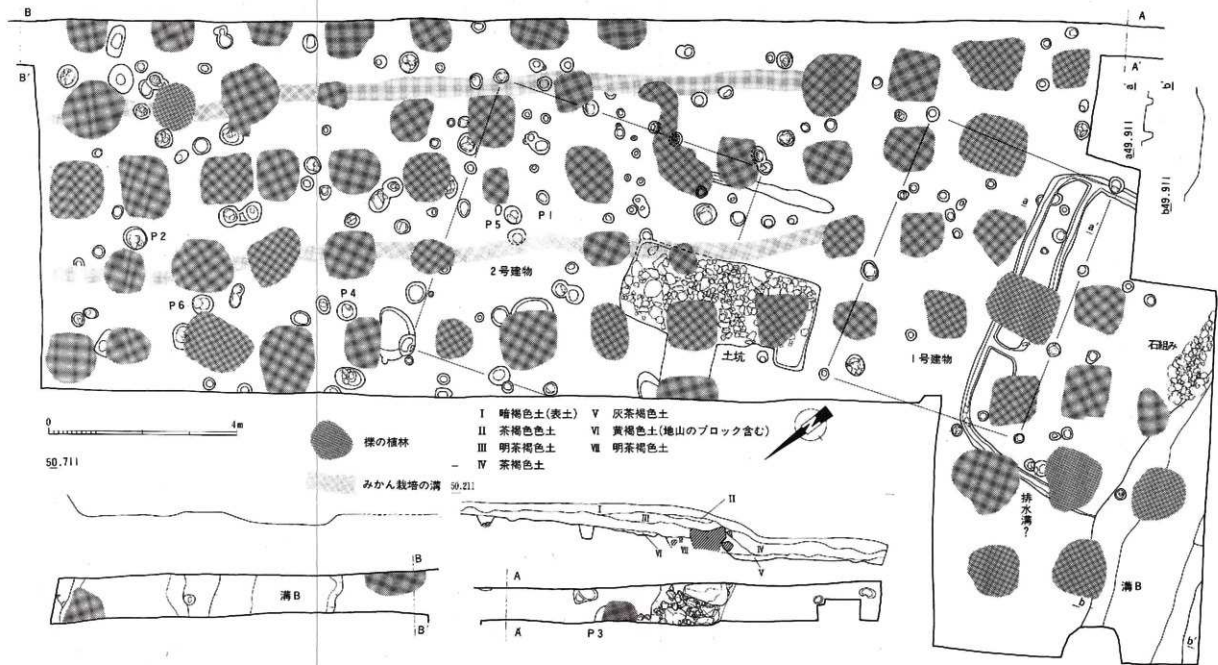
第19図 寺屋敷地区調査区位置図

「寺屋敷」の現況を細かくみると、一辺約四〇メートルの方形で、北側に一段低い道から屋敷に入る鉤手状に曲がる入り口と思われる跡があり、それと対応するように南側にはスロープがあり、屋敷の外（イヤの谷や堂山）につながっている。その間は中心部より一段低い道状のテラスがつながっている。また、北側の一辺には浅い溝とその外側に低い土壁が巡っている。そして区画の北東側には二十五メートル×二〇メートルの基壇状の高まりがあり、その東側には長さ二十三メートルにわたって幅約二メートルで深さ一・五メートルの直線的な堀がある。一部北側が新しい道によって破壊され、南側は埋められている。

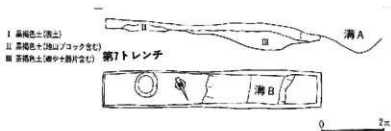
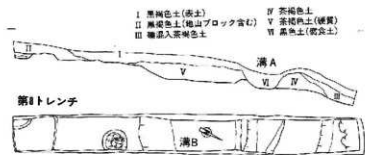
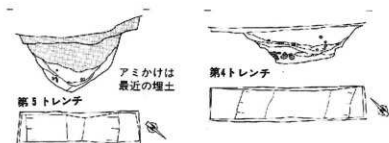
「寺屋敷」周辺の平面形は、二〇年ほど前に道の拡幅と一部付け替えを行ったのみで、基本的には明治二十一年作成の地籍図と変わりはない。しかし、堀の埋立や土塁の取り壊しなど、景観上はかなりの変化があったものと考えられる。聞き取りや現状の測量調査により復元した景観を第19図に示す。調査の基本は、近年埋められた堀の掘削時期と聞き取りで確認できなかった堀の確認、さらに堀で囲まれた内部の遺構の調査である。



第20図 寺屋敷地区方形溝（溝B）



第21図 寺屋敷地区拡張区

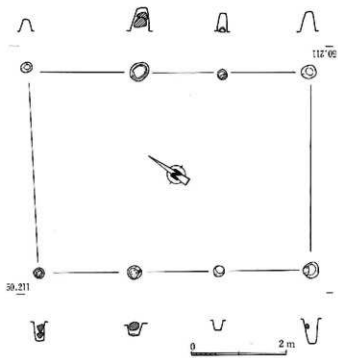


第22図 寺屋敷地区トレンチ

1 遺構

a 堀および溝

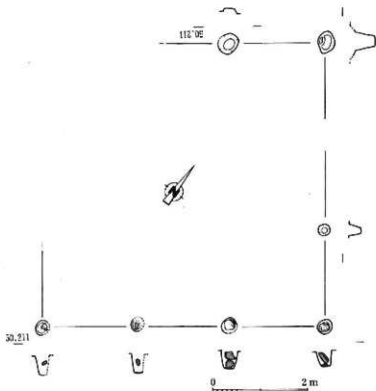
現況では堀の痕跡は第19図に示す通り、寺屋敷を取り巻くものの一部（a-b地点）と、内部の区画を示す小さな溝Aのみである。しかし、聞き取りによるとa地点の堀はさらに南東にc地点まで直線的に伸び、現状の道に到る。現状の道も以前は堀であったといひ、c地点からd地点に伸びていた。c地点からd地点の間は、堀が二重になっていたといひ、その間は土塁状であったという。e地点からは更に屈曲してf地点に伸びていたというが詳細は不明であった。f地点からg地点への現状の道も堀の跡で、若干拉幅されている。つまり、寺屋敷とその東側の区



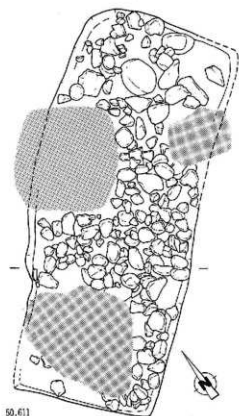
第23図 寺屋敷地区拡張区第1号建物

画を大きく囲む堀が最近まで残存していたという事である。

発掘調査はe地点からd地点への二重の堀の内側の堀の確認を中心として行った。聞き取りを裏付けるように、第22図のように堀の下部まで最近の覆土であった。しかし、その下側はそれ以前の堆積で堀の掘削年代を示す可能性があったが、トレンチ調査ということで良好な形で遺物



第24図 寺屋敷地区拡張区第2号建物



第25図 寺屋敷地区拡張区土坑

うに溝A掘削以前に寺屋敷を区画していた溝である可能性があるのである。溝覆土からは良好な形で遺物が出土していないが、寺屋敷内部の状況からみて中世まで遡るものである事は間違いない。この溝Bは拡張区南西部では入り口と考えられる部分まで内側に石敷きが見られ、それは拡張区南側の延長したトレンチでも確認された事から、段差のある寺屋敷内部に至る施設としてもこの溝Bが利用されていた事を窺わせる。

b 建物(第23・24図)

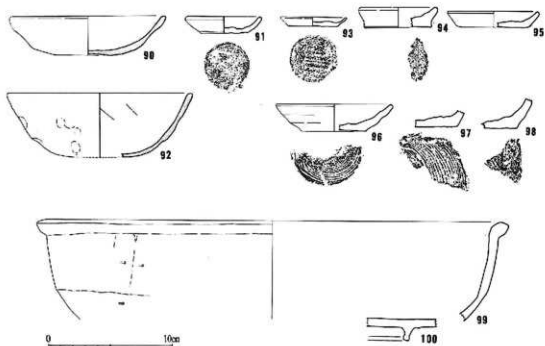
寺屋敷中央の拡張区では多くのピットが検出された。調査区が限られていた事や調査区内に櫻の植林があり、部分的に調査できなかった事もあって確實な建物の柱穴と認定できなかったものは少なかった。その中で掘立柱建物が二棟確認できた。それを北側から1号、2号とし説明する。

1号建物跡は一間×三間の掘立て柱建物で、約四六×六六である。方形形溝によって囲まれた内部に入る入り口施設と考えられる地点にあり、門の周りの排水溝と考えられる溝を切っている。柱穴の内部からは時期を示す遺物は出土しなかった。

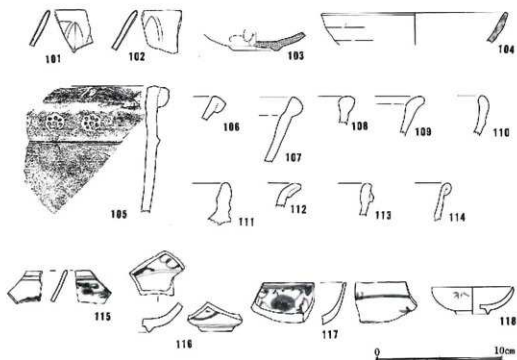
2号建物跡は調査区のはば中央にあり、それは方形形溝で囲まれた平坦面のはば中央でもある。一部調査区外であるが三間×三間の掘立て柱建物と考えられ、約六六×六六である。柱穴の内部には柱を抜き取った後に礎を入れており、その間から土器が出土した。

が出土しなかった。この二重の堀はc地点で終わっている事が確認され、a地点からe地点に伸びる溝とはつながらなかった。第3トレンチではこの堀と考えられる溝を検出したが、f地点へのつながりは明確にはつかめなかった。

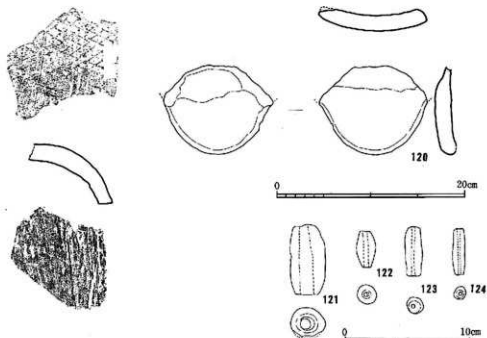
一方、寺屋敷の内部の溝Aは、第8トレンチの土層図(第22図)にみるように、基本的には現在に連なる溝である。すなわち、獨削年代は後述の溝Bの埋没以後としか言えない。しかし、問題となるのは溝Bで、それと同一と考えられる溝が第7トレンチと共に第8トレンチでも確認され、さらに寺屋敷中央部の拡張区南西トレンチでも確認された。しかし、第10トレンチでは確認できなかった。すなわち、溝Bは第20図のよ



第26图 寺屋敷地区拡張区遺構出土遺物



第27图 寺屋敷地区拡張区表土出土遺物



第28図 寺屋敷地区拡張区出土瓦・土鉢

o 入り口施設

現状では、前述のように寺屋敷北側に鈎手状に曲がる入り口施設がある。しかし、今回拡張区において内部への入り口と考えられる遺構が検出された。それは溝Bに取り付くように「コ」字状に浅い溝を巡らすもので、門に付随する排水施設であると考えられる。溝は幅二十センチ、深さ十センチで、北側は二重になる。

しかし、本来溝内部にあったと思われる門の遺構は検出されなかった。削平されたとは考えられず、礎石建物であった可能性が高い。

d 土坑 (第25図)

調査区のほぼ中央で検出された。大きさは四×一・七センチ、深さ〇・五センチで、平面形は長方形を呈する。第25図のように人頭大の河原石が充填され、内部からは若干の土器が出土した。性格等は不明である。

なお、この土坑に平行して南側に焼土の充填した浅い溝がある。軸がほぼ同一である事から何らかの関連のある遺構かもしれない。

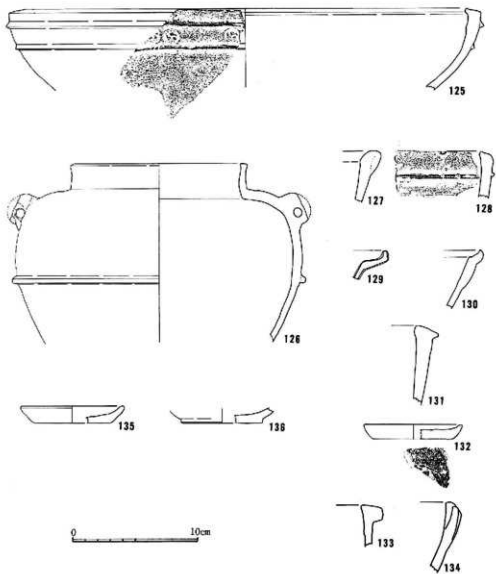
e 基壇状の高まり

寺屋敷東側に約二五×一八センチの高さ約一センチの長方形を呈する高まりが認められたので、八×八センチのグリッドを設定し掘り下げた。その結果浅い溝状遺構が検出されたが時期は不明であった。また、柱穴は全く無かった。「寺屋敷」造成時に取り残されたものであろうか。

2 出土遺物

a トレンチ出土遺物 (第29図)

寺屋敷を巡る堀は各所にトレンチを設定し調査を行った。126から127は第3トレンチ、128は第1トレンチ、129・130は第5トレンチ、131は第10トレンチ、132から134は第8トレンチ、135と136は第7トレンチから出土したものである。



第29図 寺屋敷地区各トレンチ出土遺物

15は浅い平鉢状を呈する火鉢。二条の突帯の間には巴文の刻印がある。15は瓦質の茶釜である。口縁部は直立して高く伸び、胴部もやや肩の張る球形胴であることから十六世紀まで下るものではない。15は土師質の鉢の口縁部。15は瓦質の火鉢。口縁部で小さく内側につまみ出される。突帯の下位に梅花文のスタンプがある。15は青磁の盤。口縁部は「く」字形に折れた後、更に端部を上へ引き上げる。黄緑色の釉で、胎土は明るい橙色を呈する。十四世紀から十五世紀。15は鍋の口縁部と考えられる。土師質。15は瓦質の火鉢。15は復元口径七・八寸の小皿。底部が厚く、口縁部を小さくつまみ出す。十三世紀後半から十四世紀。15は瓦質の火鉢か。15は瓦質の片口の鉢。15は復元口径八・四寸の小皿。十三世紀代か。15は土師器杯の底部。

以上の遺物は出土層位が不明で、堀や溝の年代を示す明確な資料とは言いがたい。しかし、近世まで下る資料はなく、堀の機能していた年代が中世で納まるものと考えられる。

b 建物および柱穴出土遺物(第26図)

二棟の建物跡が検出されたが、そのうち遺物が出土したのは2号建物跡である。90と91は柱穴の中の礎の下から出土した。柱を抜き取った際に置かれたものであろう。建物が廃棄された時期を示すと考えられる。90は浅い体部に不安定な平底を持ち、瓦器様の最終形態を示す。91は口径六・二寸の土師器小皿。これらの特徴は「定永」銘を持つ平瓦と共存する宇佐市大楽寺出土土器に近く、十五世紀前半代と考えられる。

93から98は拡張区のピットから出土した。93はP1、94はP2、95はP3、96はP4、97はP5、98はP6出土である。93から95は土師器小皿、96から98は土師器杯である。95は復元口径七・八寸で十三世紀代に遡るものであろう。93、94、96はいずれも十五世紀後半から十六世紀代である。

c 土坑出土遺物(第26図)

99と100は鉢であるが、同一個体の可能性が高い。口縁部が丸く肥厚し、外面はへら削りが施されている。

d その他の出土遺物(第26、27、28図)

92は拡張区南側の排水溝と考えられる溝の階で、地山面直上から出土した。やや深めの瓦器様であるが、高台はない。外面には指頭痕が顕著に残りミガキは認められない。これらのことから90の瓦器よりは時期が古く、十四世紀後半に遡るものであろう。これが排水溝の時期を示すものであるとしたら、方形溝の機能していた時期も想定できる。

101から105は拡張区の表土から出土した遺物である。101と102は龍泉窯系青磁碗で、いわゆる編蓮弁文である。103は瓦器碗であるが、摩耗が激しく調整は不明である。底径が小さく、十四世紀前半か。104は瓦器碗。ヘラミガキが見られない事から十四世紀以降。105は瓦質の火鉢。口縁と突帯の間に梅花文のスタンプがある。106から108は鉢。109は備前焼の播り鉢口縁部。江戸時代初頭。112は鉢で、焼成が良く江戸時代まで下る。113は播り鉢。114は鉢の口縁部で、いずれも江戸時代。115は色絵磁器。116から118は伊万里焼の染め付け。119は笹文を描く小杯。いずれも十八世紀代。119は上面格子叩き、下面は布目痕のある丸瓦。堂山地区出土瓦と同様である。120は面戸瓦。土師質で、外面は比較的丁寧なナデ調整。121から124は土鉢。

3 小結

寺屋敷地区は発掘調査の結果、聞き取りや現状で確認できる場で囲まれた区画以前に幅約二・五mで深さ約〇・三mの溝(溝B)が方形に巡る一辺約二十八mの区画が存在した事が明らかとなった。この溝の時期は良好な出土遺物が無く確定できないが、この溝とつながると考えられ

入り口施設の排水溝の時期が十四世紀後半代であるとしたり、方形溝も南北朝期まで遡る可能性がある。寺屋敷地区の出土遺物は、表土出土のものも含め十三世紀前半以前に遡る可能性のある遺物はなく、寺屋敷の整備は十三世紀後半以降であろう。

遺構は不明であるが中世後半の遺物も出土し、寺屋敷は連絡と江戸時代まで引き継がれたものである事が想定できる。現状で寺屋敷を大きく囲む堀は江戸時代以降掘削する必然性が見いだせない事から、中世末戦国期に入り口施設と共に掘削・整形されたと考えるのが最も説得力が有ろう。しかし、遺物で確認できるものではなく今後の調査に期待したい。

ところで、問題は溝Bで囲まれた空間に建てられた建築物の性格である。今回調査区が小さかった事もあり十分検出できなかつたが、十五世紀前半の廃絶と考えられる掘立て柱建物は三間×三間の堂宇を想定させるものであり、寺屋敷の内部の位置からいっても、中心的な仏堂であった可能性は高い。鎌倉時代末から南北朝期造立と考えられる観世音菩薩が本尊であった可能性もあるであろう。

また、この段階では内部への入り口（門）が南西側の中央に設けられていた。以後この入り口がどうなるのかは判らない（以後礎石建物を替わったならば、礎石が残らなかつた可能性がある）が、戦国期になり城を整備し、「寺屋敷」を大きく掘で囲む段階で、改変が行われた可能性は高いであろう。

（四）イヤの谷地区

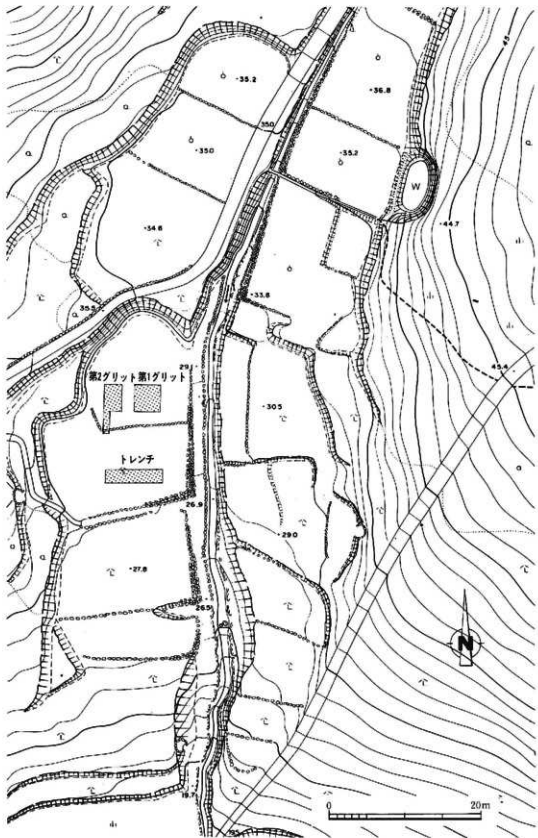
イヤの谷地区は堂山の西側に入る谷沿いの地域で、ここには坊跡と推測されるテラス状の平坦地が小溪流の両側に展開している。「イヤの谷」は通称で、「湯屋の谷」の転訛であろう。「坊」が存在した地名としてふさわしい。この地区には「三宅」姓の人々が最近（明治時代）まで居住していた事から、「三宅の土居」とも呼ばれている。

坊跡と考えられる平坦面は二〇カ所程度あり、三〇㎡から二〇〇㎡の大きさのものがある。平均すると一〇〇㎡ほどになり、かなり小規模である。これらの坊と考えられる施設がいつ形成されたのかを探るのがこの地区の調査の目的である。調査は、平坦面の中でも大きく、また一番上位に位置する地点を選んで、トレンチおよびグリットにより調査を行った。

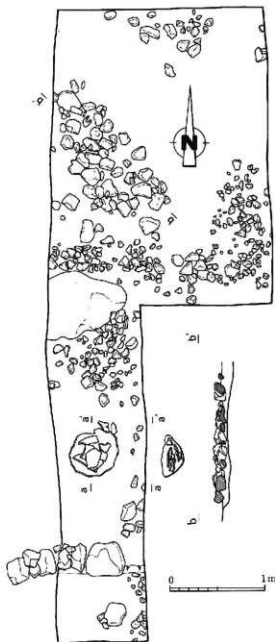
1 遺構

調査対象に選んだ平坦地は約三〇㎡の段差を持つ上下二段となっており、それぞれ約一四〇㎡と二〇〇㎡ある。ここは明治二十一年の地籍図では宅地となっており、最後まで人が居住していた区画の一つである。上段に二カ所のグリット、下段には一カ所トレンチを設けて調査を行った。

その結果二カ所のグリットとトレンチとともに河原石を数き詰めた遺構と思われるものが検出された。第31図は第2グリットの状況である。石敷きはいくつかのまとまりで捉えられ、その内の一カ所を掘り下げたところ浅い掘り込みの内部に河原石が充填された状況が確かめられた（第31図）。しかし、明確な遺構との確証は得られなかった。また、第2グリットからは地山に掘り込まれた埋裏が出土した。二段に分かれた平坦面は、言伝えでは上段に住居があったことであり、位置からも「便所裏」



第30図 イヤの谷地区調査区位置図



第31図 イヤの谷地区第2グリット

であった可能性が高い。

2 出土遺物

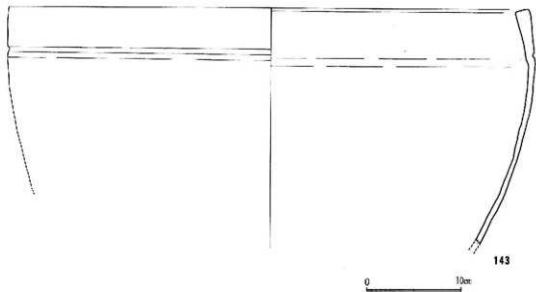
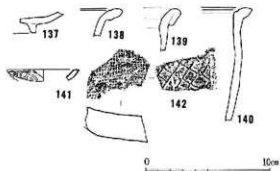
各グリットにおいて表土から遺物が出土している。10は高台付きの土師器類、体部が丸みを帯びており、十一世紀ころのものであろう。138から140は鉢、14は磁器の紅皿、型作りで外面にタコ唐草の文様がある。これらはいずれも江戸時代、142は平瓦で、上面に布目、下面に格子のタタキ板がある。堂山地区で出土した瓦と同じ特徴を持っている。143は第2グリットから出土した埋篋、口縁部は肥厚するが外反しない。江戸時代であろう。

また、イヤの谷の中央部を流れる溝（小溪流）から144、145の磁器が表

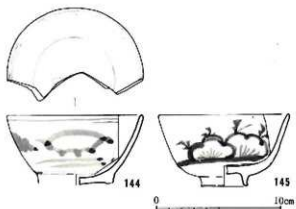
採された。144は体部が直線的に伸び、高い高台が付くいわゆる広東碗。十八世紀末から十九世紀。145はいわゆるくらわんか碗。十八世紀。

3 小結

調査の結果、一点の高台付き碗（10）と瓦を除いて古代・中世に遡る遺物は出土しなかった。この土器や瓦がどのような意味があるのか判らないが、何らかの遺構がある可能性もある。しかし、基本的に現状で視認できる遺構は、近世までしか遡らない。もちろん調査範囲や調査した跡跡の選定の問題などがあるので、このことで跡跡すべてが中世まで遡らないということにはならない。今後の調査が期待される。



第32図 イヤの谷地区グリット出土遺物



第33図 イヤの谷地区溝出土遺物

(五) 西城地区

講堂・六所権現のある堂山から、イヤの谷を隔てて西に位置する「西城」は、その名の通り城郭的な構えをみせる遺構が現存している。現在「西城」は小字として残っており、地元の人はそのうち最も高所にある平坦面を「城内」と呼んでいる。

遺構は東西に三つの郭が連なり（東側から第一郭、第二郭、第三郭と仮称する）、西に行くほど小さくそれぞれ約二丁の段落ちとなっている。その長さは全長百二十丁で幅は三十八丁四十二丁である。

「西城」への入口は現状では明確には把握しがないが、うちだんの坂を登ってきた地点、すなわち東側にあつたと考えるのが妥当性があろう。

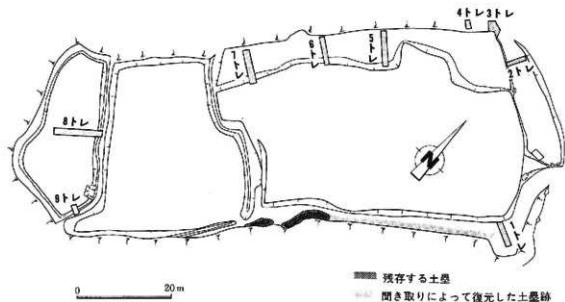
戦後蜜柑園造成の時に土塁を壊し、堀を埋めたが現在でもその痕跡を窺う事ができる。第34図が開き取りによる土塁と堀の復元想定図である。調査はその埋められた堀の規模と掘削時期、また他の堀の有無の確認を目的として九カ所にトレンチを設定し調査を行った。

なお、小字西城の東の地点（西城東地区とする）で、堀の有無を確認するためにトレンチを設定して調査した（第37図）。ここは地籍図の調査で「山林」が「コ」字状に巡っていた地点であり、二十年ほど前までは堀の痕跡があつたとされるとされるのである。

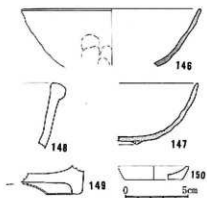
調査の結果、第1トレンチと第2トレンチ（第38図）で堀の跡が確認された。遺物は出土しなかったが、状況から寺屋敷周囲を取り巻く堀と一体のものである可能性が考えられる。

1 遺構

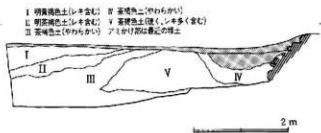
第1から第7トレンチまでは、第一郭の周囲の状況を確認するために設定した。第35図は最近まで堀があつたとされる地点の第1トレンチの土層図である。この部分は東側に方形の張り出し部を作り出すところ



第34図 西城地区調査区位置図



第36図 西城地区出土遺物

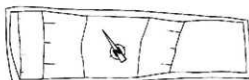


第35図 西城地区第1トレンチ南壁土層図



アミかけ部は
新しい埋土

I 黒褐色土
II 灰褐色土



第1トレンチ



第2トレンチ



第38図 西城地区東第1・2トレンチ



第37図 西城地区東調査区位置図

ある。土層をみると郭側に堀があり、内側の立ち上がりは石垣で築かれていた。堀の外側（図の左側）は本来土塁状に高まりを形成していたと考えられ、さらにその外側の張り出し部分は緩やかな傾斜を持った土で埋められている状況で、この部分が盛り土で形成されたものである事が確かめられた。

第5から第7トレンチでは、図版15にみるように石敷き状の状況がみられた。性格等は掘り下げを行わなかったために不明である。その他のトレンチでは遺構は確認できなかった。

2 出土遺物

16、17は第1トレンチから出土した瓦器類。同一個体と思われる。体部下位に明確な指頭圧痕が残り、低平な断面三角形の高台が付く。十三世紀後半のものであろう。18は瓦質の火鉢。19は瓦質火鉢の脚。150は復元口径五・六寸の土師質土器小皿。

3 小結

今回の調査では明確な構造を把握できなかったものの、西城は戦国時代に整備された遺構であった可能性が高いと考えられる。しかし、十三世紀中ごろに遡る瓦器類が出土しており、寺屋敷地区や堂山地区と同一時期に何らかの動きがあったことが考えられる。

立地としては都甲川が本流の柱川に合流する地点を見下ろす三方に開けた絶好の地点に選地している。しかし、防御という面からみると南側はかなりの緩傾斜であるにも係わらず、現状では何等堀等の施設は見られない。戦後の開墾時に削平された可能性もあるが、今後注意を要する点であろう。今回は周囲を含めて充分に調査ができなかったので、全貌の解明は今後の発掘調査に期待される。

註

- (1) 『弥勒寺』 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 一九八九
- (2) 佐藤浩司『平安時代の土師器編年表と地域相の解明にむけて』
『寺田遺跡』 北九州市教育文化事業団 一九七八
- (3) 『豊後国分寺跡』 大分市教育委員会 一九七九
- (4) 中山光夫氏の御教示を得た。他に小片で銅が付着したものがあり、湯だまりの部分ではないかとの御教示を得た。
- (5) 『彌勒寺発掘調査報告』 奈良国立文化財研究所 一九八七
- (6) 山本信夫・狭川真一『釜ノ浦遺跡（福岡県）—京前大宰府跡物師の解明—』
『佛教学術』 一七四号 一九八七
- (7) 『鴻巣跡跡1』 福岡市教育委員会 一九九一
- (8) 五十川伸夫『京都大学教養部構内A22区の発掘跡遺構』
『京都府埋蔵文化財情報』 第5号
京都府埋蔵文化財調査研究センター 一九八二
- (9) 『寺平遺跡』 長野県上伊那郡飯島町 一九八〇
- (10) 坪井良平『日本の梵鐘』 一九七〇
- (11) 小倉正五『平佐地方の瓦器類について—型式・編年に関する試案—』
『古文化談叢』 第14集 九州古文化研究会 一九八四

第六章 景観の復元とその変遷

今回の智恩寺の調査は、六郷山寺院に対する初の本格的発掘調査である。養老二年（七一八）仁聞菩薩開基の伝承を持つ六郷山寺院の創建はいつか、どのような変移を経て現在に連なるのか。国東の風土と人を形造ってきた六郷山寺院の推移は国東の歴史そのものである。そのような問題点にどこまで迫る事が出来たのか。三年間の調査の中で、考古学的な調査のみならず文献史学や民俗学、さらに地理学的手法や仏教美術の方面からも多様に接近していった。ここでは、それらを総合的に考える事によって智恩寺の遷り変わりを景観を中心として述べることにしたい。まず、個々の要素に分解した上でそれぞれの変遷を見、そして智恩寺全体の景観の復元を行いたいと思う。

（講堂）

現存する唯一の江戸時代の建築で、六郷山寺院の中でも岩戸寺、天念寺などの講堂と共に数少ない貴重な遺構である。建物の柱に墨書された峯入り銘よりすると、現在の建物は安永八年（一七七九）以前の建築である。現在は基壇状の高まりの上に礎石を据え建てられている（附章参照）が、前面の発掘調査によると表上下約五^〇で地山（岩盤）であり、周辺が削平されていると考えた方がよい。

ところで、六郷山が將軍家の御祈禱所になった安貞二年（一一二八）に注進された「祈禱巻数目録」（通称「安貞の目録」）によると、智恩寺においては「日次勤初後入堂讀誦教典」とあり、毎日「堂」（講堂と考えても良いだろう）内で讀誦が行われていた。講堂は当初から重要な、根本的な施設であったものと思われる。

（六所権現）

現在、講堂の東側に「山紙社」の拝殿と本殿がある。江戸時代の「太宰管内志」（著者の伊藤常足は文政九年（一八二六）に豊後を訪問している）によれば、講堂の「左方南向に山神の小石祠あり九尺四方ノ拝殿あり又其左に権現ノ社あり南向なり」とあり、「山神」の石祠と並んで「権現」があったと記されている。この「権現」は六所権現と考えても良いだろう。権現は明治初年の廃仏棄釈の際に「身遣神社」に変更になり、後に「山神」が「山紙社」となって社をすり替えたものと考えられる（附章参照）。

ところで「安貞の目録」には「六所権現於御寶前、二季祭五節供等」とあり、年々回（他の寺院の例からすると二月と十一月）の例祭（農耕儀礼？）と、節句ごとの御供えを行っていた。他の寺や岩屋では権現前で仁王講の法会や観音経の讀誦も行われており、講堂と共に重要な位置にあったのである。この六郷山には欠くべからざる六所権現がいつ成立したのか、今回考古学的には確認できなかったが、文書資料では判らない分野であり今後の発掘調査を待ちたい。

（院主坊）

院主坊であるとの確証はないが、「寺屋敷」と呼ばれる地区がその可能性が高い事が今回の調査で初めて明らかになった。「寺屋敷」は南北朝期前後に浅い掘りを巡らす方形区画を形成し、戦国期には深い堀で防御を固めるなど重要な施設があった事が推測できる。「寺屋敷」は坊跡が展開するイヤの谷から直線上にあり、また講堂などのある堂山から下ってきたところにあることから、位置的にも院主坊と比定することに問題はないだろう。今回の調査で明らかになった内部の建物は仏堂と考えられる掘立て柱建物と、門的な建物の二棟であった。前者は十五世紀前半に

廃絶したものと考えられる。

「太宰管内志」に、講堂より、「一町下りて本寺あり入三間に横四間の堂なり本尊は觀世音菩薩なり」とあり、江戸時代には「寺屋敷」に觀世音菩薩を本尊とする「本寺」があったものと考えられる。この「本寺」も明治二十一年作成の地籍図には無く、それまでに廃絶したことがわかる。

(坊)

イヤの谷の小溪流沿いに、石垣を組んで平坦面を造りだした坊と考えられる遺構が見られる。明治時代までは何軒か家があり、人々が居住していた。この坊と考えられる施設がいつ形成されたのかに付いては今回の調査で明らかにはできなかった。

(観音堂)

イヤの谷の最上部、「寺屋敷」から約百メートル下ったところに觀世音菩薩を安置する観音堂がある。現在の観音堂は昭和六〇年ごろ同一位置で建て替えたものである。以前の堂は昭和三十二年発行の「豊後高田市誌」に「新しく村の有志によって、建てられたと記されているので、戦後建てられたものであろう。觀世音菩薩は本来は「本寺」の本尊であったことから、「本寺」が廃絶後観音堂を造り移したものであると考えられる。寛保元年（一七四一）から寛延三年（一七五〇）の間に調製されたと考えられる「豊州御領村々様子大撰書」には「薬師」の堂（現在の講堂）はみえても観音堂は記されていないので、観音堂は古い由緒を持つものではないのであろう。

(城)

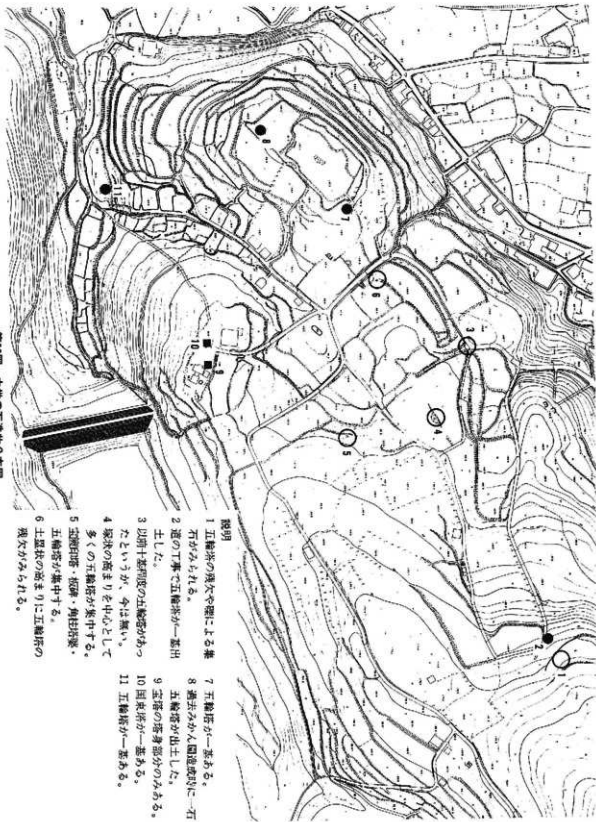
西城は講堂からイヤの谷を挟んで西方にある高台にある。出土遺物によると十三世紀代には何らかの施設があったものと考えられる。しかし、

調査範囲が狭かった事から十分な様相は掴めなかった。しかし、現況は概ね中世の状況を維持しているものと考えられる。現況では、三つの郭が一直線上に連郭式に連なっており、イヤの谷側に堀と土塁で防御を固めているのが確かめられる。独立的な山城ではなく、居館的な要素が大きい施設であろう。その場合でも南側の防御が薄いことが気になる。

(墓地)

中世においては、戦国期の院主の墓地が「寺屋敷」の東約四〇メートルのところに築かれている。その中で最も古い紀年銘の石造物は天文二十四年（一五五五）の寶篋印塔（供養塔）で、他に元和八年銘の角塔婆タイアの塔婆や異形の国東塔、板碑形の塔婆、五輪塔、自然石塔婆などが集中しており、中世末の墓地であったと考えられる。（ただし、近年散在していたものを一方所にまとめており、原位置を保つものは少ない。また、個別の石造物については附章参照）他には智恵寺の台地上には第39図のように五輪塔が散在しており、すべてが墓ではないと考えられるが、墓所は散在していたものかも知れない。その中で小字大辻には五輪塔があるほか石数きの遺構らしきものが連なっており、また「寺屋敷」の東の区画内には塚状の高まりの周辺に五輪塔が集中しているなど、これらは中世の墓地であった可能性が高い。今後の調査で明らかにしたい点である。

また、智恵寺台地には江戸時代中期以降の知恵寺村の墓地としてガランバヤシの墓地がある。最古の墓標は寛文三年（一六六三）で、元禄年間（十七世紀末頃）からやや増え始め、多くなるのは宝暦年間（十八世紀中頃）からである。また、台地北側斜面には庄屋の墓地が単独で営まれている。これらの墓地と中世の墓地を時間的に繋ぐものとして、堂山下にある自然石塔婆の墓地をあてることができる。発掘調査で十七世紀



第318図 中世の石遺物分布図

説明

- 1 五輪塔の残欠や礎による集石がみられる。
- 2 道の丁事で五輪塔が一基出土した。
- 3 以清十基形迹の五輪塔があったというが、今は無い。
- 4 塚状の高まりを中心として多くの五輪塔が集中する。
- 5 宝篋印塔・石塔・角柱塔・五輪塔が集中する。
- 6 土屋状の高まりに五輪塔の残欠がみられる。
- 7 五輪塔が一基ある。
- 8 過去みかん園池成沢に一石五輪塔が出土した。
- 9 空塔の塔身部分のみある。
- 10 国東塔が一基ある。
- 11 五輪塔が一基ある。

後半から末頃と考えられる蔵骨ピットが確認されており、それが一部裏付けされた。

なお、ガランバヤシの墓地は明治以降知恩寺村が高宇田村、鴨尾村と合併し圃村となったのに対応し、圃三村の墓地として大きな墓域が新たに設定されたという。

(道)

智恩寺は台地上にあるため、そこに到るには限られた道を通って登るしかない。地籍図からみると古道としてはaルートが想定できる。それはイヤの谷を通るルート(a)、小宇西城と上の木の間を登ってくるルート(b)、そして、通称「うちだんの坂」と呼ばれる坂を登って西城と「守屋敷」の間に至るルート(c)、大屋敷から登る現在の車道(d)である。基本的に六郷山寺院の正面観としてはaルートに妥当性がある。現在岩戸寺や長安寺、両子寺などでも坊の間を直線的に延びる道が奥の院へ到る唯一のルートである(第40図参照)。しかし、西城や「守屋敷」が防壁的な様相をみせる戦国期にはcルートが設定されたのではなからうか。それは、西城や「守屋敷」への入り口がcルートの延長上に造られたと考えられる事から推測することができる。dルートは大屋敷に庄屋屋敷があることから、そこと村の中心部、すなわちイヤの谷との通行のために江戸時代になって作られた可能性がある。またcルートは「三宅」一族の一部が台地を下りた後の開削とも考えられるがよく判らない。

以上個々の要素の変遷を見てきた。次に、それらを総合して智恩寺全体の遷り変わりを考えてみたい。

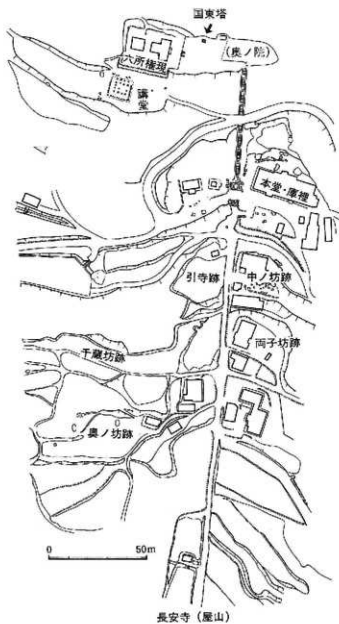
弥生時代から古墳時代にかけて断続的に居住の地となっていた堂山地区に、平安時代前期(九世紀前半)、その規模や構造は不明であるが瓦葺

きの建物が建てられたと考えられる。しかし、山脈右側で採取された須恵器は八世紀後半まで遡るもので、奈良時代に何らかの施設があったことも否定はできない。また、奈良時代には智恩寺の南約一・五mにある小宇「瓦窯」に寺院があった可能性もあり、同じ米魂郷に属す寺院として智恩寺の成立に関係があった可能性も考えられる。

今回の発掘で確認された平安時代前期の寺院が、最初から六郷山寺院として創られたのかどうかは問題である。鎌倉時代前期段階(安貞の目録)で六郷山寺院の呼称は「岩屋」、「山」、「寺」の三種類に分ける事が出来る。これが、実体と景観の違いを示すものであるとするならば、「寺」名称を持つ智恩寺は、行場的なイメージを与える「岩屋」や「山」名称の寺々とは異なった本格的な「寺院」としての景観と性格があった可能性が高いことになる。それが、平安時代前期の今回発見された瓦を葺いていたと考えられる寺院に起源を持つものである可能性もあるだろう。

しかし、堂山地区の建物は九世紀後半には廃絶したと考えられ、その後は継続する事なく鎌倉時代までしばらく遺物や遺構の上では空白が続く。壁山などの六郷山寺院では平安時代後期の十一世紀後半には仏像の造立や経筒・銅版法華経の埋納など活発な活動を見せ、「三山形式」の原型も十二世紀前半までできあがったと考えられている。

平安時代後期の智恩寺などの様な位置づけにあったのか今回の調査では判らなかつたが、その場合注目されるのは智恩寺と谷(現在高田池が染かれている谷)をひとつ隔てたところにある「薬恩寺」という地名の場所である。この「薬恩寺」からは平安時代後期の瓦が多く出土する(附章参照)。立地からは瓦窯の可能性も考えられるが、幾時期かの瓦があることから寺院跡と考えるのも良いだろう。その場合覚満が来籠郷で「薬王菩薩」を崇め奉ったとする「託重集」の記事との関連が問題となる。白



第40図 長安寺と崇戸寺の構造

鳳寺院である虚空藏寺や法鏡寺と併記されるこの「寺」が「善思寺」であるならば、すぐ近隣の智思寺との関係、あるいは智思寺そのものであったのかなど検討を要する問題である。

智思寺の姿が再び考古学的に見えるのは鎌倉時代中頃（十三世紀中頃から後半）になってからである。講堂や六所権現のある堂山地区では十三世紀の中頃から後半の時期に出吹きによる梵鐘の鑄造が行われる。鐘楼などの施設が建築されたのであろう。「六郷山年代記」によると、建治元年（一二七五）に屋山（長安寺）においても大工「沙弥慈蓮」によって梵鐘が鑄造されている（ただし、屋山では久安六年（一一五〇）と久寿二年（一一五五）にも鑄造の記事がある）。

さらにやや遅れて十四世紀になると寺屋敷地区においても院主坊的（？）な施設が築かれ、西城地区でも詳細は不明であるが何らかの施設が築かれた可能性がある。このように、智思寺にとって鎌倉時代中ごろから後半は一つの大きな画期であったが、この時期は六郷山の体制が「異国調伏」という目的の下に再編成される時期にあたる。おそらく、六郷山本山本寺としての体裁（景観と行事など）は、この時期に整備されたものであろう。そして、それを具体的に推進したのはこの時期智思寺院主職にあつた来繩郷司でもある大友庶流の小田原氏であらう。鎌倉時代中ごろから良範—永範—範秀と続く系譜は、以後「秀」を通字として戦国期まで継承されるものと思われる。おそらく、立地からしても智思寺は来繩郷支配の拠点としての意味合いも大きかったものと考えられる。

鎌倉時代末から南北朝にかけての時期になると親世音菩薩が造立され、講堂の前には国東塔が建てられる。これも一連の動きの中で捉えられるものであろう。やや遅れて寺屋敷地区では仏堂（？）が営まれてお

り、江戸時代の記録から見てもこの段階で親世音菩薩が「寺屋敷」の仏堂に安置されていた可能性も考えられる。

鎌倉時代中ごろから南北朝に形成されたこのような智思寺の景観が大きく変わるのには中世末になってからであると考えられる。

戦国期になると、遺物からは明確に出来なかつたものの「寺屋敷」や西城に対して大きな改革が行われたと推測できる。西城と呼ばれる遺構を中心として、「寺屋敷」に対しても堀を巡らせる防衛的な施設の築造が行われたと考えられる。文禄の役で大友義統に従って朝鮮半島に出陣した「智思寺」なる人物や、記録や石造物銘文から知られる豪秀や盛秀といった戦国期の院主が居住した居館が西城ではなかつたか。正確な構造や時期の変遷は今後の西城の面的な発掘調査によって解明されるであらう。この時期、講堂に安置される薬師如来座像が造立されており、何らかの動きがあつたことがわかる。また、この時期になると院主の墓地が「寺屋敷」の東側四〇メートルほどのところに造られ、さらに五輪塔が「寺屋敷」を中心としていたところに建てられる。

このような景観は、宇佐宮弥勒寺の僧侶（西別当、東別当、惣堂達）や都甲氏が居住した都甲川を挟んだ北側の弘田台地（上弘田遺跡）でも確認できる。そこは、堀で囲まれた区画が連郭状に連なるもので、現在でも一部残存している。そのすべてではないが一部は十六世紀まで遡る事が確認されており、緊張関係が都甲川周辺にも及んでいた事が判る。

文禄の役の失態による大友の豊後徐国は智思寺にとつても大きな出来事であつた。おそらく鎌倉時代中ごろから院主職を継承してきた智思寺小田原氏も智思寺を離れたことであらう。元和八年（一六二二）の小倉

藩「人畜改帳」の段階では智恩寺に僧侶は居住しておらず、以後正式な天台宗の寺院としての位置づけを失うようである。(前記の「豊州御領村々様子大略書」によると知恩寺村には寺がなく、「薬師」の堂しかない。また、安永五年(一七七六)の「天台宗豊後国六郷山寺院名簿」には「智恩寺」の名はない。)

この時点で坊住人を中心として形成されたと考えられる「知恩寺村」(「智恩寺」は以後村の名称として継承される。)は、「本百姓・小百姓」が八軒、「うらや・庭や・牛屋」が十軒で、総勢三十四人牛馬七匹の小規模な「村」であった。これらの人々の一部が江戸時代前期には「鬼念の道」沿いの墓地に葬られたものであろう。墓石の数(十基)からして、いわゆる「本百姓・小百姓」八人とされるクラスの内更に限定された人々(「本百姓」か?)が葬られたものと考えられる。しかし、十七世紀の後半にはイヤの谷から約八〇〇ぶ離れたガランバヤシ(小字)と呼ばれる地区に新たに墓地を開き、家ごとに墓域を定め、代々墓標を築いていた。これが現在に連なる墓地である。近世的な「家」の成立を象徴した現象であろう。しかし、庄屋のみは台地をやや下ったところに墓地を築き、屋敷も当初から台地下にあったようである。中世から近世への村支配の移り変わりを考える上で興味深い事象である。

江戸時代には中期からは正普口道大徳や豪輪、小松院玄昌房、教海禪師などの住持が智恩寺の地に骨を埋めていることが墓標(古いものはガランバヤシにあり、新しいものは中世院主の墓地にある)によって確認できる。これらの僧侶には天台系以外の人物もいたと思われ、禪師という名前も見られる。現在、観音堂の法会が曹洞宗普善寺の僧侶が来て行うのは江戸時代以来の伝統を引くものであろうか(附章参照)。

ところで、坊に石垣を多用した景観は江戸時代になって形造られたも

のであろう。そのことは、「寺屋敷」では石が全く使用されていない事と好対照である。基本的にその命脈を中世で絶った「寺屋敷」と、近世以降近代まで居住し続けた坊との違いとして理解できる。現在見る六郷山の寺々の石段や本堂(中世の院主坊)付近の石垣は基本的には近世以降の造築と考えてよいであろう。

江戸時代の智恩寺の建物は「大宰管内志」の記述で窺う事が出来る。そこに記された智恩寺の「本寺」は明治二十一年までには衰退し、安置されていた観世音菩薩は観音堂を造ってそこに置かれる事になる。おそらくそれ以後は全くの無住となり、講堂は薬師の堂として、山紙社(権現)は村の鎮守(村社)として、修正会に起源を持つ修正鬼会は村の正月行事として、それぞれ村人達によって維持され受け継がれていくのである。

近代になっても明治二十一年作成の地籍図からは大きな変化は見られないが、戦後の蜜柑園造園は中世末以来の景観を改変した。また、大正年間から途絶え一度復興した村の重要な正月行事となっていた修正鬼会も、維持できずに昭和三十三年を最後に廃絶した。

今なお中世以来の景観を残すのは、江戸時代に大きな改変を受ける事なく、さらに明治の終わりに坊跡に居住していた人々がほとんど台地を降り、その後は畑地として利用されるのみであった事が大きな要因である。

注

(1) 飯沼賢司「六郷山」『大分歴史事典』大分放送 一九九〇

(2) 豊後国都甲莊 214 大分県立宇佐歴史記の丘歴史民俗資料館 一九八九

第七章 まとめ

平成元年度から三年間にわたって発掘調査を行ってきた。その結果については前章までに述べてきた通りである。また、関連した調査については附章で述べられている。これらによって明らかになった点について最後にまとめておきたい。

一 九世紀代に瓦葺きの堂宇が創られる。これが智恩寺の寺院としての上限を示す可能性が高い。

二 十三世紀後半から十四世紀になると「寺屋敷」などで施設が築かれ、六郷山寺院としての態様が整う。

三 他の六郷山寺院と異なつて、寺院と防御施設を伴った居館が一体となった構造をしている。これは院主が大友一族の小出原氏であったことによるものである。

四 現状で確認できる遺構は基本的に中世末に形成されたものである可能性が高い。

以上の四点に集約できる。その結果、伝承の域を出なかつた六郷山寺院の成立や個別寺院の推移について新たな視点が見いだせたものと考えられる。

まず、平安時代前半までに宇佐宮に近い来繩郷を中心とした地域にいくつかの小規模な寺院が建立される。そして、次に荘園化が進む時期に六郷山が無動寺の末となり宗教的な整備が行なわれる。そして、六郷山寺院への武士の押領や国家的な異国調伏の祈禱などを契機として施設が整えられる。この三段階を経る中で、整然とした三山型式の「六郷山」が形成されていったものと推測できる。智恩寺では第二段階が明確でないが、今後の考古学的な調査に期待されるところである。

今回の調査で明らかになったように、智恩寺は中世の六郷山寺院の姿を良好にとどめた遺跡である。しかし、まだそのごく一部が調査されたに過ぎない。考古学的には緒についたばかりである。

附章 智恩寺関連資料調査

(一) 智恩寺の法会

はじめに

智恩寺旧境内域には、堂山地区に講堂と山祇神社、それに一段下がったイヤの谷地区の上部に観音堂が建っている。山祇神社も観音堂も、本来の智恩寺を構成していた堂社の一部であると考えられる。

「太宰管内志」に「かくて左南方に山神の小石祠あり、九尺四方ノ拝殿あり。又其左に権現ノ社あり。南向なり」と記されている。

「明治十五年西国東郡神社明細簿」に次のような記載がある。

山祇社	無格社	大分県西国東郡藤村字堂山
一祭神	大山祇命	
一由緒	嘉吉元辛酉年(一四四一)勧請	
一石祠	二尺 二尺五寸	
一境内	百九拾貳坪	
一境内神社	惣社	
	身澤神社	
	祭神	
	惣土命	大直日命
	底土命	大綾津日命
	赤土命	大地海原命
	由緒不明	
	社殿	二尺 二尺
一氏子	拾八戸	

山祇神社は本来権現社であり、明治初年の廃仏棄釈の時に身澤神社に改名したと思われる。明治十五年の段階では、山祇社は石祠で、反対に身澤神社は社殿とだけしか書かれておらず、木造建造物であったと考えられる。

地元の伝承によれば、境内の石祠に祀られていた山の神を、権現社に合祀することによって、山祇神社となったと伝えられている。まさに、庇を貸して母屋を取られることわざ通りのことが起こったのである。氏子拾八戸とは、知恩寺地区(現在二〇戸)のことであろう。

安貞二年(一二二八)の「六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録写」に「六所権現、二季祭五節供等」とあり、古くは六所権現であったことがわかる。そして、春と秋の例祭(場合によっては夏と冬)と五節供(八日、正月七日、上巳、三月三日、端午、五月五日、七夕、七月七日、重陽、九月九日)などに祭礼が行われていたようである。

現在、山祇神社は知恩寺地区の氏神として祀られており、毎年四月十四日と十二月十四日に、豊後高田市森の神職近藤保弘氏を招いて、山の神祭を執行している。

「太宰管内志」に「本寺(中略)本尊は観世音菩薩なり」とあり、本来、智恩寺本寺に祀られていた観音菩薩が、本寺の退転後、観音堂に祀られるようになった可能性も考えられよう。昔は智恩寺の住職が法会を行っていたと伝えるが、現在は八月十七日に、豊後高田市美和の善華寺(曹洞宗)の和尚が法会を執行しているという。

現在、智恩寺自体の唯一遺残する建造物は講堂である。講堂の本尊は薬師如来であり、その守護神である十二神将と共に祀られている。かつて、この講堂では修正鬼会という国東半島独特の法会が行われていた。そして、智恩寺は六郷山峯入りの重要を参拝所のひとつでもあった。

1 修正鬼会

一 修正鬼会の再興と廃絶

六郷山本山本寺のひとつである智恩寺では、毎年旧正月三日にオニヨ（鬼夜）と呼ばれる修正鬼会が行われていたが、いつ頃から始まったかは定かではない。

伝承によれば、養老年間（七一七―七二四）に、六郷山の開基である仁聞菩薩が、国家安穩・五穀成就・息災延命の諸願成就のために、六郷二十八カ寺の天台僧を集めて、「鬼会式六巻」を下賜した。満山の僧侶たちは鬼会式を拝受し、日本六十余州の神仏を勧請して大法要を勤修した。これが修正鬼会の始まりであるという。

講堂内の打ち札の「講堂修理鬼会復活寄附（昭和二十九年二月）」には「三十有余年中断せし修正鬼会を執行するに当り、地方有志の御賢意御寄附を記す（寄附者名簿）」とあり、大正中期に中絶した鬼会が、戦後の混乱期を経たこの時期に再興されたことが判明する。続いて「昭和三十一年一月二十六日（旧正月三日）鬼会式典執行（寄附者名簿）」、「昭和三十一年二月十四日（旧正月三日）（寄附者名簿）」という打ち札が残っており、昭和二十九年から三十一年にかけて、修正鬼会が三回行われたことを記している。聞き取り調査によれば、昭和二十九年から五回ほど行なわれ、昭和三十三年に執行された鬼会が最後であったという。その後は、長安寺住職によって、旧正月三日の午前中に、護摩焚きが行われるようになって、現在に至っている。

二 寺院組織と修正鬼会

明治期、六郷山西組の寺院の住職たちの手によって、旧正月三日に智

恩寺修正鬼会が行われていた。その当時は、六郷山中山本寺の長安寺住職が院主として修正鬼会の中心的役割を果たしていた。戦後の復活期には、長安寺現住の松本文尊師が荒鬼役をして、先代の故松本量映師が院主となっていたという。

明治時代以降、六郷山の西組と中組では、旧正月に各寺院（一〇カ寺）を廻って次々に修正鬼会を執行していた。旧正月三日の智恩寺を初めに、四日の養福寺（真玉町白野）、五日の応曆寺（真玉町大岩屋）、六日の長安寺（豊後高田市加礼川）、七日の天念寺（豊後高田市長岩屋）、八日の無動寺（真玉町黒土）、九日の弥勒寺（真玉町城ノ前）、十日の胎藏寺（豊後高田市平野）、十一日の岩脇寺（豊後高田市横崎）、十二日の西明寺（山番町小谷）で終了となった。

戦後の復活時の修正鬼会に参加していた天台僧は九人であったという。富貴寺・岩脇寺・無動寺・応曆寺二人（先住と現住）・長安寺（先住と現住）二人・実相院・千灯寺が参加していたという。実相院と千灯寺が中組で、他は西組の僧侶である。

江戸期には、智恩寺は堂としての記録はあるが、天台宗の末寺帳に記載されていない。このようなことから、独立した寺院ではなく、本尊を薬師如来とする大堂として、村人たちによって祭祀され、維持されていたと思われる。

江戸期には、智恩寺にも数少ないながら住職が存在したらしく、智恩寺墓地に僧職の墓標が五基残されている。享保十七年（一七三二）□道、天明八年（一七八八）名称不明、文化六年（一八〇九）養輪、天保五年（一八三四）玄昌坊、嘉永五年（一八五二）教海禪師の五基の墓標である。当時は、これらの僧たちが院主であったと思われる。江戸期から現在に至るまで、薬の法名をもつ天台僧が国東半島には多い。そのため、

兼輪は法名の豪という字から天台僧であろうと推測できる。

三 鬼会移譲の伝承

飯沼賢司「草地本村の歴史的背景」(「柿園庵跡」豊後高田地区遺跡発掘調査概報第Ⅵ巻 一九八九 豊後高田市教育委員会)によれば、「(「草地本村」)の入り口の台地の上、宇馬場圃には上の堂という寺があったという。明治のころまで「オニオ」をやっていたが、廃絶して一切の道具・儀式を米繩の智恩寺に譲ったという。儀式を譲るとは意味がわからないが、式次第のようなものも智恩寺にもついていたのであろうか。いずれにしても、村の入り口付近に大仙寺・薬師堂・上の堂と六郷山に關係すると思われる天台系の寺院があったことは注目される」という。

「草地小学校開校百年」(昭和五〇年)には次のような記載がある。

「上の堂は地名として残り、南の山の尾崎で蜜柑を植えてある段々苗の草茂る岸辺に石の祠がある。祠の高さ七十剎、幅五十剎。その中に丈四十柵体幅二十剎の石仏を祀つてある。土地の人も本尊が何であるか知らぬ。大正の終りまで巨石の塔が立っていたそうだが、今は竹藪となつて探しても見当らぬ。(中略)ある時、上の堂で追儺の儀式が厳かに行われていたら、一人の扮した鬼がたむむれに式の場所から離れ、相の川(現広瀬川の上流)を渡つて薬師堂まで走つて来た。厳かであるべき宮の儀式を抜け出した仏前を受けたのか、鬼の面の紐が切れて、面はころりと落ちて終つた。それ以後、住職も深くその鬼の失敗を悔い、仏罰を畏れて、この堂での追儺の儀式を廃止し、南方にある智恩寺に一切の道具及び追儺の儀式を譲つたという。」

これらの伝承を確認するすべはないが、いくつかの点で興味深い内容が含まれている。

まず、本来の六郷山寺院に含まれていないような小堂で鬼会をしたかどうかである。六郷山六五カ寺に含まれていない福福寺(真玉町・現在廃絶)でも修正鬼会が行われており、ここには元祿期の鬼会面が残されていることから、可能性は充分あると考えられる。

次に、その鬼会の道具と儀式すべてが智恩寺に移されたということである。もし、この伝承が事実とするならば、智恩寺の鬼会面は上の堂のものだった可能性も出てくる。また、道具と儀式が譲られる以前に、智恩寺で修正鬼会が行われていたかが問題となる。

飯沼賢司によれば、上の堂は泉福寺末の曹洞宗寺院鳩杖山宝林寺(草地本村・現在は廃絶)に属していたと、地元古老から聞いたという。本来六郷山系の堂であった上の堂が、宝林寺に属するようになったのは近世になってからと思われる。それでも、中世からの伝統をひいて、鬼会を執行していたのであろう。

智恩寺墓地の中の墓碑に教海禪師という僧名が刻まれているが、禪師という僧階は天台宗にはないので、この教海禪師は禪僧ではないかと考えられる。すると、一時期、智恩寺に禪僧が住んでいた可能性は否定できない。このような禪僧の居住によって、曹洞宗の宝林寺に属していた上の堂との関係が成立したのではないかと推測できる。そのために、観音堂の祭祀が曹洞宗の善幸寺の手によって現在でも行われ、上の堂から智恩寺に鬼会の道具などが譲られたという伝承が存在するのであろう。

四 集落組織と修正鬼会

明治以降の智恩寺は、戦後の打ち札に「鼎の大堂」と記されているように、無住期間が長かったために、鼎村(明治八年に成立)の堂として位置付けられていたようである。修正鬼会の祭礼では、大字鼎の智恩寺

地区（十九戸）・高宇田地区（下区一十八戸）・鴨尾地区（上区一十二戸）の三地区が参加していた。当時、鼎は六〇戸以上あったという。

地区には寺総代が二人ずついて、計六人で智恩寺の世話をしていた。また、智恩寺には堂役（堂守り）が一人おり、鬼念に用いる大松明・小松明・香水瓶・鬼わらじなどの製作や寄付金集めなどの采配をふるっていた。修正鬼会では、三地区のうち、交代で二地区が大松明を一基ずつ作り、それを持つカイゾエ（介添え）を出す所であった。カイゾエはカイシヤク（介錯）とも呼ばれ、本介錯と添え介錯の一人ずつを出していた。地区の二十二、三歳の達者な若者が選ばれていたという。

旧十二月一日の「木伐りつゝいたち」に、ところの（付近の）山の松を伐って、大松明の燃える頭部として、古い芯を再利用して作っていた。芯の杉材以外の燃える部分は毎年更新したのである。大松明はそれぞれの氏神の神社の境内で作っていた。高宇田地区では大歳神社、知恩寺地区は智恩寺講堂の近くの山紙神社前で、鴨尾地区では貴船神社であった。そして、高宇田と知恩寺地区では、燃やした後の大松明を智恩寺の講堂の床下で保管していたし、鴨尾地区では貴船神社の拝殿の床下に保管していた。芯の杉は四ツ割りにしてあり、松材を割り竹を籠にして縛り付け、四方をカズラで縦にタルをとっていった。割り竹（男竹・真竹）は普通の年は十二カ所、閏年には十三カ所縛った。大松明は長さ三メートルほどで、本介錯が担いで運びあげ、講堂の前で献灯する。献灯は、左廻三回、右廻三回、上下三回振る。荒鬼やカイゾエが持つ小松明は、割り竹（男竹）製で、各家で一、二本作って用意していた。夜に智恩寺に行く時に燃やして明かりにもしていたという。

お難し役は、大松明を出す二地区のうち一地区がマイコ（交代）で出していた。第一人、太鼓（締太鼓）二人、鉦（鉦鼓）一人の計五人で、

小学生が担当していた（63ページ写真参照）。

僧侶たちは三日の昼前に来て、三日の夜に近くの民家に泊まった。宿は、知恩寺地区の古沢ドイ（現中ん土居）の四軒で、鬼念に用いる餅をついたり、賄い（僧侶たちや鬼念にかかわる人達の食事の世話）などもすべて行っていた。このように、古沢ドイは知恩寺地区の中でも、鬼念において特殊な役割を持つ集落であった。

なお、大字鼎のドイ（土居一最小の地域社会単位）を紹介する。

・知恩寺地区

カミンドイ（上ん土居・旧称一庄屋ノドイ） 八戸。

ナカンドイ（中ん土居・旧称一門岡ドイ・古沢ドイ） 六戸。

シモンドイ（下ん土居・旧称一三明ドイ） 六戸。

・鴨尾地区

カミドイ（上土居？） 七戸。

ウエドイ（上土居？） 四戸。

シモドイ（下土居） 十一戸。

・高宇田地区

カサンドイ（上ん土居） 六戸。

ナカンドイ（中ん土居） 六戸。

シモンドイ（下ん土居） 六戸。

現在、ドイは葬式の時の相互扶助組織として活動しており、旦那寺との連絡、受付・齋（食事）の用意などを担当しており、土葬の時代には、墓穴掘りなども行っていた。なお、知恩寺地区では、土居ごとに旦那寺が分かれており、上ん土居は光円寺（浄土真宗本願寺派・豊後高田市玉

津)、中ん土層は妙寿寺(浄土真宗本願寺派・豊後高田市高田)、下ん土層は善幸寺(曹洞宗・豊後高田市美和)である。

五 修正鬼会の行事次第

鬼会の準備は、十二月一日の大松明に用いる松の木伐りから始まった。カインエは一週間前から、水垢離をとり、精進深齋をしたという。水垢離は智恩寺直下のイヤの谷(坊集落跡のある谷)の麓にある清水(井戸)でとった。

鬼会前日の二日に餅つきをした。オキノメ(鬼の目)二重ね、オクツモチ(御香餅)長靴型の餅)二足分、多数の小餅などを用意した。

修正鬼会の行事次第を「差定」という。

①昼の動行 三日の昼前から、講堂内で僧侶たちによる読経(伽陀・儀法・序音・回向・初夜導師・仏名導師)を行う。

②垢離取り カインエたちが水垢離を行う。



昭和30年頃の智恩寺の鬼会

③大松明

午後八時頃、大松明に点灯して、講堂の本尊の薬師如来に献灯する。まず、夕方になると、それぞれの氏神に置かれていた大松明をイヤの谷(坊集落のある谷)に運ぶ。この時、お囃しを吹き鳴らしながら行列を作る。イヤの谷の清水の下で大松明に火をつける。そこで、僧たちが読経して、火事にならないように、火の縁と水の縁を結んだ。本介錯は火のついた大松明を担いで、通称「鬼会の道」の小径を登って、智恩寺講堂の前に運ぶ。本介錯は一人で、堂の前において薬師如来に献灯する。左転三回、右転三回、上下二回振る。それから、松明を境内に立てる。最後に石製の手洗鉢の水で大松明の火を消す。

④夜の動行 講堂内で僧侶たちが読経(法呪師・神分導師・二相・唄・散華・梵音・練起目録)して、次に立役(錫杖・米草・開白・香水・四方圍)を舞う。

⑤鈴鬼 午後一〇時頃、お囃しを奏しながら、男女二体の鈴鬼が鈴を打ち振りながら舞い踊る。最後に荒鬼を招いて退場する。

⑥荒鬼 荒鬼の舞い。山紙神社横の仮宮（社務所）で、オニカラグエといって、僧侶二人が荒鬼に扮し、本介錯に背負われて講堂に入る。途中で地面に触れると本物の鬼になるといった。鬼は、衣装の上からオヤヅナという麻綱で十二カ所縛る。同年は十三カ所となる。

「ソラ、オーニワヨー」という掛声とともに、荒鬼たちは小松明を振り回しながら、三ツ九度の法・二十一走飛行などの行法を行い、カイゾエと共に講堂内で踊り暴れる。途中、モンタマ（鬼の目餅）を四個（二重ね）撒く。それをひろった参拝者を鬼が追い掛けて小松明でたたく。講堂内陣の中央にしゃがんだ参拝者を小松明でたたいて、その年の無事息災を祈る加持をする。

⑦鬼後祝 暴れる鬼を鎮めて鬼会を終了する。午前三時頃を過ぎて、明け方になっていったという。

六 鬼会面と道具

ア 鬼会面

現在、智恩寺には荒鬼面と鈴鬼面がそれぞれ二面残されている。

- ・荒鬼①面 面長三三九、面幅二五五、面高一五七、重量一五六〇。
 - ・荒鬼②面 面長三〇〇、面幅二四九、面高一三九、重量一六〇。
 - ・鈴鬼男面 面長一八九、面幅一四〇、面高七三、重量二〇〇。
 - ・鈴鬼女面 面長一九〇、面幅一三九、面高八二、重量一九五。
- 荒鬼面は桐の一枚で刻まれている。荒鬼①面には黒い顔料を、荒鬼②面には赤い顔料を塗布している。それぞれの面は、眼球と歯に白い顔料を塗っている。

荒鬼面の頭頂部には、直径二十五ほどの孔が穿っており、一本角を挿入していたと考えられる。また、両耳部には浅い半月状の溝が彫り

込まれ、直径三、四の紐孔をそれぞれ二穴ずつ開けている。このことから、牛耳型の耳が紐で結び付けられていたと思われる。

荒鬼①面は、少し口を開き、上下の歯の間に隙間を作っている。並んだ歯の両端には下に向けた牙を刻んでいる。荒鬼②面は歯を喰いしばったようにして、上下の歯を見せており、並んだ歯の両端には上下に牙が刻まれている。牙の外側に孔があり、麻紐が装着されている。これは、鬼会面に頭上に被る時に、額上部の小穴に結び付いた紐とともに、面を固定するための紐である。また、鼻の穴にも輪になった麻紐が装着されているが、これは装着者が口で噛んで面を固定するための紐である。

鈴鬼の両面は微笑したように、三日月型に目を開け、口元を少し開けて歯が見えるように造形している。両面とも桐の一枚を彫刻している。

白い胡粉で面表全体を塗布しており、鈴鬼女面の頬は薄紅色に化粧されている。後世、女面の左目の周辺を半月状に削ったために、顔貌が変化している。男面の鼻先は虫喰いのため欠損している。側部に紐穴がつけられている。頭髪のように幣の束を結び付けるための穴が、額上部に等間隔に三個開けられている。

荒鬼面、鈴鬼面ともに銘文はなく、作られた時期は明確ではない。作風から四面とも同時期に同一作者によって作られたと考えられる。他の六郷満山寺院に残る鬼会面と比較した場合、面構成の形式化の進み具合などから見て、近世末ころの作品ではないかと思われる。鈴鬼の男面と女面の両方とも、目を三日月状につくっているのは、両子寺の明和七年（一七七〇）の鈴鬼面と造形的に通じるところである。荒鬼面は、元禄七年（一六九四）の幸福寺（真玉町）や応曆寺（真玉町）の荒鬼面の系統である。幸福寺の面を模したと考えられ、同じように顔面の板がパターン化して文様のように重複しているが、形態的には固さが表れてきてい



荒鬼1面



荒鬼2面

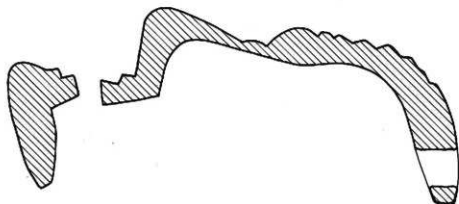
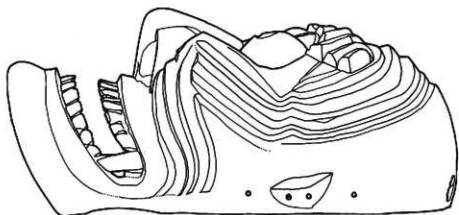
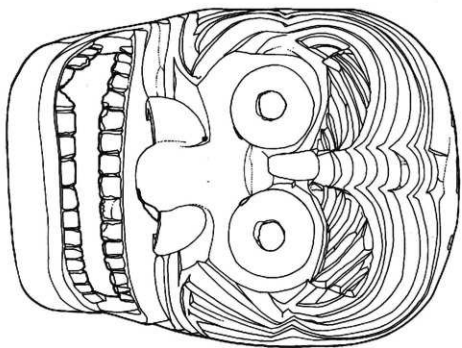


浄土女面

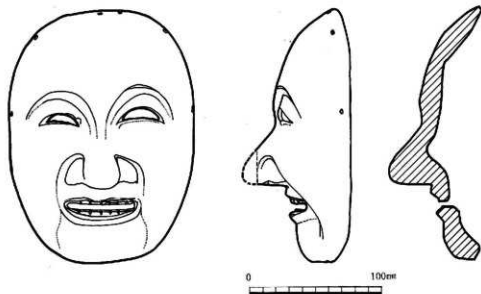


浄土男面

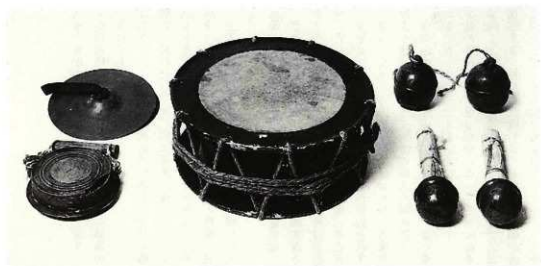
智恩寺の鬼会面



第41図 智恵寺の泥鬼①面



第42図 智恵寺の鈴鬼男面



鳴具

る。田染の諸寺院や都甲の長安寺の荒鬼面の系統ではなく、豊後高田市の北に隣接する真玉地域の鬼会面に属しているのは面白い。豊後高田市北部に位置する草地本村の上の堂との関連も充分考えられよう。

鬼会面の外に、鈴鬼たちの採り物の鈴（全長二〇〇、柄付き・鈴部真鍮製）二点と、荒鬼たちの背の麻紐に付ける鈴（直径八〇、全高一〇〇、真鍮製）二点とが残されている。

イ 法具

智恵寺には、中口五具足という形式の五具足、それに密教法具である前具と護摩器等が、それぞれ一式揃っている。すべて真鍮製である。細部について特記するほどの特徴がない。銘文がなく、製作時期は明らかではないが、近代の作品と考えられる。

・五具足 香炉一基（全高一八二）、最頂部に唐獅子のつまみ。

華瓶一对（全高一九七）、象型の把手。

燭台一对（全高三九〇）、象型の把手。

・前具 金剛板、金剛鈴、五站、火舎、塗香器、酒水器、華瓶二点、仏器二点。

・護摩器 五器五点、六器六点、八器八点、杓皿、杓三点。

・柄香炉 全長三一八、全高九〇。

・鳴具 鑿子（直径二四三、高さ一五五）、剃抜剃置台布団付き）一点。

鍤鉢（直径二〇〇、シンバル）一点。

締め太鼓（直径三四五、厚さ一四五、剃抜太鼓型）一点。

締め太鼓残欠一点分。

鉦鼓（直径一五二、金厚五二、吊下用の把手を装着）一点。

なお、鉦鼓と締め太鼓は鬼会の時のお囃子の楽器である。

2 六郷満山峯入り

六郷満山峯人は、国東半島中部の山々に散在する寺院・堂社・岩屋などの霊場を一巡する山岳回峰行であり、現在は天台宗の六郷満山の全寺院が執行する最大の法会である。

「六郷満山仁聞大菩薩本紀」には、「六郷満山巡礼廻峯ハ昔日八幡六郷山開基ノ後、五人の御同行御修行有、後仁聞大菩薩ト成リ玉ヒテモ久修練行シ玉ヒ衆生利益之大峯也。故ニ巡礼廻峯シ玉フ」とある。この伝承によれば、八幡神の後身である仁聞菩薩が、法蓮・華嚴・林能・覚満の四人の同行者と共に、国東半島の山々で衆生化益を目的に修行したことに始まると伝えられている。

「八幡宇佐宮御託宣集」大卷十一「小椋山社部上」に「斉衡二年（八五五）乙亥二月十五日、豊後國の六郷山は、昔八幡菩薩、人間菩薩として久修練行の峯なり。中ごろ、聖人あり。能行と名づく。俗姓は宇佐氏にして、豊前國の人なり。天長二年（八二五）乙巳より齊衡二年乙亥迄、春秋三十一年、星霜一万余日、彼の山に住せしめ、難行苦行を致す」とあり、津波戸の石室（津波戸山水月寺・山香町）において、人間菩薩の靈から順路に関する託宣を受けたという。当時の峯入りの順路には、二つの路があったという。後の山の岩屋（後山金剛寺・宇佐市）より横の城（東光寺・杵築市）に至る路と海路辺地を巡る路である。

記録がないので、中世の峯入りの状況はわからない。近世になると、六郷満山寺院の復興の兆しとともに、霊場巡拝の全国的な隆盛を背景に、峯入りが次のように復活する。初期の段階では、その執行間隔が五年とか、一〇年、あるいは四十三年（その間にも執行されたか？）と不同で

あるが、中期の宝暦九年からは二〇年ごとに行われるようになっていた。智恩寺講堂には、後半の五回分の柱銘が残されており、江戸期の峯入の貴重な史料となっている。

- ・元禄十四年（一七〇一） 高貴寺大宮柱銘
- ・宝永三年（一七〇六） 高貴寺大宮柱銘
- ・寛延二年（一七四九） 丸小野寺講堂内陣柱銘
- ・宝暦九年（一七五九） 果日庵牌文（田染村志）
- ・安永八年（一七九七） 柱銘等（智恩寺・報恩寺）
- ・寛政十一年（一七九九） 柱銘等（智恩寺）
- ・文化十四年（一八一七） 柱銘等（智恩寺・隨願寺・清浄光寺等）
- ・天保八年（一八三七） 柱銘等（智恩寺・隨願寺・応曆寺奥の院等）
- ・嘉永六年（一八五三） 柱銘等（智恩寺・胎藏寺・岩脇寺・天念寺講堂等）

しかし、明治初年の神仏分離政策、修験宗の廃止などにより、神仏両合思想を基本とする六郷満山天台宗寺院の修験的活動は抑圧され、峯入は中断することとなった。戦後の伝統的文化の再評価が行われる中で、昭和三十一年一〇月と翌三十三年八月の試行によって、行場と峯道（ルート）の確認調査が行われ、三十四年三月に復興された。以来、三十五年、三十六年、五十四年と実施され、平成三年に執行された。

平成三年の峯入では、まず前日の三月二十九日に御許山と宇佐神宮の参拝が行われた。翌三〇日の熊野麿峯仏前での開白禮摩で始まり、胎藏寺・真木大宮・間戸寺跡・岩脇寺・高貴寺と参拝を行い、行者たちは雨の中を午後二時五五分に智恩寺に到着した。通称「鬼金の道」から登ってきて、読経の後に鼻津岩屋に向かって去って行ったのである。

智恩寺の近くで、峯入りの修行僧たちが集合したという説がある。

「六郷満山の歴史と構造」（中野幡能・和歌森太郎編「くにさき」所収）によれば、「弘田のトキンゾリに山伏が集まり、兜巾を揃え、勢ぞろいすると、西別当・東別当・惣堂連戦のいる弥勒院に参詣し、宇佐神宮に参詣し、それから御許山に登った（後略）」という内容の話を地元の人から聞き取りをしているという。しかし、現在は弘田のトキンゾリという地名を確認することができず、その所在は不明である。この弘田のトキンゾリの伝承について確認することのできる古文書はないようである。

なお、近世に入ると、寛延三年の峯入では両子寺で兜巾揃いが行われており、安永八年・寛政十一年・文化十四年には、来繩野田福（豊後高田市）の玉井堂で行者揃いを行っている。現在は、熊野山胎藏寺で行われている。両子寺以外は、宇佐に近い所で行者たちが集結しており、六郷満山峯入と宇佐八幡との関係の深さを窺わせる。

資料「智恩寺柱銘」

安永八己亥天大越家両子寺寮口

六郷満山仁聞大菩薩古跡入峰行者十人

二月十四日 大先達報恩寺寮息

寛政十一年 六郷満山仁聞大菩薩古跡入峰行者十人各初入敬白

一月十一日

雲仙寺	結	天念寺	各初入敬白
胎藏寺	衆	岩戸寺	
西殿寺	衆	胎藏寺	
新羅園	衆	西殿寺	
結	清浄光寺	了英	
衆	雲仙寺	素祐	
衆	天念寺	圓隆	
衆	神宮寺	寮真	

清浄光寺□□

文化十四丁丑歲大越家兩子寺家園 結

應曆寺□□

六郷満山仁聞菩薩古跡入峯行者拾人

胎藏寺家□

各初入教白

二月十四日 大先達大聖寺家尊

衆 □□□□□

兩子寺□□

靈仙寺□□

○ 話者氏名(順不同・敬称略)

・松本文母

加礼川

昭和五年三月二十六日生

・田辺戦治

鴨尾

明治三十七年八月十七日生

・代 忠藏

鴨尾

明治四十五年三月十七日生

・桑原アサ子

高宇田

大正十三年九月十七日生

・緒方久子

高宇田

昭和五年四月二十九日生

・三明トミ子

知恩寺

大正十二年三月十五日生

・古沢節子

知恩寺

大正十五年二月十五日生

・小林スミエ

知恩寺

昭和七年六月二十四日生

・門岡ツギ子

知恩寺

昭和七年八月四日生

天保八丁酉年 玉照蓮千燈寺 結

六郷満山仁聞菩薩古跡入峯行者拾人

各初入教白

二月十三日 因國園園子寺園衆

嘉永六癸丑天大先達行入寺園

□□寺家園

天念寺置屋

六郷満山仁聞大菩薩古跡入峯行者拾一人

□□寺家園

胎藏寺賢□

各初入教白

二月十三日 後越家兩子寺家千

興導寺家英

因國園園

宝命寺頂顕

大聖寺置屋

※この柱銘は『豊後高田市誌』(酒井富藏・昭和二十二年)と『峯入りの道』(大分県教育委員会・昭和五十六年)を参考にした。赤外線テレビカメラで確認し、判読不能のものを□で表示した。

(二) 智恩寺の仏像と石造物

智恩寺の歴史は、概ね、一、宇佐宮の庇護のもと本山本寺として六卿山の中核で繁栄した平安時代―鎌倉前期、二、大友氏の傍系小田原氏が院主職を世襲した鎌倉後期―戦国時代、三、江戸時代以後、現代にいたるまでの三つの時期に分けることができる。この間、他の六卿山寺院と同様、幾度かの衰退期があったようである。現在の智恩寺に遺された仏像・法具・什器等仏教関係の遺品は少なく、第一期の鎌倉前期以前に遡るものは皆無であり、第二期の小田原氏時代のものも僅か数件の木彫仏および石造品を残すのみである。

『西国東都誌』によれば、大正十二年の時点での智恩寺の遺品として次のように記されている。

- 一木像 薬師如来 一休、長二尺五寸
- 一木像 日光仏・月光仏 二休、長各一尺
- 一木像 十二神将 十二休、長各一尺
- 一木像 観世音菩薩 一休、長四尺
- 一木仏 二休、長各六寸
- 一石仏 三休、石彫高さ三尺許長さ六尺許の中に刻みたるもの、中央は薬師如来、右不動明王、左地藏尊の像の如し
- 一石像 三休、内一休は衣冠を着けたる坐像、一休は女神の如き坐像、一休は通輪の如き坐像なり
- 一木像 高麗大 四個、木理隆起として夥多の星霜を経たるものなり
- 一鬼面 二個

このうち、薬師如来、日光・月光、十二神将については、現在も智恩寺の本尊として講堂内陣に安置されているほか、観世音菩薩については、

別に観音堂の本尊として祀られている。

その他のものについては、石像三休のうち、女神坐像、僧形坐像および鬼面(四面)が遺るのみである。他は全て失われている。なお、石仏三休とあるものは、おそらく一写真集豊後高田一に大正時代の智恩寺の写真として掲載されている石籠仏に該当するとみられ、中央に裳懸座に結羅

跏坐する定印の阿弥陀、向かって左に蓮座上に立つ観音菩薩、右に地藏菩薩を半肉彫する珍しい圖像の石仏である。その抑揚の利いた的確な彫り口は鎌倉後期頃の遺像になることを示している(右の写真)。

以上のほか、智恩寺の遺品としては、講堂のある現境内に国東塔一基が所在するほか、寺域の北東隅に同寺の歴代院主の墓所と伝えられる区画があり、戦国期から江戸期にいたる石造物群が所在している。

○木造薬師如来坐像および日光・月光・十二神将立像(図版18)



智恩寺石仏 (安藤信郎氏提供)

現講堂の本尊薬師如来坐像は、椀材の寄木造になる玉眼の彩色像で、像高四〇・二を測る。舟型の宝髻光背を背に二段椀の蓮座上に結跏趺座し、右手を施無畏印に結び、左手に薬策（欠失）をのせる。木寄せは、後頭部を削り削いだ頭部を前後二材の体部に挿首とし、これに膝前横一材、側面左右各一材を削ぎ寄せる。両手先および左袖口も別材である。胎内および像底をきれいに内削りし、本格的な構造を示す。彩色は、頭髪に墨、肉身に朱漆の上から金泥を塗り、衣は黒漆地に金箔を押し貼りする。低めの肉髻および地髪に渦巻状の螺髪を刻み、癖のない平明な目鼻立ちの割に、厚手でうねるような衣文を刻むあたり、室町後半頃の製作であろう。胎内に「寛永貳年二月吉日□□村／（以下異筆）□石／清順」の墨書銘があるが、これは、新たに地肌を削った上に書かれており、修理銘とみられる。その本格的な彫法からは、中央で製作されたものであろう。

日光・月光および十二神将については、いずれも一木造、彫眼の彩色像で、江戸時代も後半になつての造立とみられる。

○木造観音菩薩立像（図版18）

以前は、本寺内に安置されたものであるが、現在は講堂の北西約二〇メートルほどに新しく建てられた観音堂の本尊になつてゐる。椀材の寄木造になる彫眼の彩色像で、像高八十二・〇を測る。円光背と台座および右手首先、持物（未開蓮華）を後補とするほかは当初の状態が良く残つてゐる。木寄せは、耳の前後で三材からなる頭部を、前後二材削ぎの体部に挿差し込みとし、それに髪、両腕、手首、足先および天衣を別木削ぎ付けとする。彩色は殆ど剥落するが、胡粉下地に髪に群青、肉身に漆箔、条帛、天衣に朱、裳に緑青の痕跡を残す。右脚を緩め左脚に重心を置いた細身で丈高のプロポーションは均整がとれ、高髻と地髪にこまやかな

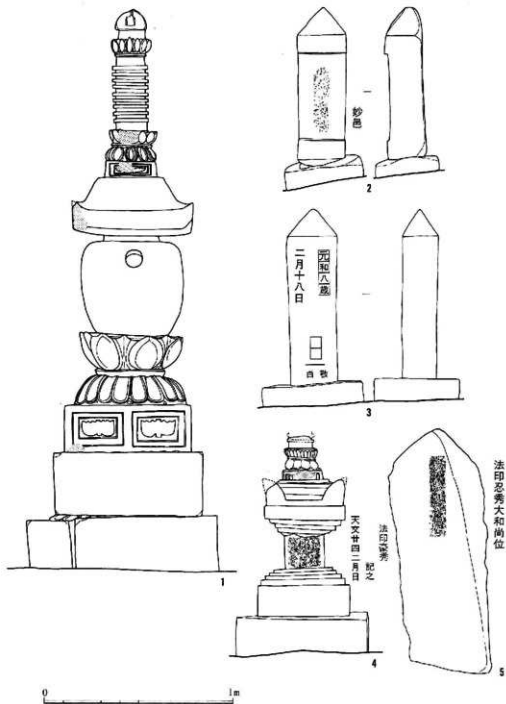
毛筋を刻み、丸顔の面相には小振りで蕭洒な目鼻立ちを表し、反面、胸・腹から大腿に至る肉取りは量感を示す。条帛から天衣・腰裳にいたる衣文は浅彫りではあるが自然な抑揚があり優美である。その鎌倉彫刻の写実性を残しつつ、目を彫眼にするなど古い技法を踏襲する点、鎌倉末期から南北朝期（十四世紀前半）頃の在地のそれも中央の造像法を学んだ仏師の手になるものと考えられる。

○国東塔（第43図1）

安山岩製、総高二九四、無銘。各部は、相輪・笠・塔身・請花・反花・基礎・基壇二段からなる。相輪は基部に一段のくびれのある小振りの火焰宝珠（火焰の大部分は欠失）から小連台まで一石で、笠上部の露盤に納挿し込みとする。九輪の刻みは深く、蓮弁の彫り口も明快である。笠は照屋根でなだらかではあるが、軒端の部分で反りをつけ、やや厚めの軒口も中央部をほぼ平らにし、両端で強く反り返る。有頸壺型の塔身は胴部からゆるやかにすばまる細身の器形を示し、肩口やや下方に大きく納入口を穿つ。塔身下の蓮台は単弁八葉の請花、複弁八葉の反花からなるが、中帯を含めた反花は基礎と一石からなる。各連弁は風化が著しいが、自然で柔らかな抑揚があり古様である。基礎の四側面は二区二重に彫り沈め、やや形式化した格狭間を陰刻する。総体に細身でパラソクの良い塔型を示し、相輪や塔身・蓮台などの形態や彫り口に鎌倉後期初期国東塔の名残をみせるが、笠の反りや格狭間の形式などに時代の下降する要素がみられ、南北朝前半から中ごろの造立であろう。

○院主墓所石塔群

現智恵寺境内の北側、院主坊跡とみられる一区画の四十メートルほど東に、智恵寺の歴代院主の墓所とされる場所があり、天文二十四年（一五五五）銘の宝篋印塔を筆頭に宝塔三基、五輪塔二基、板碑型碑一基、尖頭方柱



第43図 智恩寺の中世～近世初頭の石遺物

碑一基、無縫塔一基、位牌型碑三基、自然石碑一基からなる石塔群がある。このうち、いずれも室町時代後期とみられる宝塔・五輪塔を除く八基には次のような陰刻銘が確認される。

①宝篋印塔(第43図4) 安山岩、現高一・一六^寸。

ウーン(阿闍)・タラク(宝生)・キリーク(阿弥陀)・ア
ク(不空成就)

法印豪秀/記之/天文廿四二月日

②板碑型碑(第43図2) 安山岩、総高九十六^寸。

キリーク(阿弥陀) 妙色

③自然石碑(第43図5) 安山岩、総高百三十一・五^寸。

カーン(不動) 法印忍秀大和尚位

④尖頭方柱碑(第43図3) 安山岩、総高一〇五^寸。

元和八歳/二月十八日/□□敬白

⑤位牌型碑I 安山岩、総高七十八・〇^寸。

ア(大日) 権律師良純大徳/天明八戊申□/七月十一日

⑥位牌型碑II 凝灰岩、総高七十七・五^寸。

権律師兼輪大徳/文化六年/六月十七日

⑦無縫塔 凝灰岩、総高七十七・三^寸。

新圓寂修験小松院玄昌房大徳/肥後國小川出生也/天保五年□

月□

⑧位牌型碑III 凝灰岩、総高七十六・五^寸。

春月青誓教海師/嘉永五年/二月二日

①の宝篋印塔は、相輪の大半を欠失するが、隅飾突起も大きく、笠の上下および基礎上面に各四段の段型を造り出すなど古様を踏襲した塔型を見せる。銘文にある「法印豪秀」は、代々「秀」の字を通字とするこ

との多い智恩寺の歴代院主の一人とみられ、天正四年(一五七六)、屋山長安寺に法華三昧の興所を再興した時の願主の一人、智恩寺ノ盛秀大徳の

前代にあたる人物と考えられる。

②の板碑型碑は、碑身に反りはないものの、山型から額部および脚部の造り出しをつけるなど、形式的には鎌倉末期以降の板碑の形を踏襲するもので、これも室町後半期の造塔であろう。「妙色」なる人物について詳かにしない。

③の自然石碑は頂部の山型に加工痕をみせるのみで自然に剝離した板状石を転用したものである。「法印忍秀大和尚位」は、これも通字「秀」を用いるあたり、智恩寺の院主とみて間違いはなからう。

④の尖頭方柱碑は、南北朝後期頃からみられる角柱塔婆の形式を踏んだもので、前記板碑型碑・自然石碑ともども位牌型碑など近世的碑型成立以前の混迷した様相を示している。

文禄元年(一五九二)、大友義統の朝鮮役出陣への智恩寺関係者等の参加は、結果的には大友系小田原氏による同寺院主職の世襲に終焉をもたらしたものと考えられる。江戸時代の墓碑にみる歴代院主の出自・僧位の様子は、そのまま近世以降における智恩寺の低迷した状況を物語っているといえよう。

注

(1)『西国東都誌』 大正十二年 西国東都役所発行

(2)安藤信郎編 『写真集 豊後高田』 昭和五十九年 国書刊行会発行

(3)『屋山法華三昧興所再興表白文』、大寺智内志、所収『長安寺文書』

(4)『大友古紙商標出陣手勢物頭人歌注文』、『豊後国近國公領史料集成』二所収『志手文書』

(二) 智恩寺の講堂

1 建築構造

智恩寺講堂は、宝形造りに近い短い棟を持つ寄棟造りで、屋根は茅葺きである。堂はやや西に振っている（真北から西に約八度・磁北から約三度）が、ほぼ南面して建っている。

内部構造は間口五間・奥行五間で、外部の柱間は正面三間・側面三間である。三間四方の身舎の周囲に一間の庇を通した構成となっている。

外陣と内陣とに分かれており、内陣柱と外陣柱の柱列は整合していない。身舎背後の柱の切欠きの痕跡から、本来は三間三間の内陣の背後の中央一間部分に仏龕を作りつけていたと思われる。現在は、身舎の背後の庇部までを内陣として、床面を一段高くして、仏龕を内陣背後の外側に突き出すように設けている。ある時期に、三間四間の内陣を一間の外陣が前方と両側方を取り囲む形式に改修されたと推測される。

南側の正面中央一間は開口し、左右に観音開きの扉穴の痕跡がある。正面左右は椀椀が格子状にはめられている。東北隅の側面には開口部があり、開口部を入った一間四方は土間になっている。ここは、本来は炬のあった所だと思われる。側部と裏側の外部壁面は打ち付けの粗末な板壁である。両側面の一部の長押の下部に一筋の溝があり、板戸を立てていた可能性も考えられる。

すべての柱は角柱で、側面外側の四本の柱の間にはそれぞれ小さな柱が立てられているが、これは補強用に後補されたものである。外部正面と両側面の柱の基礎には、四角く整形した基礎石を用い、その下に自然石を組んでいる。外部背後と内部の柱の基礎には、上部を平坦に削った自然石を用いている。

床面は板敷きで、内陣は地長押をつけて、外陣より床面を高めている。内陣の柱上部には飛貫を二段通し、柱上端に敷桁を入れて連結する。外陣の側柱と内陣の柱の間には繫梁を置いて、そのまま外に延長して、軒桁を支える。小屋組は、敷桁の上に東西方向に牛木（梁）を載せて、牛木や桁から束を立て、飛貫を一段通し、桁と梁を載せ、又首を支える。内陣と外陣との間には壁はなく、天井も張っていないので、屋根裏までの一体空間を形成している。

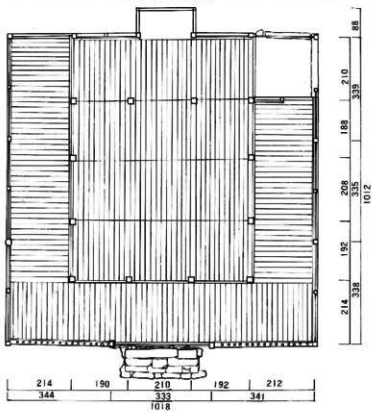
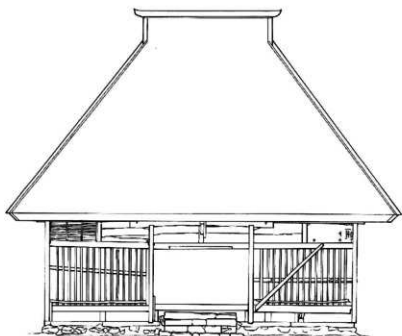
建築構造は極めて単純で、斗組や彫刻などの装飾は皆無である。寺社建築というよりも、民家建築の流れの中に位置するといえよう。

昭和四十三年の修理において、痛んだ梁の一部を補修し、茅葺き屋根を波板トタンで入母屋状に覆ったようである。その後、根太の交換と床板の張り替えを行っている。

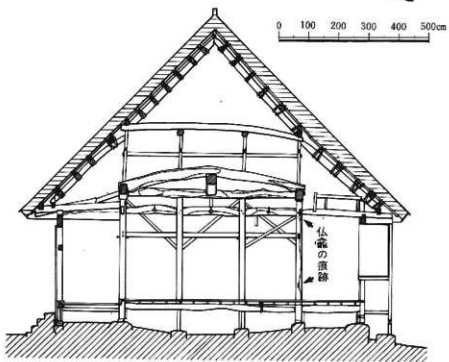
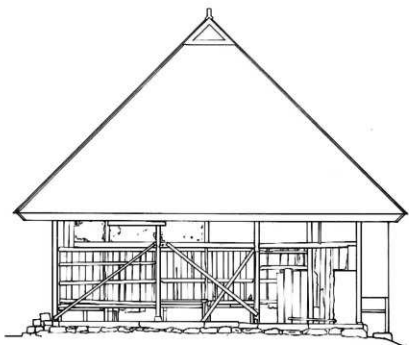
智恩寺の講堂について、具体的な規模が判明する資料として「太宰管内志」があり、次のような記載がある。

「講堂は湊流より一町登て小山陵夷の側岩頂にあり南向にして入三間に横四間の堂あり本尊は薬師如来傍仏は日光月光なり又十二神將あり」ここで智恩寺講堂を「入三間に横四間」と記している。「太宰管内志」は、伊藤常足が文化元年（一八〇四）から天保十二年（一八四一）にかけて執筆した地誌であり、この時期には既に現状の間口三間・奥行四間の形態に改修されていたと思われる。

現在の智恩寺講堂には、棟札などの建築時期を明らかにする記録はない。内陣柱に残された安永八年（一七七九）の墨書きの峯入の柱銘により、それ以前の建造であることは間違いない。青山賢信氏は十八世紀中頃の建造と推定している。智恩寺講堂の内部構成は、遺立後、比較的早い時期に改変されたと思われる。



第44図 智恩寺の講堂 (1)



第45図 智恵寺の講堂 (2)

2 講堂の役割と意味

『太宰管内志』の岩戸寺の項で、講堂で鬼会が行われていたことを特記しているように、修正鬼会は基本的には講堂で執行されてきた。成仏寺の本堂とその前の境内で行われる形式は、講堂焼失後の変化である。また、講堂に峯入の柱銘が残されることが多いことから、修正鬼会や峯入などの「行」としての法会において、講堂が最も中心的な建造物であったことは間違いないであろう。

『太宰管内志』に記載されている高貴寺の講堂は、平安期に建てられた高貴寺大堂のことである。これは現存する九州最古の建造物として、国宝に指定されている。三間四間の堂の中心やや後ろに一間四方の須弥壇を造り、阿弥陀如来坐像を安置しており、当時の阿弥陀堂建築の典型的な遺構といえる。この高貴寺大堂は、行道といつて須弥壇の仏の周囲を修行僧たちが巡るとともに、壇前の広い外陣で密教儀式を行うことができるような構造になっており、常行三昧堂としての性格が見られる。

智恵寺などの六郷山寺院の講堂は、内陣の背後に仏龕が設けられるという構造上の違いはあるが、外陣が内陣四方を取り囲んでいる構造から、この常行三昧堂の形式を伝えていると思われる。それは、修正鬼会の際に仏龕の周囲を巡って僧侶たちが誦経すること、同じく四方圍の折りに僧侶たちが外陣で結界を張ること、荒鬼たちの三々九度ノ法や二十一走飛行などの行法が外陣で行われることなどに、その遺習を見いだすこともできるだろう。

典型的な六郷山寺院は、六所権現・講堂・本堂（院主坊）・坊集落によって構成されている。院主坊と坊集落に住む僧侶たちが合同して儀式を執行する講堂は、本来、この建造物群の中核の役割を背負っていたのである。

(註)

青山賢信「六郷山寺院とその建築」

『六郷山関係文化財総合調査概要』

大分県教育委員会 一九八二

(四) 国東半島の古瓦

六郷山寺院から出土した古瓦については、まとまった資料がないことや、ややローカルなため問題視されず、これまでまとめられたものはほとんどなかった。しかし、今回の智恩寺遺跡出土瓦によって非常に特殊な様相がはじめて明らかになったことにより、改めて六郷山寺院の諸要素を見直す必要が生じたように思われる。そこで今回智恩寺遺跡の発掘報告にあたって出土資料ならびに関連資料を取録し、比較資料として智恩寺遺跡出土瓦に年代的位置づけの参考に供するとともに、今後の六郷山寺院解明の資としたい。

なお、この集成にあつたのは、向野庵寺出土資料ならびに桜八幡宮本宮資料の一部について、九州歴史資料館編「九州の古瓦」から借用した。記して謝意を表す。

① 国東町桜八幡宮本宮出土資料 (第46図)

国東地域の出土瓦では最も古式の一群で、1・3は鴻臚館系の、2は法隆寺系忍冬唐草文である。平瓦当文はともかなりくずれや変形が目立ち、3では上下に陽起鋸歯文と珠文を配している。これらは宇佐宮弥勒寺の系統を引くものであろう。4は素弁八弁で、広い珠文帯と小形の中房などきわめて簡略化された表現に特徴がある。

② 大分市豊後園分寺出土資料 (第46図)

第46図5・6のうち、5は所蔵資料であり明確に園分寺出土かどうかは不明。いわゆる陰陽反転の瓦当で、もとの瓦当を押しつけた時の珠文痕が小さく残り、あとから竹管様のものを押捺して珠文としている。小形の中房と四つの蓮子が特殊である。6は最近の出土資料。外区に珠文を巡らさず、内区に珠文を配するところは極めて特異であり、また蓮弁

の形態は太宰府市安楽寺出土のものに類似したものである。

③ 豊後高田市薬王寺出土資料 (第47図)

軒九瓦三種類、軒平瓦二種類がある。このうち1・2は外区に唐草文帯と珠文が巡る同種のもので、復原すると(第50図)面径が十八センチを超す大形の単弁七弁の瓦当である。1は唐草文帯がその外圍と接して一体となる点で2と異なるが、同一個体の可能性もある。蓮弁は中央部が盛り上り、一弁ずつ弁間線で区画される。丸瓦外面はやや細手の正格子。3は複弁七弁に復原される。幅広い珠文帯が特徴である。4は蓮弁の表出を輪郭線で行う。軒平瓦は唐草文二種5・6・7がある。5・6は同一種の右側と左側で均正唐草文である。いずれも文様の表出が弱く明瞭でない。

④ 豊後高田市矢原出土資料 (第48図)

出土地は小字カワラガマ(瓦窯)と呼ばれているが寺院跡の可能性もある。唐草文の軒平瓦と繩目叩きの平瓦・繩目叩きを撫で消した丸瓦とがある。平瓦は側縁が中央部に比べ薄くなる特徴をもち、一枚造りとみられる。側端、側縁ともへら切り仕上げで、側端凹面には面取りを行うほか側縁にも面取りをしたものがある。凹面布目は一〇当り五〜四本と疎である。この種の平瓦は弥勒寺跡の奈良時代の溝(SD-7)出土のものに類似している。

⑤ 山香町向野庵寺出土資料 (第49図)

軒九瓦、軒平瓦が出土している。軒九瓦は蓮華文の外側を唐草文帯が巡るタイプ。花卉頭の割れた単弁十二弁を弁間線が画する。中房は小さい。2は右行する唐草文をもつ軒平瓦で、内区が三ヶ月形を呈し、珠文が上下の界線と接するなど文様のくずれが著しい。

⑥ 豊後高田市高貴寺出土資料 (第49図)

3、4は高貴寺の創建瓦で、軒九瓦の如來形は四種類あつていわゆる四方仏とされる。軒九瓦は行基葬きである¹⁾。

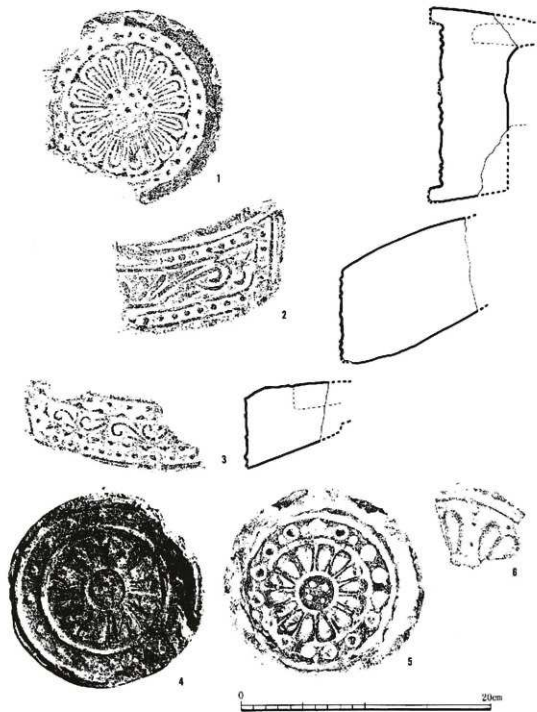
以上六郷山寺院を中心とした出土資料をみたが、次に宇佐宮弥勒寺の出土資料をみよう。弥勒寺は奈良時代に成立し、六郷山寺院に大きな影響を与えたとされる寺院である。創建瓦の鴻臚系軒瓦やこれと前後する時期の数種類の軒瓦、室町期の軒瓦などを除けば明確な年代的位置づけが必ずしも行われていないが、智恩寺遺跡出土資料と類似したタイプを抽出するならば、軒九瓦として第50図5・6、軒平瓦では9が相当しよう。5・6はいずれも破片からの復原図である。5はやや細弁化しているものの、全体的な雰囲気や中房の周囲に圓線を巡らす手法、一十八の蓮子数に一致点がある。6は珠文帯をもたずに内区弁間に珠文三個を配置するもので極めて特異である。蓮弁中央の凸線によって単弁の照り返りを表現したもので、その点智恩寺出土の2の方が同様に稚拙な表現ながらもとの形態に近いといえる。智恩寺出土資料2との関係は深い。9は均正唐草文軒平瓦で蕨手状の短い蔓草が重層的に連続していく。智恩寺出土の4とは、蕨手の状態や、下位の界線に珠文が接触している珠文帯の状況が共通する。

一方、瓦当以外の丸瓦、平瓦をみると、手法的には弥勒寺出土資料と智恩寺出土資料の様相は異なる点が多い。まず叩き文のうち格子目叩きの占める割合が高いことである。弥勒寺遺跡の場合、九世紀初頭に埋まった溝出土の瓦には格子目は一点もなく、九世紀後半の土器を出す土器溜資料および十世紀後半の土器溜資料で同様に0%、十一世紀の土器を出す土器溜資料になるとやと四・八%というように、格子目叩きの出現は遅く、しかも割合は低いのである。また、さらに智恩寺出土資料に

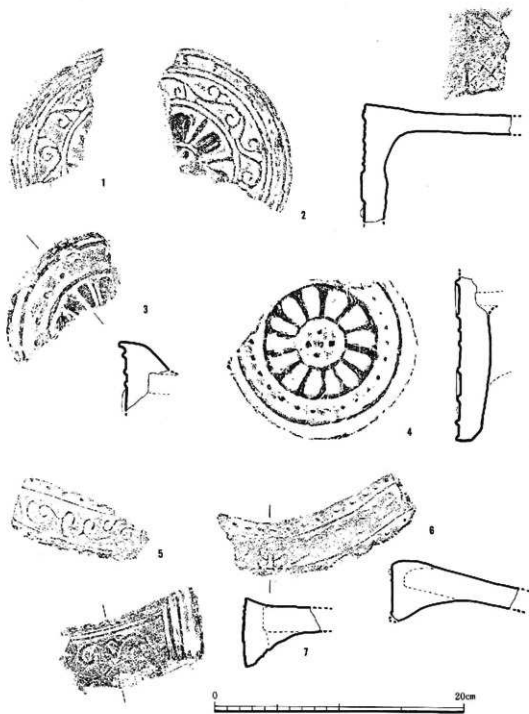
は両側の側端をもつ資料がないので四枚造りかどうかの確認ができないが平瓦の切り割り手法がある。この点も弥勒寺遺跡では丸瓦以外ではみない手法である。凹形台使用の二枚造りが智恩寺にはあるので、凸形台使用の二枚造りの存在の可能性も捨てきれないが仮りに、四枚造り（桶巻き造り）が優先であるとすれば宇佐地方の諸寺院の造瓦技法とは異なる技法が新たに導入されたことを物語るものとして注目されよう。

註

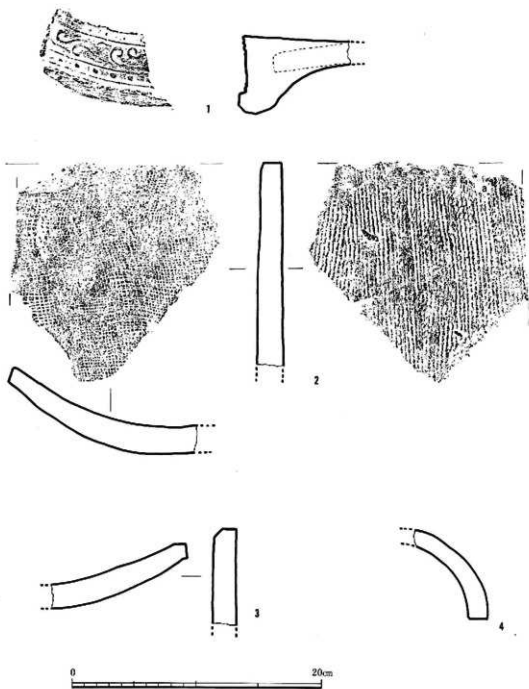
- (1) 豊後国分寺跡。大分市教育委員会 一九七九
 - (2) 国指定史跡豊後国分寺跡環境整備事業報告書。大分市教育委員会 一九九二
 - (3) 豊後・向野院寺調査報告。山香町教育委員会 一九六五
 - (4) 豊後国田原荘の調査1。大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 一九八六
 - (5) 弥勒寺。大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 一九八九
- (5) 同様の傾向は筑前国分尼寺跡でも指摘されている。
筑前国分尼寺跡。大分市教育委員会 一九九一



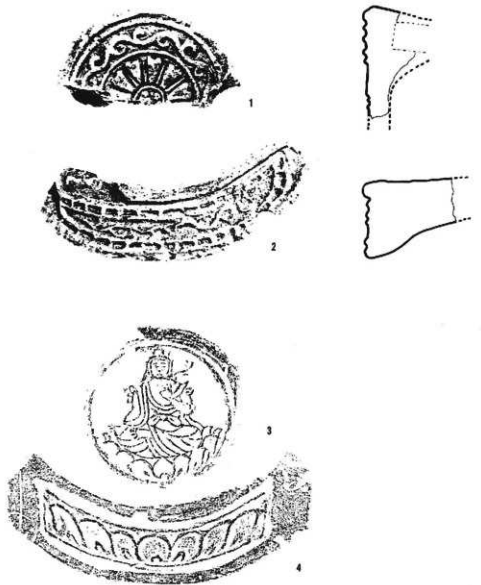
第46図 関東の古瓦 (1)



第47図 関東の古瓦 (2)

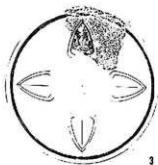
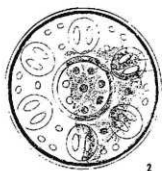
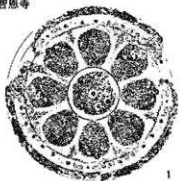


第40回 國東の古瓦 (3)

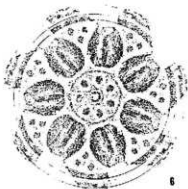
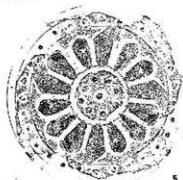


第49図 関東の古瓦 (4)

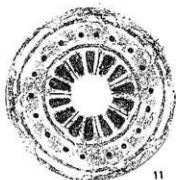
智恩寺



弥勒寺



薬王寺



(1-5-6-10-11-12は拓本による複製図)

0 20cm

第50図 国東の古瓦 (5)

(五) 智恩寺鑄造土坑出土銅塊の金屬學的調査

1 はじめに

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館は、一九九一年六月から十月にかけて県内の豊後高田市大字那宇堂山に所在する智恩寺境内の発掘調査を実施し、直径約二・六寸、深さ約五十センチの土坑を検出し鑄造遺構であることを確認した。同遺構から溶解炉の炉壁や、梵鐘の鑄型や銅塊を検出した。

鑄造遺跡は、鑄物師たちが居住地近くに工房をかまえて、日常生活品など製作する「座吹き」と、鑄物師が寺院などから梵鐘などの製作依頼を請けて、出張して鑄造を行う「出吹き」とがある。智恩寺境内で確認された鑄造遺跡は後者の方で「出吹き」で、その鑄造には、近隣の鑄物師たちが何らかのかたちで関与したことは十分に考えられる。

近年、全国的に古代から近世にいたる鑄造遺跡の発掘調査が進み、「座吹き」と「出吹き」の遺跡が増加傾向にあり、一方、発掘品の鉄滓や鉄塊・銅滓や銅塊、それに炉壁や粘土などについて着実に金屬學的調査が行われ、材質の解明のみならず鑄造技術のあり方も明らかになりつつある。

筆者は、智恩寺境内鑄造遺物の内、銅塊一点の金屬學的調査を大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館・小柳和宏氏より、機会をあたえていただいた。調査の目的は中世の梵鐘の材質の解明と、調査のもう一つの目的は、古代から近世にかけての梵鐘をはじめとする銅製品の分析データ蓄積のために行った。

2 銅塊の金屬學的調査

銅塊の金屬學的調査の調査項目と調査方法を以下に記す。

(一) 目視観察と計測 (図版 I-1・2)

試供品は焼土に被われ緑青を呈しており、携帯式金屬探知機で金属銅の存在の確認ができた。

銅塊は、砂粒を含む焼土でかたまりかなり硬い。焼土除去後、銅塊の表面全体は緑青に被われ、アバタ状で細砂粒が焼き付いている。太さは、長さ七十七・一、幅三十七・一、厚み三十四・一、重さは三十七・六グラムを計った。

分析試料採取のため、銅塊のほぼ半分ほどのところを切断したところ、切断面全体は金色を呈しているのが認められた。

(二) 化学分析

試料十七・五グラムの表面に付着する酸化物の除去のため、希塩酸 (HCl) で洗滌後ニブラで切削し溶液にて溶かした。元素の測定は高周波誘導プラズマ発光分光分析法 (ICP) で測定し、銅 (Cu) など十八元素の検出を行った。

(三) 顕微鏡観察

顕微鏡試料採取位置は塊の中心付近を選定した。試料二・五グラムをペーライト樹脂に埋め込み研磨紙で荒目から細目へと研磨し、最終的には、ダイヤモンドで仕上げた。顕微鏡観察は光学顕微鏡で、二〇〇倍・四〇〇倍で観察した。

(四) 硬さ測定

硬さはマイクロビッカース硬度計で、研磨面の硬さを測定した。

3 銅塊の調査結果

(一) 化学組成

銅塊の化学組成については第一表に示す。銅(Cu) 七〇・七%で、これに鉛(Pb) 一八・五%・錫(Sn) 八・二五%を計り、銅に次いで鉛、錫の順で多い。他の随伴微量元素については砒素(As) 〇・二〇八%、硫黄(S) 〇・二三%は高めで、亜鉛(Zn) 〇・〇〇一%で皆無に等しい。カルシウム(Ca) 〇・〇一四%・燐(P) 〇・〇〇一%・珪素(Si) 〇・〇八七%・マグネシウム(Mg) 〇・〇〇三%・銀(Ag) 〇・〇〇三%・金(Au) 〇・〇〇二%などを測る。

(二) 顕微鏡観察(図版II-1・2・3)

銅塊の組織は、研磨のままで二〇〇倍の観察では、白地の基地に淡青色の斑点状が認められた(図版II-1)。次に組織を確認するために、塩化第二鉄溶液で腐食(エッチング)し、二〇〇倍(図版II-2)・四〇〇倍(図版II-3)で観察した。組織は白色結晶の α 相および、黒色斑点状の共晶 α 結晶と、異形の($\alpha+\delta$)共析品が認められる。

(三) 硬さ測定

マイクロビッカース(HMV)二〇〇倍で七十三・六を測定した。

4 まとめ

鑄造時期については、智恩寺遺跡発掘担当者の小柳和宏氏から、鑄造遺物とともに瓦質土器の検出や、発掘調査状況と出土遺物全体から十三世紀中ごろから後半との教示を得た。

智恩寺鑄造跡出土の、銅塊の目視観察と金属学的調査の結論は、以下のように要約される。

一 銅塊の外観目視観察から、銅塊に鑄物砂状の土が表面に焼け付き、

木炭粉も微量ながら認められた。本銅塊は銅塊の形状などから、鑄造時に種の底部から側壁に付着したものであろうと想定される。

二 鑄型については、梵鐘の鑄型が出土し他の製品の鑄型を見ないことから、銅塊は梵鐘鑄造時の一部とみなされる。したがって成分的には十三世紀に製作された、智恩寺の梵鐘と同じ成分とみなされる。

三 銅塊は銅と鉛・錫の合金からなる青銅で、それに金の投入が認められる。粗銅や他の金属中にはごく微量の金を含有するが、分析数値のオーダーがはるかに違い、本分析数値からは金の投入と見るべきである。なお、金の投入目的については梵鐘の音色効果をよくするためと思われており、智恩寺の梵鐘についても、その効果をねらった投入と思える。

四-1 副原料の投入や不純物の影響などについて、若干述べておきたい。

砒素については溶解度減少目的のために投入されるが、〇・二〇八% A_s は溶解度減少にある程度は影響を及ぼしていると言える。ただ、砒素投入にあたって智恩寺の梵鐘鑄造時に投入されたものか、それとも銅鉱石から金属銅をとりだす、製錬段階で投入されたものが、原料銅素材に残留していたとも考えられる。いずれにしても、砒素投入は製錬および精錬(鑄造)時の低温還元・低温溶解を目的としたもので、智恩寺の梵鐘は一一五〇℃前後で溶解鑄造したと推定できる。

四-2 硫黄については、微量であれば鑄物に及ぼす直接の影響は少ない。しかし、硫黄の含有量が増加すれば、亜硫酸ガスを発生し鑄果の発生原因となる。本銅塊の〇・二三% S は高めで、梵鐘鑄造において鑄果の発生原因を及ぼした可能性は考えられないでもない。

四-3 〇・〇一四% Ca 、〇・〇八七% Si は、石灰・珪石の投入は僅

かなが行われたと考えられるが、石灰・珪石は脱酸剤の役目をはたす。今後、鋼滓の分析も合わせて煤溶剤の検討の必要性を感じる。

五 使用原料の銅鉱石について考えておきたい。銅鉱石は系統的に分けると、①自然銅鉱石、②硫化鉱、③酸化鉱に分類される。鋼塊中に〇・一七五% Fe、〇・二三% Sを測定することから、硫化鉱に類する黄銅鉱(Chalcopyrite: CuFeS₂)系銅鉱石が用いられたと推考される。なお、硫黄分については銅鉱石の段階から含有していたもので、製錬時の銅鉱石の硫黄分は、今回の測定値〇・二三% Sよりはるかに多い含有量であったとみてよい。

本尾になったが、本稿をまとめるにあたり大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館・小柳和宏氏をはじめ、北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室・中村修身氏、谷口俊治氏、北九州市泉台小学校・轟次雄氏、太宰府市教育委員会文化課・山本信夫氏、枚方市文化財研究会、吉田晶子氏、たたら研究会・穴澤義功氏、新日本製鐵(株)八幡製鐵所試験分析室・吉田孝行氏、元新日本製鐵(株)八幡製鐵所・東田輝男氏など多くの方々にお世話になった。記して感謝の意を表します。

註

(一) 智恵寺の近隣には、大分県宇佐市長洲金屋の「宇佐宮手跡物庫」、同じく西国東郡真玉町金屋の「高田の跡物館」が存在する。しかし、両跡物庫の操業開始時期がはっきりしなく今後によるが、検出された鋳型と今日残る仕籠の形態的な比較検討が必要かと思ふ。

(二) 中山光夫「鑄造関係遺物の金属学的調査」、『並町遺跡』(小倉跡物館に関する遺跡の調査)(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室、一九九〇年三月

三十一日

② 中山光夫「豊前小倉・室町遺跡の鑄鉄溶解炉について」『鑄鉄遺跡研究会発表資料』京都造形芸術大学、一九九一年九月十四日

③ 中山光夫「豊前小倉・室町遺跡の鑄造関係遺物の金属学的調査」『鑄鉄遺跡研究会発表資料』京都造形芸術大学、一九九一年九月十四日

(3) 金属探知機の仕様

製品名称 K D S・メタルチェッカー(金属探知機)

形式 M R 150

感知物 鉄塊系遺物、鉄器などの残留金属部分・その他

の金属類

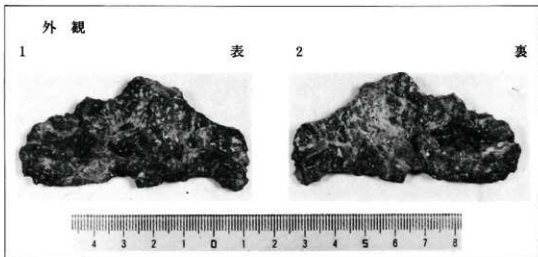
基準値設定者 穴澤義功氏

第1表 大分県豊後高田市大字鼎字堂山 智恩寺鑄造遺構出土銅塊の化学組成(%)

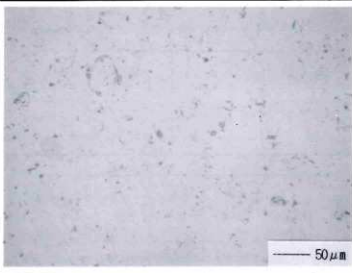
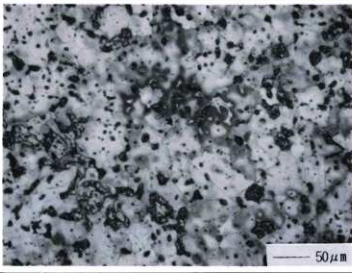
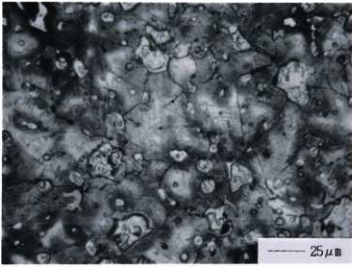
試料名称	銅 Cu	砒素 As	燐 P	アルミニウム Al	ニッケル Ni	マンガン Mn	鉄 Fe	鉛 Pb
銅塊	70.7	0.208	0.002	0.028	0.035	0.001	0.175	18.5

錫 Sn	亜鉛 Zn	銀 Ag	金 Au	マグネシウム Mg	珪素 Si	アンチモン Sb	コバルト Co	カルシウム Ca	硫黄 S
8.25	0.001	0.003	0.002	0.003	0.087	0.100	0.010	0.014	0.23

図版 I



図版 II 顕微鏡組織

1		<p>研磨のまま</p> <p>× 2 0 0</p>
2		<p>腐食液 塩化第二鉄溶液</p> <p>× 2 0 0</p>
3		<p>× 4 0 0</p>

智恩寺関連文書集成

史料解題

○六郷山諸勳行并諸堂役祭等目録写(安貞二年—一二二八)

この文書は、長安寺(大分県豊後高田市加礼川)書写本があり、史料はこれによる。なお、もう一つ写が千灯寺(大分県国見町)に所蔵されている。安貞二年は、六郷山が関東折禰所に指定された重要な年であり(島原松平文庫所蔵文書)、そのような六郷山の画期に、各寺院の法会、祭祀を書き上げた重要な目録である。

○六郷山異国降伏祈禰卷数日録写(弘安七年—一七八四)

長安寺所蔵。安貞二年の関東折禰所指定以後、関東からの祈禰依頼があるが、文永・弘安の役以降、異国降伏の祈禰がその中心となる。この文書は、幕府の指示に従って作成された祈禰卷数日録の写である。

○豊後国関田報案(弘安八年—一八五)

弘安の大田文は諸本があるが、内閣文庫本を取録した。豊後国の鎌倉中期の莊園・公領の領有状況を全体として把握できる基本史料である。

○六郷山本中末寺次第并四至等注文案(建武四年—一三三七)

水弘文書中にあるが、長安寺にも「大満帳」として享保九年(一七二二)の写本がある。中世における六郷山寺院の全容を知ることができ、基本史料である。

○豊州御領村々様子大概書

島原松平文庫所蔵。後藤重巳氏によって別府大学「史学論叢」第十九号で紹介された。島原松平藩の豊後分領にかかわる村の明細帳であり、十八世紀中期の神社・寺・堂宇の状況などを細かく記載した史料である。

(飯沼)

一 六郷山諸勳行并諸堂役祭等目録寫

○長安寺文書
豊後高田市大字加礼川

豊後国六郷山諸勳行并諸堂役祭等目録

權律師兼隆高白筆帳

注進

豊後国六郷山諸勳行并諸堂役祭等目録寫

本山分

一 後山石屋、本尊藥師如來、深山去里數町、年中勤修正月會白正月六日壬辰、觀音經不斷同日九日、一日轉讀大般若會同日廿八日、一夏九旬不斷供花三

也、觀音經不斷同日九日、修法華三十講問答、天台大師供、在堂立儀

ケ夜大念佛自九月十三日至同十五日、佛名經廿三日、覺來羅供每月、月並勤藥師講每月、往生講

每月十五、日次勤長日初後夜入堂讀誦經典、長日護摩一應勤、於六所權

現御寶前、二季御祭二月十一日、五節供等於石屋佛前、長日藥師經十二卷

讀之、於權現御寶前、仁王講一座、寂勝王講一座打之、

一 伊多井社、本尊妙見大菩薩、年中勤修正月會正月、七節供每節、法華問

答講、同金剛般若經十二卷讀之、今始御祈禰長日金剛般若經三卷、仁

王講一座、金剛壽命經十二卷讀之、

一 吉水寺、本尊無量壽如來、年中勤修正月會正月五日、二季彼岸大念佛、

一 夏九旬安居、勤天台大師供十二月廿廿、佛名經十二月十日、月並勤藥師經每月

八日、往生講每月、月次勤初後夜入堂讀誦經典、今始御祈禰長日藥師經

十二卷、觀音經三十三卷讀之、

一 津波戸石屋、本尊千手觀世音菩薩關山寺、昔有人聞菩薩、行願滿山給也、

彼菩薩於此石屋、放瑞相、告諸當家巡禮次第也、於能行聖人御石屋也、亦齊衛二年二月十五日、同聖人白華仁書如法經時、為祝水以筆軸、指白岩給、白軸踏盡水漲出事、干今新也、當代取此水、滿山仁書寫如法經云、年中勤正月會正月三日、法華不斷經自十月八日、同修法華八講八月初三日、八月初三日、日次勤初後夜入堂讀誦經典、於石屋觀音佛前、

今始御祈禱長日觀音經三十三卷、千手陀羅尼卅一遍、

一大折山、本尊聖觀音、年中勤修正月會正月五日、一夏九旬安居、勤法華不斷經自十月廿一日至十月廿三日、修八座問答講、月並勤觀音講每月、日次勤初後夜入堂讀誦經典、今始御祈禱長日觀音經三十三卷讀之、

一較懸石屋、於權現御寶前、二季御祭、五節供等、

一高山寺、本尊藥師如來、并觀世音菩薩高山寺、年中勤修正月會正月八日、日次勤初後夜入堂讀誦經典、於六所權現御寶前、二季祭五節供等、今始御祈禱長日藥師經十二卷、同仁王講一座讀之、

一間戶石屋、本尊藥師如來、年中勤修正月會正月八日、一夏九旬安居、勤法華不斷經自十月十三日至十月十三日、月並勤藥師講每月六日、日次勤初後夜入堂讀誦經典、於六所權現御寶前、二季祭五節供、今始御祈禱長日藥師經十二卷、同仁王講一座讀之、

同仁王講一座讀誦之、

一喜久山、本尊丈六臂色阿彌陀如來、丈六不動、同大威德、種々勤等中絶、

一不動石屋、本尊不動、五丈石身、深山冥明如來、

一大日石屋、本尊大日、五丈石身、深山同尊種子岩切顯給也、

一辻小野寺、本尊千手觀音高山寺、年中勤修正月會自正月一日至正月一日、觀音經不

斷一日兩八日、大念仏二季不斷供花六月十八日、法華不斷經十月廿四日、佛名經十二月廿日、月並勤觀音講每月、日次勤長日初後入堂、讀誦經典、於六所權現御寶前、二季祭中午十一日、五節供等、於三王御寶前、二季神樂六月十二日、今始御祈禱長日觀音經三卷、金剛壽命經讀之、仁王講一座行之、

一六谷寺、本尊十一面觀音、年中勤修正月會正月四日、大念佛二季不斷經六月十六日、法華不斷經十月廿三日、月並勤觀音經講每月、日次勤初後入堂讀誦經典、山王於御寶前、二季神樂六月十一日、今始御祈禱長日觀音經、金剛壽命經讀之、仁王經一座行之、

一智恩寺、本尊藥師如來、年中勤修正月會正月五日、一夏九旬安居勤、月並勤藥師講每月、日次勤初後入堂讀誦經典、六所權現於御寶前、二季祭五節供等、

惣山山、本尊千手觀音、阿彌陀三尊、不動尊、年中勤修正月會自正月一日至正月一日、修二月會自二月一日至二月十五日、有舞樂二月十五日、百座仁王經會正月八日、三夜勤也、

大念佛自九月十三日、法華不斷經十月十八日、曼荼羅供季別勤八座問答講、天台大師供十一月廿日、佛名經十一月廿日、月並往生講勤之十一月、觀音講每月、月次勤初後入堂讀誦經典、六所權現於御寶前、每季一日轉讀大般若會、請僧季別廿人、每季百座仁王會、一夏九旬不斷供花、二

一屋山寺、本尊千手觀音、阿彌陀三尊、不動尊、年中勤修正月會自正月一日至正月一日、修二月會自二月一日至二月十五日、有舞樂二月十五日、百座仁王經會正月八日、三夜勤也、

大念佛自九月十三日、法華不斷經十月十八日、曼荼羅供季別勤八座問答講、天台大師供十一月廿日、佛名經十一月廿日、月並往生講勤之十一月、觀音講每月、月次勤初後入堂讀誦經典、六所權現於御寶前、每季一日轉讀大般若會、請僧季別廿人、每季百座仁王會、一夏九旬不斷供花、二

一屋山寺、本尊千手觀音、阿彌陀三尊、不動尊、年中勤修正月會自正月一日至正月一日、修二月會自二月一日至二月十五日、有舞樂二月十五日、百座仁王經會正月八日、三夜勤也、

大念佛自九月十三日、法華不斷經十月十八日、曼荼羅供季別勤八座問答講、天台大師供十一月廿日、佛名經十一月廿日、月並往生講勤之十一月、觀音講每月、月次勤初後入堂讀誦經典、六所權現於御寶前、每季一日轉讀大般若會、請僧季別廿人、每季百座仁王會、一夏九旬不斷供花、二

一屋山寺、本尊千手觀音、阿彌陀三尊、不動尊、年中勤修正月會自正月一日至正月一日、修二月會自二月一日至二月十五日、有舞樂二月十五日、百座仁王經會正月八日、三夜勤也、

大念佛自九月十三日、法華不斷經十月十八日、曼荼羅供季別勤八座問答講、天台大師供十一月廿日、佛名經十一月廿日、月並往生講勤之十一月、觀音講每月、月次勤初後入堂讀誦經典、六所權現於御寶前、每季一日轉讀大般若會、請僧季別廿人、每季百座仁王會、一夏九旬不斷供花、二

一屋山寺、本尊千手觀音、阿彌陀三尊、不動尊、年中勤修正月會自正月一日至正月一日、修二月會自二月一日至二月十五日、有舞樂二月十五日、百座仁王經會正月八日、三夜勤也、

季御祭五節供等、法華問答講一座五月廿八日、轉讀大般若經一部廿八人、
并法華八講八講人、小立義十問、豎者注記合十二人廿二年、以十二日、今始
御祈禱長日轉讀大般若一帙、仁王講一座、觀音經三卷、伴勤等滿山現
德器量採之、

中山分

一長岩屋、本尊觀世音菩薩、年中勤修正月會自正月四日至、修二月會自二
日同至三日、三ヶ日夜大念佛自十一月一日、一夏九旬之間、不斷供花、七
日同至三日、三ヶ日夜動廿八日、佛名經廿七日、月並勤藥師講廿八日、
修問答三十講廿八日、天台大師供廿四日、佛名經廿七日、月並勤藥師講廿八日、
八、觀音講廿八日、日次勤初後入堂讀誦經典、不動行法一座、藥師經十
二卷、觀音經卅三卷讀之、六所權現於御寶前、二季祭供等、今始御祈禱長日轉
讀大般若一部、仁王講一座、
一龍門石屋、本尊千手觀音、仙室年中勤修正月會正月、一夏九旬不斷供花、
月並勤觀音講廿八日、六所權現於御寶前、二季祭供等、今始御祈禱長日觀音經
卅三卷讀之、
一虚空藏石屋、本尊如名、修正月會正月、虚空藏講十三日動也、
一黑土石屋、本尊馬頭觀音、仙室年中勤修正月會正月、觀音講廿八日、日次
勤初後入堂讀誦經典、六所權現於御寶前、二季祭供等、今始御祈禱長日
觀音經卅三卷、同千手陀羅尼卅三遍、

一四王石屋、本尊四天王、仙室年中勤修正月會正月、毘沙門講三日、初後
入堂讀誦經典、今始御祈禱長日毘沙門行法一座、

一小岩屋山、本尊藥師如來、年中勤修正月會自正月六日至、修二月會自
一月一日、一夏九旬不斷供花七月十五日、一日轉讀大般若會廿八日、修八
座問答講、三ヶ日夜法華不斷經同至廿五日動也、天台大師供廿四日、佛名
廿二月、月並勤藥師講廿八日、往生講每月、百座仁王講每月、一萬卷心經會
每月、日次勤初後入堂讀誦經典、六所權現於御寶前、二季祭五節供等、

今始御祈禱長日轉讀大般若經一帙、藥師經十二卷、藥師行法一座、
一六岩屋、本尊千手觀音深山、年中勤修正月會正月、一夏九旬安居勤觀音
講廿八日、初後入堂讀誦經典、六所權現於御寶前、二季祭五節供等、今
始御祈禱長日觀音經卅三卷讀之、

一夷石屋、本尊下手觀音、年中勤修正月會自正月一日至、修二月會自一月
至三日、二季彼岸大念佛、一夏九旬不斷供花、一日轉讀大般若九月九
日、佛名經廿七日、月並勤觀音講廿八日、一萬卷心經會每月、日次勤
師供十一月、佛名十二月、月並勤觀音講廿八日、初後入堂讀誦經典、取勝工講一座、觀音經卅三卷、六所權現於御寶前、
二季御祭供等、今始御祈禱長日轉讀大般若一帙、同仁王講一座、

一西方寺、本尊延命觀世音菩薩、年中勤修正月會正月、二季彼岸念佛會、
一夏九旬不斷供花、月並勤觀音講廿八日、日次勤初後入堂讀誦經典、六
所權現於御寶前、二季祭供等、今始御祈禱仁王講一座、觀音經三卷、

一千燈岩屋、本尊千手觀音、深山中動修正月會自正月二日至、二月三日、
會自正月二日至、二月三日、
會自正月二日至、二月三日、
會自正月二日至、二月三日、

經自正月二日至、二月三日、
經自正月二日至、二月三日、
經自正月二日至、二月三日、
經自正月二日至、二月三日、

讀大般若一部、一萬卷心經每月、月並勤藥師講每月、觀音講每月、
不動講廿日、日次勤觀世音不斷經十人、初後夜入堂讀誦經典、六所
權現於御寶前、二季御祭五節、今始御祈禱長日轉讀大般若一帙、仁王
講一座、觀音經二十三卷、

一五岩屋、祕所、本尊不動尊、深山仙室於此五ヶ祕所、昔異國降伏之時、
人聞菩薩有五人同行、五壇法修行之、

一岩殿岩屋、本尊藥師如來深山、年中季別月並長日勤、
一枕岩屋、人聞菩薩御枕在之、

一鏡子石屋、人聞菩薩御鏡子在之、
一龍本岩屋、人聞菩薩御自筆如法經、奉納此岩屋、依之一乘菩提峯云云、

一大嶽寺社、本尊藥師如來高山聖後、年中勤修正月會自正月六日、一萬、
卷心經每月、修二日會自二月一日、舍利會二月十日、一夏九旬不斷供花、
三ヶ日夜法華不斷經自十月十七日、同修八座答講八人、御靈會十一月、法華、
會十一月、月並勤藥師講八月、日次勤初後入堂讀誦經典、觀音經卅三卷、

六所權現於御寶前、二季祭五節、妙見祭、今始御祈禱長日藥師經十二卷、
觀音經卅三卷、仁王講一座、

木山分

一兩子仙、本尊藥師如來、同仙千手觀音、年中動修正月會自正月六日、二月三日、
一萬卷心經正月、一日轉讀一千卷觀音經、百座仁王會、舍利會二月、

修二月會自二月三ヶ夜勤也、二季彼岸大念佛、一夏九旬不斷供花十五、
日、一日轉讀大般若五節、三ヶ日夜不斷法華經自十月廿二日、同修三十
講問答講十人、童堅義在之、

二、月並勤藥師講八月、往生講十五日、觀音講十八日、日次勤觀世音不斷經
上備、尊勝陀羅尼、千手陀羅尼各廿、藥師供、千手供、初後入堂讀誦經
典、取勝講、六所權現於御寶前、二季御祭五節供等、今始御祈禱長日
大般若經一部、同仁王講一座、同觀音經卅三卷、同護摩藥師經十二
卷、金剛經三卷、

一小城寺、本尊六觀音、年中動修正月會自正月三日、一日轉讀一千卷觀音
經正月十日、修一月會自二月一日、一夏九旬安居勤不斷經自十月十八日、同修
八座問答講八人、天台大師供十月、佛名廿二月、月並勤往生講每月、觀
音講每月、日次勤轉讀觀音經卅三卷、初後入堂讀誦經典、六所權現於

御寶前、二季祭五節、今始御祈禱長日仁王講一座、長日觀音經三十三卷、
同金剛經二十卷、

右、於富山靈場、所致御祈禱目錄、如斯、仍願宗學侶者、瞻觀音壽王寶
前、開講一乘妙典、增佛賢、密教佛子者、塚八幡尊神、六所權現社禮、
鳴神咒、備法味、初学行者、学人聞菩薩廣行、巡禮一百餘所嚴華、偏是
兼三道續大將軍家御願圓滿、異國降伏、聖朝安穩、大施主殿下相模守平
朝臣御息延命、御壽命長遠、御心中御願圓滿成就之由、祈精之狀、如件、

同金剛經二十卷、

同金剛經二十卷、

安貞二年五月 日

日小寺主法師 某

權都維那大法師 某

都維那大法師 某

權寺主大法師 某

寺主大法師 某

權上座大法師 某

上座大法師 某

權別當大法師 某

權別當大法師 某

執行兼權別當大法師 某

六郷山衆徒御中

二 六郷山異國降伏祈禱卷數目錄寫

○依法寺文書
豊後宮田市大字加礼川

將軍家御祈願所豊後國六郷山異國降伏御禱卷數目錄

本山分 後山

奉勤修七箇日不動行法每月、奉轉讀大般若經一部每月、奉講讀仁王經一百座

每月、奉讀誦觀音經一千卷、奉講法華八講問答講、

古水寺

奉勤修七箇日不動行法每月、奉轉讀仁王般若經一百座每月、奉轉讀觀音經一千卷、奉誦尊勝陀羅尼一百遍、奉誦消咒一百遍、奉講法華八講問答講、

比小野寺

奉講讀仁王經一百座每月、奉誦誦觀音經一千卷、奉誦尊勝陀羅尼一千遍、奉讀誦壽命經一千卷、

大谷寺

奉講讀仁王般若經一百座每月、奉誦誦觀音經一千卷、奉誦尊勝陀羅尼一千遍、奉讀誦壽命經一千卷、

知恩寺

仁王經一百座每月、觀音經一千卷、尊勝陀羅尼一千遍、壽命經一千卷、

仁王經一百座每月、觀音經一千卷、尊勝陀羅尼一千遍、壽命經一千卷、

知恩寺

仁王經一百座每月、觀音經一千卷、尊勝陀羅尼一千遍、壽命經一千卷、

中山分 屋山

七箇日不動行法每月、轉讀大般若經一部每月、壽命經一千卷、講讀仁王經一百座、奉讀誦觀音經一千卷、奉講法華八講問答講、一日一夜御神樂、

長岩屋

奉勤修七箇日不動行法每月、奉轉讀大般若經一部每月、奉講讀仁王經一百座每月、奉讀誦觀音經一千卷、奉講法華八講問答講、

小岩屋

奉勤修七箇日不動行法每月、奉轉讀大般若經一部每月、奉讀誦觀音經一千卷、奉講讀仁王經一百座每月、奉誦尊勝陀羅尼一千遍、奉講法華八講問答講、

夷山

奉勤修七箇日不動行法每月、奉轉讀大般若經一部每月、奉讀誦觀音經一千卷、奉講讀仁王經一百座每月、奉誦尊勝陀羅尼一千遍、奉講法華八講問答講、

千燈山

奉勤修七箇日不動行法每月、奉講讀仁王經一百座每月、奉轉讀大般若經一部每月、奉讀誦觀音經一千卷、奉講法華八講問答講、

木山分大般若寺、豊後國鎮守

奉勤修七箇日不動行法每月、奉勤修如意輪觀世音行法每月、奉講讀仁王般若經一百座每月、奉讀誦壽命經一千卷、一日一夜御神樂、

向子山

奉勤修七箇日不動行法每月、奉轉讀大般若經一部每月、奉講讀仁王經一百座每月、奉讀誦觀音經一千卷、奉誦尊勝陀羅尼一千遍、奉講法華八講問答講、

小城山

奉勤修七箇日不動行法每月、奉轉讀大般若經一部每月、奉講讀仁王經一百座每月、奉讀誦觀音經一千卷、奉誦尊勝陀羅尼一千遍、奉講法華八講問答講、

小城山

奉勤修七箇日不動行法每月、奉轉讀大般若經一部每月、奉講讀仁王經一百座每月、奉讀誦觀音經一千卷、奉誦尊勝陀羅尼一千遍、奉講法華八講問答講、

奉勤修七箇日不動行法每月、奉轉讀大般若經一部每月、奉講讀仁王經一百座每月、奉讀誦觀音經一千卷、奉誦尊勝陀羅尼一千遍、奉講法華八講問答講、

小城山

奉勤修七箇日不動行法每月、奉轉讀大般若經一部每月、奉講讀仁王經一百座每月、奉讀誦觀音經一千卷、奉誦尊勝陀羅尼一千遍、奉講法華八講問答講、

小城山

奉勤修七箇日不動行法每月、奉轉讀大般若經一部每月、奉講讀仁王經一百座每月、奉讀誦觀音經一千卷、奉誦尊勝陀羅尼一千遍、奉講法華八講問答講、

小城山

奉勤修七箇日不動行法每月、奉轉讀大般若經一部每月、奉講讀仁王經一百座每月、奉讀誦觀音經一千卷、奉誦尊勝陀羅尼一千遍、奉講法華八講問答講、

小城山

奉勤修七箇日不動行法每月、奉轉讀大般若經一部每月、奉講讀仁王經一百座每月、奉讀誦觀音經一千卷、奉誦尊勝陀羅尼一千遍、奉講法華八講問答講、

奉勤修七箇日不動行法每季、奉誦仁王般若經一百座每季、奉誦觀音經一千卷、奉誦尊勝陀羅尼一千遍、

橫城山

奉勤修七箇日不動行法每季、奉誦大般若經一部每季、奉誦仁王經一百座、奉誦觀音經一千卷、奉誦尊勝陀羅尼一千遍、

右、任關東御教書并守護所御施行之狀、或詣六所推現社壇、或就人聞菩薩、八幡大菩薩尊靈場、滿山住侶各疑一心之精誠、勤修上件經王行法、

折精大將軍家御延命、御願圓滿、異國征伐由之狀、如件、謹言、

弘安七年九月 日

六郷山執行法橋園住在蘇判
又蘇安判
(二)

三 豊後國園田帳索

○内書文庫本
鎌倉遺文一五七〇一

豊後國園田帳

弘安八年十月十六日自國府城立御力畢、豊後國田代之事、國中寺社佛神領等并權門勢家莊園領、公田、領家、領所、地頭、并濟使等父名之事

略○中

沙弥道忍喜判
(本文無)

弘安八年九月晦日
信濃判官入道殿

豊後國直入等記中、

當國八箇郡分 國崎・速見・直入・大野・海部・大分・日田・玖珠田數領主等之事

國東郡 千六百三拾八町

武藏郡 三百丁 宇佐官領、主神官名主等
本郷二百五拾四丁八段 地頭職大友兵庫入道殿(信)

久吉名十六町

同人

重藤八町

池内永吉名二十一町 地頭職忠左衛門尉儲景跡、當知木工助三郎景元法名
源全

安岐郷三百町

宇佐官領惟忠云二百丁、

餘名三拾六丁

領主神官名主等

并府拾丁

地頭日田淵三郎永基法名
法基

弘永名三拾丁

同人

成久名三拾七丁

相模七郎殿母御前辻殿

朝來野浦十四丁

地頭朝來野浦三公平

守江浦三町

戸次太郎時頼法名道康、同次郎公繼字權在、

來繩郷三百丁

宇佐官領

本郷并餘名三百七拾七丁 郷司來繩妙惟房智恩寺院主榮範、神官名主

等、各分領難存知、
地頭職大炊三郎藏人能泰法名
道泰

吉久二拾九丁

地頭職小田原彌次郎頼景

久末五丁

宇佐官領

田原郷六拾丁

本主護所豊前大炊助入道女子持明院別當之後室之

本郷四拾丁

跡、而豊前六郎藏人泰廣、或號借上質券、或買得

小野一万名拾丁

相傳之由申處、辻殿雜掌論之、

田染郷九拾餘丁

伊賀園住人八十島左衛門太郎頼忠為私領、六郎藏

人泰廣借上之、

宇佐官領

本郷四拾貳丁

弁府之領主大藏卿法眼有寬・小田原五郎景泰法名依
典相論之、

古丸名二拾壹丁

糸水名三拾丁

柳來浦十九町

太田原別十五丁

伊美郷七拾町

都甲莊七拾丁

香地郷六拾町

真玉莊七拾丁

草地莊二拾五町

竹田津二拾丁

白野莊二拾五町

岐部浦拾五丁

姫嶋三町

國領國東郷三百町

名越地張入道殿

肥前國御家人會經崎淡路法橋慶増

地頭職大炊判官次郎親元

小田原次郎重直法名遺傳

宇佐彌勒寺領他本云八拾陸丁

地頭伊美兵衛次郎水久法名道憲

宇佐彌勒寺領、地頭都甲左衛門入道物迎跡、子息

五郎左衛門惟近相統云々法名、舎兄四郎左衛門惟信

依無足參守蹟云々、

地頭川越安藝前司

宇佐彌勒寺領、真玉左衛門次郎惟重跡嫡子文次郎

惟水法名、大貳房光秀・五郎惟村各知行之處、豊前

大炊入道殿跡六郎太郎能重論之、

地頭職大友兵庫入道殿

領主竹田津兵衛九惟法名、

宇佐彌勒寺領、家所司等、有名主數人、

領主岐部三郎成末法名、

彌勒寺領、寺家之所司等

領家松殿一位中將御跡、地頭職信濃伊勢入道殿跡

而在、

○法名部
以下略

四 六郷山本中末寺次第并四至等注文案

○本文支書
八分與史料三

六郷山本中末寺次第并末寺四至以下記之、

本山付末寺

一後山 古水山 大折山 鞍懸山 津波戸山 高山 智恩寺 馬城山

一山佛科田島山野等四至以下、院主相傳之證文言明白也、當寺領

今若字住、
大谷司神領、

一古水山佛々料田島山野等四至以下、院主相傳證文言分明也、當寺領

今若字住大官司
神領、

一大折山佛々料田島山野等四至以下、院主相傳證文言明白也、當寺領内多

分 兩野四郎
神領、

一鞍懸山佛々料田島山野等四至以下、院主相傳證文言明白也、當寺領内少々

小田原助入道神領、

一津波戸山佛々料田島山野等四至以下、院主相傳證文言明白也、當寺領黨

石以下佛門少々
兩野四郎
神領、

一高山佛々料田島山野等四至以下、院主所持證文言分明也、當寺領 小田

原助入道神領、

一馬城山 深東赤岩江 一里ハエホシ嶽 辰橋六太郎
左尾 東北廣

委院主所持證文言明白也、但近年 曾與時
十郎神領

一知恩寺佛々料田島山野等四至以下、院主相傳證文言明白也、

本山末寺

一让小野山 大谷寺 間戸寺 伊多伊 大日岩屋 中津尾岩屋 轆轤岩

屋 良醫岩屋 朝日岩屋 夕日岩屋 関山岩屋 今龍野岩屋 稻積岩

屋 日野岩屋 鳥目岩屋 河邊岩屋 鼻津岩屋 普賢岩山 如覺寺

來迎寺 光明寺

一口瀧寺 關東道 關西アイ瀧 關南サクラノ尾立 北山下美尾

委院主所持證文明白也、

一辻小野寺 大谷寺 河邊後山ノ末寺也、

彼寺領等 山形明家志以來詳載、

寺領四至以下、本寺院主所持證文明白也、

一間戸寺 伊多伊 大日岩屋 大折山末寺也、

彼寺領 小田原助入道詳載、

寺領四至以下、本寺院主所持證文明白也、

一中津尾岩屋 轆轤岩屋 最勝岩屋 鞍馬山、末寺也、

彼寺領都甲四郎入道、真玉又四郎押領、

寺領四至以下、本寺院主所持證文明白也、

一路寺 高山末寺也、 空寺領 調事詳詳載、

佛々料田畠山野以下、院主所持證文明白也、

一來迎寺 高山ノ末寺也、關東ノウヘノ谷 關西ノシノ大道 關南高田河 關北船越ノ末

委院主所持證文明白也、彼寺領數地共 小田原助入道詳載、

一光明寺 關東美尾 關西美尾 關南尾立 關北尾立

委院主相傳證文明白也、

一今熊野寺 段フケラ跡 段内赤岩 關南尾立 北極橋不動堂

委院主相傳證文明白也、

一良巖岩屋 朝日岩屋 夕日岩屋 開山岩屋 船橋岩屋 日野岩屋 鳥

日岩屋 馬城寺末寺也、 彼寺領多分 曾根崎十郎入道詳載、

寺領四至、本寺院主所持證文明白也、

中山

一兩子寺 長岩屋 屋山 加禮河 久末 黒土 小岩屋 大岩屋 千燈

山 横城山

一兩子山 關東大太郎尾付親石 關西若松尾 關南波神 關北九小野ツノノ

委院主所持證文明白也、

一九小野寺 關東近越 關西松ノ尾辻 關南藤原ノ辻尾 關北ツエ

委院主相傳證文明白也、

一長岩屋山 關東赤丹畑大ツケト等、關西信西福寺下谷 關南尾ノ崎野リ加礼河マテ大道 關北美尾

(委院主相傳證文明白也)

一岩山 關東三原路 關西明神南道向神護石 關南崎石 關北折花

委院主所持證文明白也、

一加禮河 關東厚山路 關西河百重下道 關南河内山比 關北百重下道

委院主所持證文明白也、

一久末彼寺領一向戸次侍中禪門押領、

一黒土 關東美尾 關西大岩屋美尾 關南小岩屋界 關北大宮内典

委院主相傳證文明白也、

一小岩屋 關東美尾 關西立山美尾 關南岩寺 關北大石

「委院主相傳證文明白也、」

一大岩屋 關東美尾 關西半寺西美尾 關南四條 關北山尾立

委院主相傳證文明白也、

委院主相傳證文明白也、

一 千燈山 限東久保アノ千燈 限西キコノ知 限南七曲 限北南七ノ石原

院主所持證文仁明白也、

一 横城山 限東タチノ障 限西タノ車札 限南カクリ宿場 限北松豆塚

院主所持證文仁明白也、

中山末寺

一 小向子岩屋 龍門岩屋 赤松岩屋 間羅岩屋 后岩屋 石堂 佛以右屋

光明寺 藥師堂

一 小向子 龍門 長岩屋ノ末寺也、

一 赤松岩屋 間羅岩屋 后岩屋 小石屋末寺也、

一 石堂岩屋彼寺領 号白野准 限東アウノ石原立 限西大庭 限南丹ノ車札立 限北雲野石堂尾

院主所持證文仁明白也、

一 藥師堂 料田畠四至以下、院主證文明白也、

一 平等寺 尻付岩屋 五岩屋 小不動岩屋 大不動岩屋 千燈山ノ末寺也 普賢岩屋

末山

一 見地山 大嶽山 岩戸寺 文殊仙寺 夷山 小城山 成佛寺 行入寺 高島末寺

清淨光寺 懸鐘山

一 見地 大嶽山佛々料田畠山野等四至以下、院主相傳證文仁明白也、

一 岩戸寺 限東中々ノ木 限西赤丹畑末尾 限南有來園下地 限北小山田ノ谷

院主所持證文仁明白也、但今名伊勢民部入道押領、

一 文殊仙寺 限東畠野邊 限西赤丹畑末尾 限南成徳堂立 限北石戸末尾

院主相傳證文仁明白也、

一 夷山付長小野佛々料田畠山野等四至以下、

院主相傳證文仁明白也、

一 小城山佛々料田畠山野等四至以下、院主相傳證文仁明白也、

一 成佛寺 限東光廣横ナハナ 限西佛尾ノ橋立 限南畠山尾立 限北トノ車札立

院主相傳證文仁明白也、

一 行人寺 限東龍丸屋尾寺号 限西横嶽 限南赤松岩屋 限北夷尾

院主所持證文仁明白也、

一 清淨光寺 佛々料田畠山野等四至以下、院主相傳證文仁明白也、

一 懸鐘山 佛々料田畠山野等四至以下、院主相傳證文仁明白也、

一 今夷 燒尾岩屋 普賢岩屋 巽岩屋 經岩屋 三十佛 瀧木岩屋

西裏岩屋 調子岩屋 師子岩屋 毘沙門岩屋 赤子岩屋 報恩寺 上

品寺 淨土寺 貴福寺 吉祥寺 西山 山寺領日川肥前權守ノ入道 淨領

今夷 燒尾岩屋 夷山末寺也、

一 虚空藏寺 成仏寺ノ末寺也、

一 淨土寺 行入寺末寺也、

限東赤坂 限西尾界 限南赤松末尾 限北石原

院主相傳證文仁明白也、

一 報恩寺 限東雲寺 限西瓦小野 限南夷尾 限北夷尾

院主相傳證文仁明白也、

院主相傳證文仁明白也、

院主相傳證文仁明白也、

院主相傳證文仁明白也、

院主相傳證文仁明白也、

一、古拝寺

付食權寺

原東海神立 原西鹿押

委院主所持證文（原西鹿押立）仁分明也、

（小八子）

一、願成寺夷山末寺

原東美尾

原南水小野 原西宮立松

委院主相傳證文（原西宮立松）仁分明也、

右、且依惣公文之帳、且本末寺之披見院主相傳證文、所記如件、

建武四年（丁）六月一日

「享保九甲辰天開四月六日、為當用、令書之者也、

原山長安寺 蓬山（花押）」

五 豊州御領村々様子大概書（抜粹）

○原原松平文庫

高田へ道法三拾丁

一、高貳拾三石宍升九合

知恩寺村

此村上地 下

此取 六拾石石貳斗宍升三合

一、神社

一社 伊勢宮

一社 小市郎

一社 年神

二社 權現

二社 山神

一、堂

宍ヶ所 總師

一、大川有、

六 大宰管内志（抜粹）

○智恩寺

〔弘安八年豊後國田代帳注進目録〕に國崎郡云云 來繩郷二百町宇佐宮

領本郷并余名二百七十七町郡司來繩妙性房智恩寺院主普純云云田澄郷九十余

云云 糸永名三十町地頭肥前國御家人會崎崎淡路法橋慶増とあり（六郷山

諸勳行注進目録〕に本山分一智恩寺本尊藥師如來尊中勳修正月會正月一

夏九旬安居勳月並藥師講毎月日次勳初後入堂讀誦經典云云（六郷山定額院

主目録〕に都甲莊為父山智恩寺院主傳兼寺ノ徒云云などあり（國ノ人云）

為父山智恩寺は來繩郷智恩寺村にあり天百講堂は溪流より一町登て小山陵

夷の銅岩頂にあり南向にして入三間に横四間の堂あり本尊は藥師如來傍

佛は日光月光なり又十二神將ありかくて左方南向に山神の小石祠あり九

尺四方ノ拜殿あり又其左に權現ノ社あり由向又右に一町下りて本寺あり入三

間に横四間の堂なり本尊は觀世音菩薩なり講堂と山ノ神との間に石塔あり

土人此塔を（六郷山廿八山本寺目録〕には本山八ヶ寺良薬山智恩寺とあり（或

人云）為父山は都甲莊なれば良薬とは別なりといへりいかがあらん

智 恩 寺 関 連 年 表





19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	後紀時代		
江戸時代			（戦国）	室町時代（南北朝）		鎌倉時代	平安時代					奈良時代		
<p>寛延三年（二七五）六郎清山入り</p> <p>宝曆三年（二七五）六郎清山入り</p> <p>安永八年（二七九）六郎清山入り</p> <p>寛政十一年（二七九）六郎清山入り</p> <p>天明八年（一八三七）六郎清山入り</p> <p>享和六年（一八五三）六郎清山入り</p> <p>智恩寺講堂柱礎寄錠</p>			<p>文禄元年（二五九）文禄の役</p> <p>慶長五年（一六〇〇）関ヶ原の戦い</p> <p>石垣原合戦</p>	<p>元禄十四年（一七〇七）六郎清山入り</p>	<p>永徳二年（一三八二）大乗寺の発願遊説される（大工藤原善住）</p> <p>応永四年（三九七）文殊仙寺の梵鐘鑄造される（大工藤原善住）</p> <p>明徳三年（三九七）妙善菩薩寺住持</p> <p>嘉吉元年（一四四一）山紙勧修</p>	<p>天正四年（一五七六）</p> <p>智恩寺ノ感業人物ノ記載あり</p> <p>「智恩寺」という人物も参加</p>	<p>安永二年（一八五三）</p> <p>この頃、石塔を建てつ</p> <p>この頃、瓦葺の障子障子</p> <p>この頃、瓦葺の障子障子</p> <p>この頃、瓦葺の障子障子</p>	<p>この頃、瓦葺の障子障子</p> <p>この頃、瓦葺の障子障子</p> <p>この頃、瓦葺の障子障子</p> <p>この頃、瓦葺の障子障子</p>	<p>安永二年（一八五三）</p> <p>この頃、瓦葺の障子障子</p> <p>この頃、瓦葺の障子障子</p> <p>この頃、瓦葺の障子障子</p>	<p>寛政十一年（一七九〇）</p> <p>この頃、瓦葺の障子障子</p> <p>この頃、瓦葺の障子障子</p> <p>この頃、瓦葺の障子障子</p>	<p>天明八年（一八三七）</p> <p>この頃、瓦葺の障子障子</p> <p>この頃、瓦葺の障子障子</p> <p>この頃、瓦葺の障子障子</p>	<p>享和六年（一八五三）</p> <p>この頃、瓦葺の障子障子</p> <p>この頃、瓦葺の障子障子</p> <p>この頃、瓦葺の障子障子</p>	<p>養老四年（七二〇）大隆集人の反乱</p> <p>神皇正統記</p> <p>天智神皇正統記</p> <p>河上なる</p>	<p>日本</p> <p>国東・六郷山</p> <p>智恩寺</p> <p>主な遺構・遺物</p>
												<p>国字佐八幡宗助寺建立縁起</p> <p>因六郷山年代記</p> <p>国字佐高野道山字頭坊代々名帳</p> <p>尾山法華三昧真所再興表白文</p>		

圖 版



智恩寺遠景
(都甲川を挟んで北側から)



寺屋敷地区
(南東から)



西城地区
(東から)





講堂と国東塔
(堂山地区)



山紙社
(堂山地区)



講堂の柱に残る差入り時の墨書
(右 安永・左 文化)

堂山地区拡張区
(調査前、西から)



同上
遺物出土状況
(西から)



同上
瓦出土状況





堂山地区拉张区铸造土坑
铸型出土状貌



同上
定盤近景



同上
土坑全景

堂山地区墓地



同上
(中央の石の下から
ビットが発見された)



同上
第1ビット寛永通宝
出土状態





宝山地区
講堂前調査区



寺屋敷地区空中写真



同上近景

寺屋敷地区入口部分
(南から)



同上
堀の残存状況
(北から)



同上
完掘状況拡張区
(南西から)





寺屋敷地区拡張区溝



同上
溝Bの石列

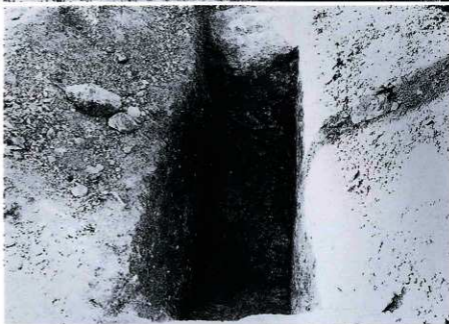


同上
土坑

寺屋敷地区拡張区
南西トレンチ石組み



同上
第2トレンチ



同上
第4トレンチ





寺屋敷地区
第8トレンチ



同上
第8トレンチ



同上
第7トレンチ

イヤの谷地区
(小溪流)



同上



同上
調査風景

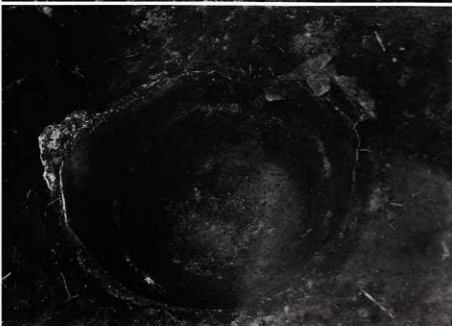




イヤの谷地区
第1グリット



同上
第2グリット



同上
第2グリット壘出土状況



西城地区
第1郭北側



同上
第1郭張り出し



同上
(第1郭南側の堀と
土塁があった場所)



西城地区
第1トレンチ



同上
第7トレンチ



西城地区東
第1トレンチ



国東塔
(堂山地区講堂の前)



宝塔塔身
(堂山地区山籠社前)



院主墓地



宝篋印塔
(院主墓地)



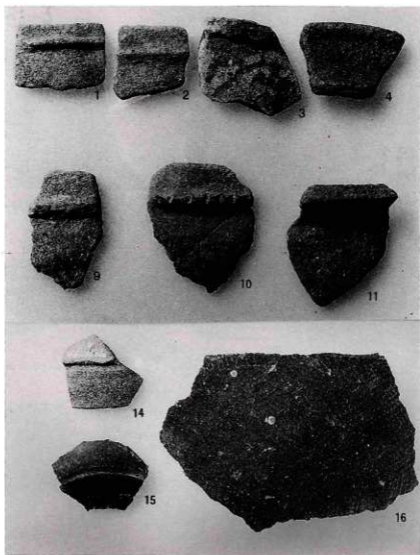
板碑 (院主墓地)



観音菩薩立像
(観音堂)



栗師如来坐像
(講堂本尊)



智恩寺出土の
弥生土器・須恵器



18



24

底部の状況



17



18



22



24



25



26

堂山地区拡張区
出土土器



28



29



33



34

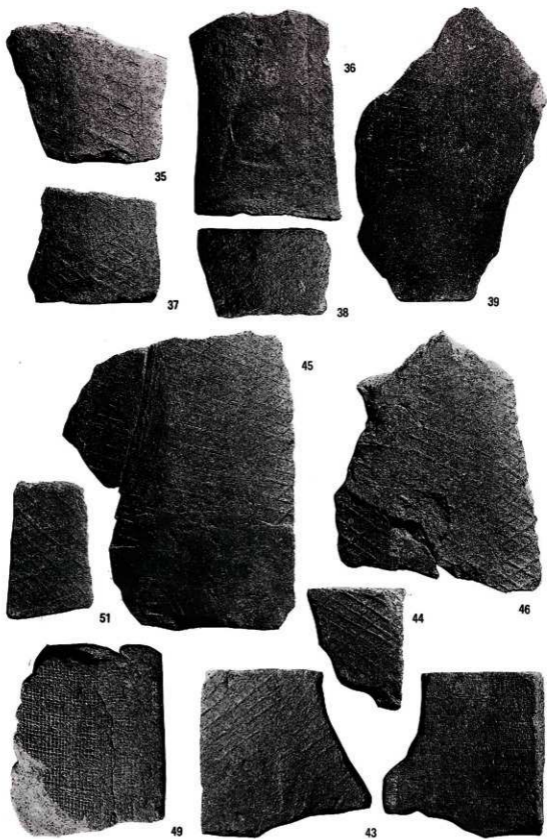


30



31

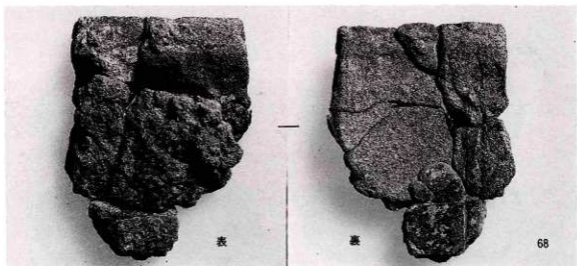
堂山地区拡張区
出土土瓦(1)



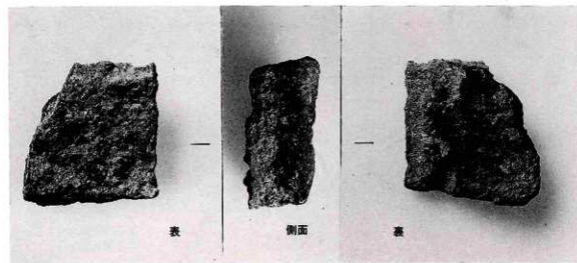
堂山地区城子区
出土瓦(2)



堂山地区拉强区
铸造土坑出土遗物

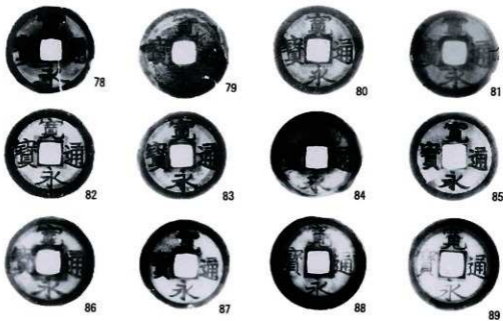


堂山地区拡張区
鑄造土坑出土梵鐘鑄型 (拡大)

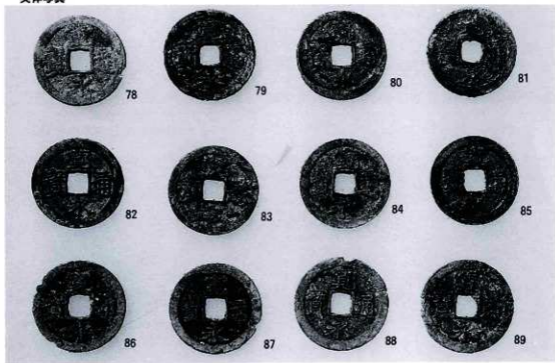


堂山地区拡張区出土
熔解炉壁

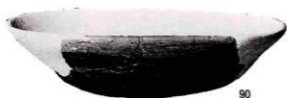
X線写真



実体写真



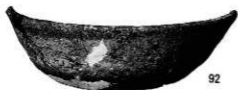
堂山地区墓地第1ビット
出土寛永通宝



90



91



92



96

底部の状況



96



91

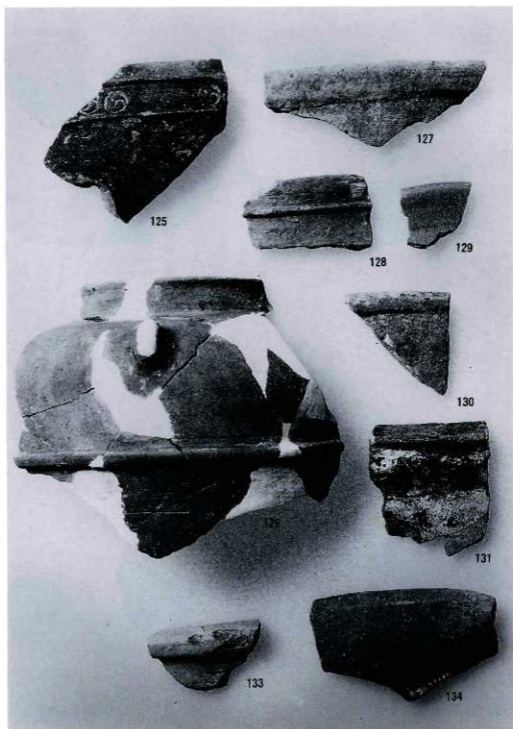


97

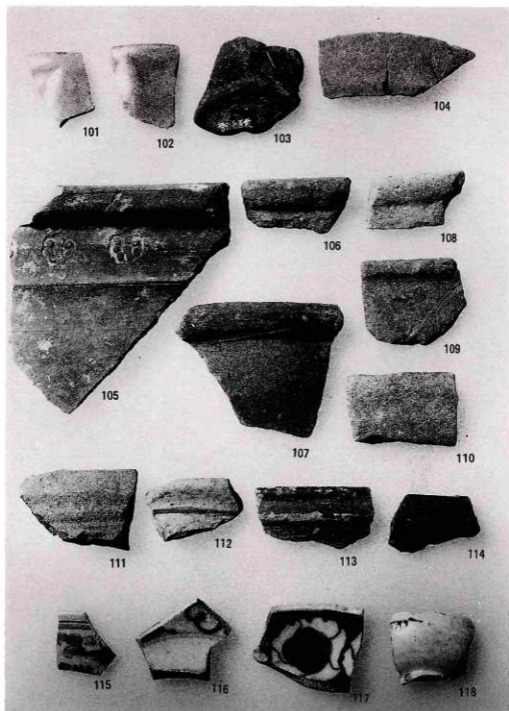


93

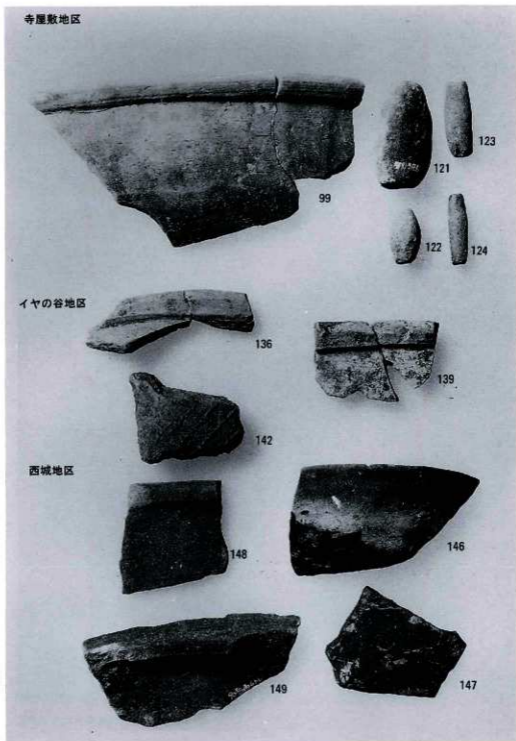
寺屋敷地区出土遺物(1)



寺屋敷地区出土遺物(2)



寺屋敷地区出土遺物(3)



各地区出土遺物

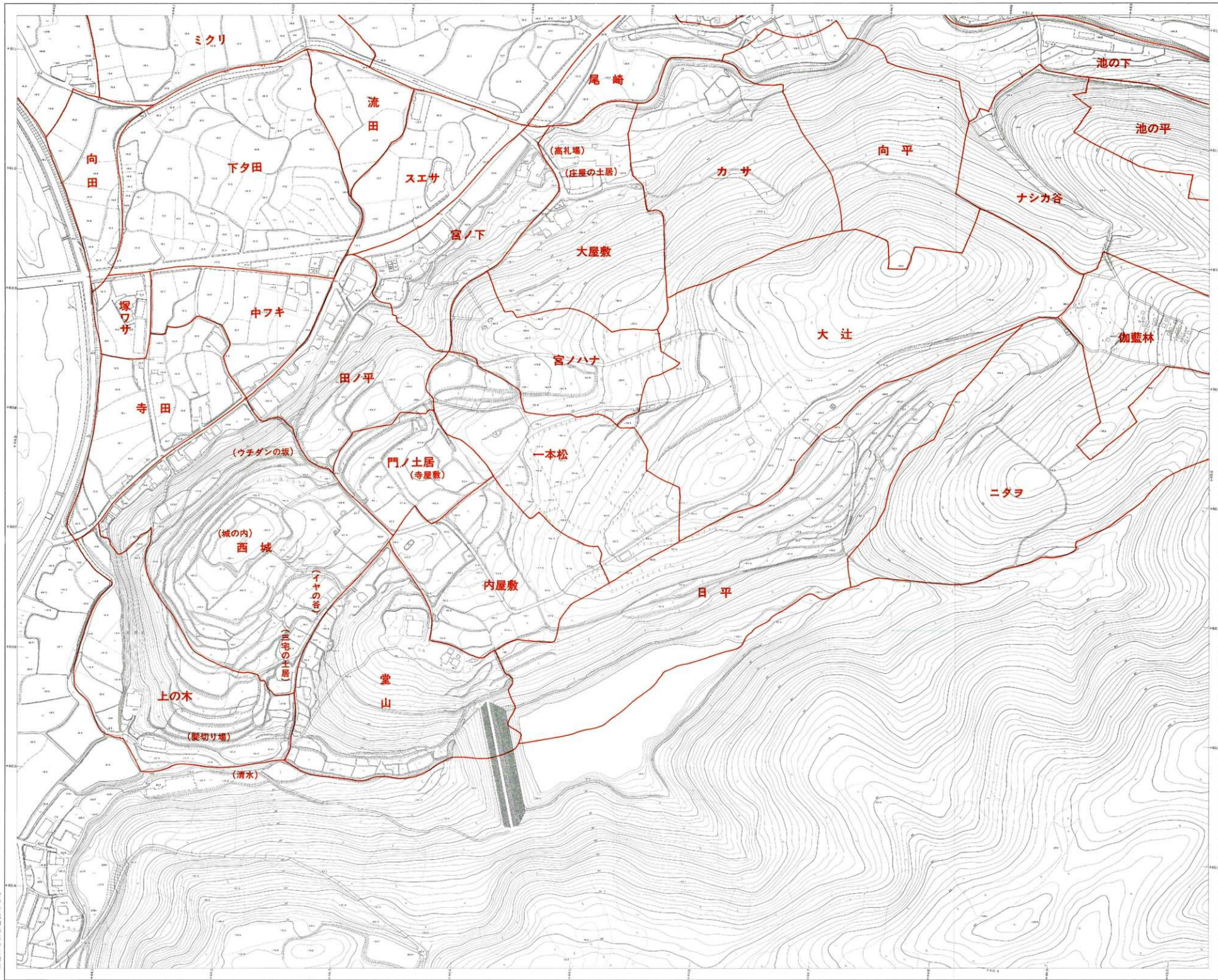
大分県立宇佐風土記の丘
歴史民俗資料館報告書第9集

国東六郷山本山本寺 智恩寺

—発掘調査報告—

発 行 日 平成4年3月31日
編集・発行 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
宇佐市大字高森字京塚 〒872-01
Tel 0978 (37) 2100
印 刷 明治印刷株式会社
宇佐市大字長副507

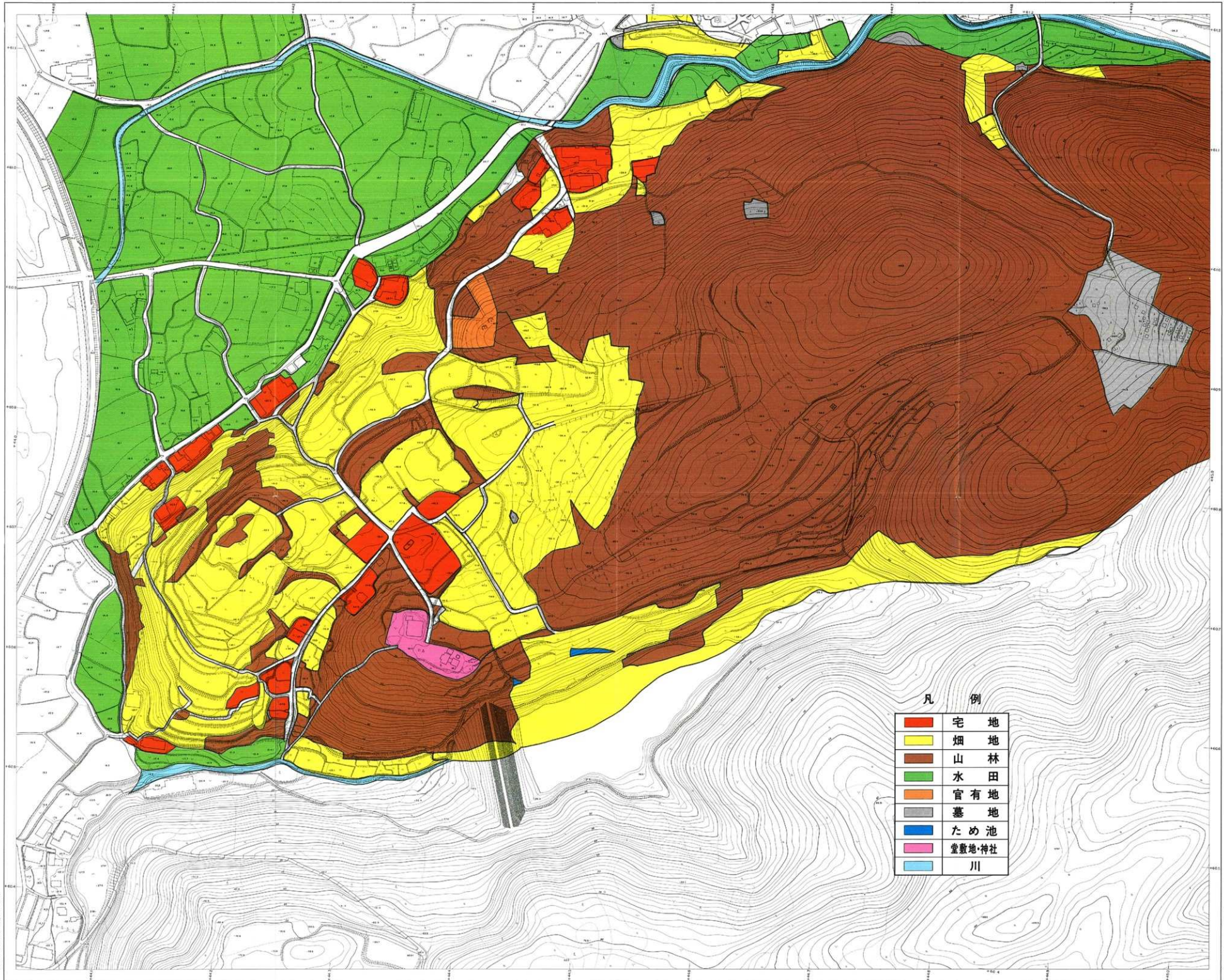
附図1 智恩寺小字境界図



歴大
史分
民立
俗立
資土
料記
の館
任

アリア

附図2 智恩寺地区土地利用復元図



記号
 □ 宗廟
 ○ 塚
 △ 祠
 ☆ 神社
 ※ 寺
 ● 井
 ○ 池
 ○ 田
 ○ 畑
 ○ 山
 ○ 林
 ○ 水
 ○ 田
 ○ 官
 ○ 有
 ○ 地
 ○ 墓
 ○ 地
 ○ ため
 ○ 池
 ○ 堂
 ○ 敷
 ○ 地
 ○ 社
 ○ 社
 ○ 川

明治二十一年作成地籍図による

歴大分県立宇佐土記の館

